【学位申請論文題目】

菅原道真研究～『菅家後集』所載の作品論と編纂事情考（注釈を通して）～

焼山　廣志

【論文目次】

序［論文概要］

第一部　［作品論］

「1. 太宰府謫居一期　昌泰四年(九〇一)春～延喜元年(九〇一)秋」

「叙意一百韻」

「秋夜」

「哭奥州藤使君」

「讀開元詔書」

「慰少男女」

「2. 太宰府謫居二期　延喜元年(九〇一)初冬～延喜二年(九〇二)早春」

「東山小雪」

「雪夜思家竹」

「梅花」

「3．太宰府謫居三期　延喜二年（九〇二）春～延喜二年（九〇二）冬」

「官舎幽趣」

「偶作」

第二部　［編纂事情考］

第三部　初出論文一覧

資料編　『菅家後集』【注釈】関連　論文一覧

序 〔論文概要〕

【論文概要】

序　【作品概要】

今回、研究対象とした『菅家後集』の概略として、小島憲之氏の言及を以下に引用する。

「醍醐天皇の代になって五年目、昌泰(しょうたい)、四年(九〇一)正月二十五日、五十七歳の道真は突然罪を問われ、太宰権帥(だざいのごんのそち)に左遷されて都を追われた。上流貴族を流罪にする時は左遷の形をとることになっており、道真は事実上大宰府に流されたのである。『扶桑略記』によれば、道真を重用した宇多上皇はこの知らせを聞いて急ぎ参内し天皇を諫止しようとしたが、警備にはばまれて門内に入ることもできなかったという。運命を一変させたこのできごとから約二年の後、延喜三年(九〇三)二月二十五日、道真は配所での苦しい生活の末に死を迎えるが、その間の詩集は『菅家後集』という名の詩集となって今に伝わっている。『菅家後集』は、その奥書によれば、もと『西府新詩』(「西府」は都から西方にあたる大宰府)と題され、死に臨んだ道真から封印して紀長谷雄に送られたという。」

(日本漢詩人選集『菅原道真』一四一～一四二頁)

と説明されているのが本稿で取り上げる作品群である。

第一部　【作品論】

この『菅家後集』中　太宰府謫居時代に詠作された「五言　自詠」から「謫居春雪」までの作品三十九首の注釈作業を通して、作品の内容から　大きく以下の三期に分類し、菅原道真の詠作姿勢を探る試みをした。

「1. 太宰府謫居一期　昌泰四年(九〇一)春～延喜元年(九〇一)秋」
「2. 太宰府謫居二期　延喜元年(九〇一)初冬～延喜二年(九〇二)早春」
「3. 太宰府謫居三期　延喜二年(九〇二)春～延喜二年(九〇二)冬」

この分類に属する主要作品を具体的に考察し　その作品論を通してその期の菅原道真の詠作姿勢の特色を概観する。

1. 太宰府謫居一期　昌泰四年(九〇一)春～延喜元年(九〇一)秋

この昌泰四年は七月十五日に「昌泰」が「延喜」に改元されている。(『日本紀略』醍醐天皇，昌泰四年七月十五日の条に、「改昌泰四年為延喜元年」とある.)この年には「敍意一百韻」を始めとする「詠楽天北窓三友詩」「哭奥州藤使君」等二十韻以上の長編の大作が矢継早に詠作されている. いずれも秋までに詠まれたものだと考えられる。右大臣の地位から突如として職を解かれ、太宰府に左遷させられたその現実を直視出来るだけの精神的余裕を持ち得ず、それをどう受け入れれば良いのかに苦悩する、その痛々しいほどの心の葛藤が作品の根底に流れているものが、この期のものと考えられる。

ここでは「敍意一百韻」「哭奥州藤使君」の長編二大作及び「秋夜」「讀開元詔書」「慰少男女」の三首を取り上げて作品論を展開する。

2. 太宰府謫居二期　延喜元年(九〇一)初冬～延喜二年(九〇二)早春

この期の作品としては「東山小雪」から「梅花」あたりのものを想定している。この時期、延喜元年の冬を迎える頃から道真の詩風に変化の兆しが見えて来るように思う。具体的なこの期の道真の詩の傾向として次の二点を指摘することが出来る。「1．太宰府謫居一期」時に詠まれている作品群に比して道真自身が、精神的に或る種の安定が見られるようになったことが大きいと思われるが、「自然の事物」を「事物」として見つめることが出来るようになり、その「事物」に「自己の感情移入」を図る作品が目立つようになる点が、まず一点目である。そしてその「自己の感情」とは、主に「望京の念」と換言してもよい。

そして二点目は、道真の得意とする「見立て」の技法を駆使する作品が目立つ点である。これは道真の「詩人」としての自負、執念なるものが或る種の精神の安定期を迎え、表出した事象とも言い換えられる。

ここでは「東山小雪」「雪夜思家竹」「梅花」の三首を取り上げ考察をする。

「3．太宰府謫居三期　延喜二年(九〇二)春～延喜二年(九〇二)冬」

この期の作品としては「奉哭吏部王」から「偶作」を想定している。この期の作品群の特質として次の二点を指摘したい。

その一つは、「仏教への傾倒」である。死期の近い事を悟りつつある道真にとって死後の世界に心の安泰を求めようと、仏教に心の支えを得んとする姿勢がより鮮明になり、仏教用語が詩語として多用されているのがこの期の作品の特徴とうつる。

そして二点目は一点目と深く関わるが、死期の近い事を自覚しつつ、我が日々の謫居生活に何の好転も見出せないことから来る諦念、もしくは意識的にそうしようとする「則天去私」とも言うべき心情に裏打ちされた詠作姿勢が見られる点である。大曽根章介氏の言われる「現世の苦悩を払拭し超俗悟脱の境地に近づこうと真摯な努力をしながらも、遂に果すことの出来ぬ弱い人間の姿が現れている。」や「心情を率直にしかも平明流麗な語句で表現した晩年の詩篇は、至純最高の詩境に到達したものといえよう」と指摘されている事が主にこの期の作品を指しているものと思われる。

ここでは「官舎幽趣」「偶作」二作品を取り上げ作品論を展開する。

第二部　「編纂事情考」

菅原道真の太宰府謫居時代に詠作された作品は巻頭の「自詠」から巻尾の「謫居春雪」まで三十九首残されている。それらの作品は今までほぼ制作時順に配列されていると考えられて来た。

今回取り上げて考察を試みた作品以外を含む全作品の注釈をし終えて見えて来たのは、概ね、制作時順に配列の方針を取りつつも、そこに菅原道真の後世に自己の生き様を託そうとする意図の基にこの『菅家後集』が編纂されているのではないかという事である。とりわけ巻尾の「謫居春雪」にそれが顕著であるように思う。

今までこの詩を辞世の句だというとらえ方が定説のようになっている。ところが、太宰府謫居中に詠まれた作品の注釈を施す作業を続けるなかで、この巻尾に置かれている「謫居春雪」は本当は辞世の詩ではないのではないかという疑問が生じて来た。本稿でその疑問に対する筆者の見解を提起し、更には太宰府の地より、盟友紀長谷雄に託した『菅家後集』の編纂事情の一端を考察した。

第三部

初出論文一覧

資料編　『菅家後集』【注釈】関連　論文一覧

本文考察に挙げる作品群は、以下の「凡例」にならう。

凡例

一、底本には、川口久雄氏が岩波古典大系本に採られている、「前田家尊経閣所蔵本」を用いた。

一、原詩のみ正字で載せ、語釈・通釈等は現代かなづかいを用いた。

一、注釈にあたり、菅原道真の『菅家後集』の作品番号は、川口久雄校注、岩波日本古典文学大系本のそれにならい、参考として引用した嶋田忠臣の『田氏家集』の作品番号は、内田順子編『田氏家集索引』に拠り、紀長谷雄の漢詩文の作品番号は、三木雅博編『紀長谷雄漢詩文集並びに漢字索引』に拠った。又白居易の『白氏文集』の作品番号は花房英樹著『白氏文集の批判的研究』のそれにならった。

第一部　〔作品論〕

「1. 太宰府謫居一期　昌泰四年（九〇一）春～延喜元年（九〇二）秋」

「敍意一百韻」

「秋夜」

「哭奥州藤使君」

「讀開元詔書」

「慰少男女」

この昌泰四年は七月十五日に「昌泰」が「延喜」に改元されている。(『日本紀略』醍醐天皇，昌泰四年七月十五日の条に、「改昌泰四年為延喜元年」とある．)この年には「叙意一百韻」を始めとする「詠楽天北窓三友詩」「哭奥州藤使君」等二十韻以上の長編の大作が矢継早に詠作されている．いずれも秋までに詠まれたものだと考えられる。右大臣の地位から突如として職を解かれ、太宰府に左遷させられたその現実を直視出来るだけの精神的余裕を持ち得ず、それをどう受け入れれば良いのかに苦悩する、その痛々しいほどの心の葛藤が作品の根底に流れているものが、この期のものと考えられる。

ここでは「叙意一百韻」「哭奥州藤使君」の長編二大作及び「秋夜」「讀開元詔書」「慰少男女」の三首を取り上げて作品論を展開する。

◆菅原道真の太宰府時代の漢詩「敍意一百韻」の構成論考

――「敍意一百韻」の重層構造についての考察　一試論――

一

先の拙稿[注1]で筆者は谷口孝介氏の著『菅原道真の詩と学問』の中の一文[注5]を引用しながら次のような見解を提起した。

「それは〝この「敍意一百韻」の詩句内容が重層構造になっているのではないか〟という点である。

つまり、この「敍意一百韻」は、道真の意に反して僻地の太宰の地に左遷された「天涯孤独」の絶望的な状況の中で詠まれた作品である。従って、道真の心を慰むものは、同境遇の人々の生き方に倣うしかなかったのではないか。しかもそれらの人々は道真の置かれている状況から考えて中国古典籍の中にしか求め得なかったはずである。故にこの作品中には、多くの古人の事例が散りばめられている。この点からいえば、この「敍意一百韻」は、道真の博学多識な事を、改めて読むものに印象付ける作品ともなっている。こうした詩句の中に込められた中国古典籍の故事・逸話・事例を丹念に読み解く作業を通してこの作品の意図するものを表出させるやり方が求められる一方で、先に引用した谷口氏の指摘されている、白居易・元稹の「東南行一百韻」「酬楽天東南行詩一

百韻」両詩からの投影を念頭においた、道真の詩句内容の深層的なところの分析も求められる。そうしたものを重層させて考察した中から初めてこの「敍意一百韻」で道真の言わんとするものが見えてくるのではないかという考え方である。」（菅原道真研究――『菅家後集』全注釈（十四）～三〇頁～三十二頁～）

そこで筆者は、この「敍意一百韻」を複数回に分けて、前者の分析方法である「字句」そのものに込められている中国古典籍からの投影の指摘を主眼に注釈を進めて来た。(注2)

このことを踏まえて今回、改めて本詩に採られている出典の分析及び、全体の構成・全編に流れる詩情等の分析を試み、更に深層に秘められているものを探りたいと思う。

二

まず、この作品を字句の考察を主眼に読み解き、改めてこの作品の構成を考察してみると、十句毎の二十段落で、構築されているという結論に達した。以下、そのことを一段落ずつ例示して行きたい。

この二〇〇句全篇は、道真自身の京から突如太宰の地への左遷が決行された二月から、この詩の制作されたと想定される秋の九月まで、季節で言うと、春・夏・秋の道真自身が目にした実景を通し、それを基軸として、時折々の心象風景を、布をつむぐように織り込んでいく句作りがなされているように思える。そこには中国の古典籍を効果的に織り込みながら詩空間を拡げつつ緻密な構想のもとで句作りがなされており、決して感情のおもむくまま激情を紙に書きなぐったような類の作品ではない事を以下に実証してみる。

【一段】

この冒頭十句では、太宰府左遷が決行された事情・事態が説明されている。この段は一九一句から二〇〇句の「二十段」と呼応をなす構成と考える。一句目の「生涯定地無し」二句目の「運命皇天に在り」は、一九七句「分は糾纏に交はるを知る」一九八句「命は詎ぞ筵篿に質さん」と対峙させることで道真の言わんとしていることがより鮮明となる構成法を意図していると考える。

1　生涯無定地　　生涯　定地　無し
2　運命在皇天　　運命　皇天に在り
3　職豈圖西府　　職　豈に　西府を圖んや
4　名何替左遷　　名　何ぞ　左遷に替らんや
5　貶降輕自芥　　貶降せらるること　芥より輕し
6　駈放急如弦　　駈放せらるること　弦より急なり
7　換赧顔愈厚　　換赧して　顔　愈いよ　厚し
8　章狂踵不旋　　章狂して　踵　施らさず
9　牛涔皆埳穽　　牛涔　皆　埳穽
10　鳥路惣鷹鸇　　鳥路　惣て　鷹鸇

【二段】

この十句では、「春」の時候を基軸にして左遷先である太宰府への道中の心情・情景の概観を詠う。十三句目から十六句目で「太宰府に着くまで、とりわけここでは、京での別離の情景と心情」を、蜀の猿の故事と、同じく蜀の望帝の化身であると鵑の故事を響かせて、それがいかに非情で、過酷なものであったのかを言外に込めた詠いぶりとなっている

11 老僕長扶杖　老僕　長に　杖に扶けらる
12 疲驂数費鞭　疲驂　数しば　鞭を費す
13 臨岐腸易斷　岐に臨みて　腸　断へ易し
14 望闕眼將穿　闕を望みて　眼　将に穿んとす
15 落涙欺朝露　落涙、朝露を欺く
16 啼聲亂杜鵑　啼聲　杜鵑を乱す
17 街衢塵冪冪　街衢に塵　冪冪たり
18 原野草芊芊　原野に　草　芊芊たり
19 傳送蹄傷馬　傳は送る　蹄の傷める馬
20 江迎尾損船　江は迎ふ　尾の損する

【三段】

この十句では、二段に続いて左遷先の太宰府までの道中の懐古と太宰府に到着した直後の心情を赤裸々に詠う。

21　郵亭餘五十　　郵亭　五十に余れり
22　程里半三千　　程里　三千に半なり
23　税駕南樓下　　駕を税す　南樓の下
24　停車右郭邊　　車を停む　右郭の邊
25　宛然開小閣　　宛然たり。小閣を開けば
26　覩者満遐阡　　覩る者　遐阡に満つるを
27　嘔吐胸猶逆　　嘔吐して胸猶ほ逆らひ
28　虚勞脚且癬　　虚勞して脚且つ癬めり
29　肥膚争刻鏤　　肥膚は争ひて刻鏤す
30　精魄幾磨研　　精魄は幾ど磨研

【四段】

この十句では、太宰府到着後、謫居に移るまでの状況を記す。三十一句・三十二句、三十三句・三十四句の詩内容は、いずれも太宰の地での到着から謫居に移るまでの状況、つまり太宰の地に着いて仮に与えられた宿所から数日を経て荒れ果てた、これからの宿舎となる官舎に移る、その心情を詠んでいるものと理解したい。

31 信宿常羈泊　　信宿は常に羈泊
32 低迷卽倒懸　　低迷は卽ち倒懸
33 村翁談往事　　村翁往事を談りて
34 客館忘留連　　客館留連を忘る
35 妖害何因避　　妖害何に因りてか避けむ
36 悪名遂欲蠲　　悪名は遂に蠲かんと欲す
37 未曽邪勝正　　未だ曽て邪は正に勝たざれど
38 或以實帰権　　或は實を以て権に帰す
39 移徙空官舍　　移徙るは　空しき官舍
40 修營朽采椽　　修營す　朽ちたる采椽

【五段】

この十句では、四段より続いて、太宰府謫居の描写とその心境を詠う。

41 荒涼多失道　　荒涼として多く道を失ふ
42 廣袤少盈廛　　廣袤廛に盈つること少し
43 井壅堆沙甃　　井壅がって沙を堆くして甃む
44 籬疎割竹編　　籬疎にして竹を割りて編む

45 陳根葵一畝　　陳根の葵　一畝
46 斑蘚石孤拳　　斑蘚の石　孤拳
47 物色留仍舊　　物色留って舊に仍る
48 人居就不悛　　人居　就いて悛らず
49 随時雖褊切　　時に随ひて褊切なりと雖も
50 恕己稍安便　　己を恕して稍安便なり

【六段】

この十句では、太宰府謫居での生活においての精神状況を詠む。太宰の地に着いて荒れ果てたこれからの宿舎となる官舎に移る、その時から新たに始まる精神的苦痛、孤独感、疎外感、寂寥感、そして何よりも辛かったのは、こうした厳しい現実を、現実のものとして受け入れなければなかった苛酷な現状ではなかったのか。その道真が心の支えとして得ようとしたものは、この今の苛酷な現状と類似した体験を持つ、過去の偉人たちであった。そして、それに倣い、追体験をする以外に、今の自分を鼓舞できるものは存在しなかった所に、この詩を創作しようとした時に発想を得たと思われる白居易らのそれとは全く異なる、「道真の筆舌に尽し難い孤独感があったこと」を改めて想起する必要があるのではないだろうか。

51句「同病求朋友」や52句「助憂問古先」は、55句「傅築巌邊耦」に込められた「傅説」の故事の出典である『史記』等の一文の内容であり、『孟子』「告子章句下」の一文の内容に他ならない。とりわけこの『孟子』の一文が道真をどれほど勇気付けたものであったか、想像に難くない。そして更に、56句の「范舟湖上扁」に込められた「范蠡」

の故事を理解すれば、権力者の圏外に自分の身を置くことの出来なかった我が身の無念さが、一層際立ってくるのである。そしてこの道真の、古人に求めるものは、57句の「長沙沙卑濕」に込められた賈誼の故事や58句目の「湘水水𤅍潦」に込められた屈原の故事の世界なのである。

あわせて、53句の「才能終蹇剥」の意味するものは、「傅説」の故事が理解できれば、55句目の「傅築巌邊耦」の句内容と呼応しているものであり、同じく54句目の「富貴本迍邅」の意味するものは、56句目の「范舟湖上扁」の句内容である「范蠡」の故事と見事に呼応している句作りになっていることも見逃してはならないと思う。

51　同病求朋友　　病を同じくして朋友を求め
52　助憂問古先　　憂を助けて古先を問ふ
53　才能終蹇剥　　才能終に蹇剥
54　富貴本迍邅　　富貴本迍邅
55　傅築巌邊耦　　傅が築は巌邊に耦し
56　范舟湖上扁　　范が舟は湖上に扁なり
57　長沙沙卑湿　　長沙の沙卑湿
58　湘水水𤅍潦　　湘水の水𤅍潦
59　爵我空崇品　　我を爵して空しく品を崇くす
60　官誰只備員　　誰をか官としてか只、員に備ふ

【七段】

この十句では、春から初夏への季節の移行を基軸に、太宰府謫居の生活における精神状況を描写する。ここでは、気持ちの転換をはかるべく、太宰の風土に自分自身を順応させようと努めたことを強調する。それが「八段」以降で全て裏切られる状況であったことの伏線として機能している句作りである。六十一句、六十二句の「故人」「親族」はいずれも実在の人物を想起した詩語ではなく比喩表現として使用されているものと理解した。

61　故人分食噉　　故人　食を分けて噉はしめ
62　親族把衣湔　　親族は衣を把って湔ふ
63　既慰生之苦　　既に生の苦しみを慰む
64　何嫌死不遄　　何ぞ嫌はん、死の遄やかならざることを
65　春竈由造化　　春竈は造化に由る
66　忖度委陶甄　　忖度は陶甄に委す
67　荏苒青陽盡　　荏苒として青陽盡く
68　清和朱景妍　　清和朱景妍なり
69　土風須漸漬　　土風須く漸漬なり
70　習俗擬相沿　　習俗相沿んと擬す

【八段】

この十句では、「七段」を受けて太宰府謫居の生活描写、とりわけ太宰の地の風俗を、徳化の及ばぬ無法地帯化している悲惨な様として、実風景を通して詠う。この句には、既に川口久雄氏や金原理氏に指摘があるように白居易が、(注3)「東南行一百韻」で、江州司馬に貶されその江南地方の風俗を描いている句内容の投影が強く窺える。

71 苦味塩焼木　苦味の塩、木を焼き
72 邪羸布當錢　邪羸(じゃえい)の布錢(ぜに)に當(あ)つ
73 殺傷軽下手　殺傷軽しく手を下し
74 羣盗穏差肩　羣盗穏やかに肩を差す
75 魚袋出垂釣　魚袋(ぎょたいいだ)出して釣を垂れ
76 箅篁換叩舷　箅篁(へいせいふなばた)舷を叩くに換ふ
77 貪婪興販米　貪婪(どんらん)販米を興し
78 行濫貢官綿　行濫(こうらん)官綿として貢す
79 鮑肆方遺臭　鮑肆(ほうしまさ)方に臭を遺し
80 琴聲未改絃　琴聲未だ絃を改めず

已上十句、傷習俗不可移（刊本により補う）已上の十句、習俗の移すべからざるを傷む

【九段】

この十句では、「初夏から梅雨」の時候を基軸に、「太宰府謫居の生活の実景描写」がなされている。八十九句・九〇句には、白居易・元稹の句内容からの投影が強く窺える。

81　與誰開口説　　誰と與にか口を開きて説かむ
82　唯獨曲肱眠　　唯獨り肱を曲げて眠る
83　鬱蒸陰霖雨　　鬱蒸たり陰霖の雨
84　晨炊断絶煙　　晨炊　煙を断絶す
85　魚觀生竈釜　　魚觀　竈釜に生る
86　蛙咒聒階甎　　蛙咒　階甎に聒し
87　野豎供蔬菜　　野豎　蔬菜を供す
88　廝児作薄饘　　廝児　薄饘を作る
89　瘦同失雌鶴　　瘦せては雌を失ふ鶴に同じ
90　飢類嚇雛鳶　　飢ゑては雛を嚇す鳶に類へり

【十段】

この十句では、「梅雨の合い間の晴天」の実景を基軸に、その実景と呼応するかのように気持ちの転換をはかるべく「老荘の世界」に身を置こうとする心象風景を描く。

91 壁堕防奔溜　壁　堕(やぶ)れて奔溜(ほむりう)を防ぎ
92 庭渥導濁涓　庭　渥にして濁涓(だくけん)を導く
93 紅輪晴後轉　紅輪　晴後に轉じ
94 翠幕晩来褰　翠幕　晩来　褰(かか)ぐ
95 遇境虚生白　境に遇いては　虚白を生じ
96 遊談暗入玄　遊談しては　暗(ふか)く玄(げん)に入る
97 老君垂迹淡　老君迹(あと)を垂ること淡なり
98 荘叟處身偏　荘叟身を處すること偏なり
99 性莫乖常道　性は常道に乖(そむ)くこと莫し
100 宗當任自然　宗は當に自然に任すべし

【十一段】

この十句では、老荘の世界に我が身を置くことに飽き足らず、「儒家として作詩への執着」を詠う。ここには、「477北窓三友詩」の中でも繰り返しうたわれているように、「詩は志の之く所なり。心に在るを志と為し、言に発して詩と為る」という『詩経』「大序」の一文を拠り所として、為政者に詩という詠作を通し、諷諫する使命を持つ「儒家」としての道真自身の我が身の再認識・矜持が込められている。単なる風流風雅をめでる心情を詠んでいるのではない。

101 殷勤齊物論　殷勤たり齊物論

102 洽恰寓言篇　　洽恰たり寓言篇
103 景致幽於夢　　景致夢よりも幽かなり
104 風情癖未痊　　風情の癖未だ痊まず
105 文華何處落　　文華　何れの處にか落つる
106 感緒此間牽　　感緒　此の間に牽かれたり
107 慰志憐馮衍　　志を慰めて馮衍を憐れむ
108 銷憂羨仲宣　　憂を銷して仲宣を羨む
109 詞拑觸忌諱　　詞　拑むは忌諱に触るればなり
110 筆禿迷麁癲　　筆　禿するは麁癲に迷えばなり

【十二段】

この十句では、「儒家」としての矜持も意味をなさない太宰の謫居生活で、我が身の苦悩の離脱を試みようとして「仏教への思い」を詠う。そこには太宰の地で道真自身が初めて味わう長雨の続くうっとうしい梅雨から真夏の猛暑の時候の中に身を置くことで生じた心象風景が描かれているのである。

111 草得誰相視　　草は誰に相視することを得ん
112 句無人共聯　　句は人の共に聯ぬること無し
113 思将臨紙写　　思将ては紙に臨み写す

114 詠取著燈燃　詠取ては燈に著けて燃す
115 反覆何遺恨　反覆す何ぞ遺恨
116 辛酸是宿縁　辛酸是れ宿縁
117 微々抛愛楽　微々愛楽を抛ち
118 漸漸謝葷膻　漸漸葷膻を謝す
119 合掌帰依仏　合掌して仏に帰依す
120 廻心学習禅　廻心して禅を学習す

【十三段】

この十句では、「盛夏から初秋」の時候を基軸に、「太宰府謫居の今の心象風景」を詠う。具体的には仏教の世界を希求することにより己の煩悩を排除しようと試みる。そこには太宰の地の夜空に浮かぶ月と蓮の花の開花の情景に触発されてのそれであると思う。

121 厭離今罪網　厭離す今の罪網
122 恭敬古真筌　恭敬す古の真筌
123 皎潔空観月　皎潔たり空観の月
124 開敷妙法蓮　開敷す妙法の蓮
125 誓弘無誑語　誓弘して誑語無く

126 福厚不唐捐　福厚くして唐捐せず
127 熱悩煩纔滅　熱悩の煩い纔に滅し
128 涼気序罔愆　涼気の序愆つこと罔し
129 灰飛推律候　灰飛びて律候を推す
130 斗建指星躔　斗建して星躔を指す

【十四段】

この十句では、「酷暑が去り、仲秋を迎えた時候の心象風景」を詠う。百三十八句で「九見桂華圓」と詠むように、陰暦九月、仲秋の名月を鑑賞する時候を迎えたのである。こうした本格的秋の気配、秋の事物に触れるにつけ、今の自分自身の置かれている事態の悲惨さ、そしてその事態の打破には、京に戻るしかないのに、それがままならぬ心情、望郷の念に、潘安仁の『秋興賦』の詩情を投影させ、それを背景に切なく詠う。

131 世路間彌隘　世路間たりて彌隘し
132 家書絶不傳　家書絶えて傳はらず
133 帶寬泣紫毀　帶寬びて紫の毀るるに泣く
134 鏡照嘆華顛　鏡照して華顛を嘆く
135 旅思排雲雁　旅の思ひは雲を排する雁
136 寒吟抱樸蝉　寒吟は樸を抱く蝉

137 一逢蘭氣敗　一たび蘭氣の敗るに逢ひ
138 九見桂華圓　九たび桂華の圓なるを見る
139 掃室安懸磬　室を掃ひて懸磬に安んず
140 扃門嬾脱鍵　門を扃して脱鍵に懶し

【十五段】

この十句では、秋の風物に触発されている「心象風景」を詠う。ここには、わが身を百四十一・百四十二句で「跛牂重有縶（跛牂　重ねて縶有り）瘡雀更加攣（瘡雀　更に攣を加ふ）」と詠むように今の太宰の我が身の姿を「跛牂」「瘡雀」と自虐的に形容する。そこには老齢に加え心身ともに苛酷さを増す太宰の謫居生活から来る我が身の衰えと共に、かつて要職を拝したときに、辞退したい旨の文書を作成した中で使った、我が身を卑下する文言が、今、この太宰の地で現実のものとなっていることのやりきれなさが切々と句裏より読み手に伝わってくる。そして昨秋は京の地でこの秋の風物を味わっていた我が身を想起するに、一層の望郷の念と現状への悲惨さが拡張されてしまう心情を詠う。

141 跛牂重有縶　跛牂　重ねて縶有り
142 瘡雀更加攣　瘡雀　更に攣を加ふ
143 強望垣牆外　強いて望む　垣牆の外
144 偸行戸牖前　偸かに行く　戸牖の前

145 山看遥縹緑　山には遥かにして漂緑なるを看る
146 水憶遠潺湲　水は遠くして潺湲たるを憶ふ
147 俄頃羸身健　俄頃羸身健やかに
148 等閑残命延　等閑残命延ぶ
149 形馳魂怳怳　形馳せて魂怳々たり
150 目想涕漣漣　目想いて涕漣々たり

【十六段】

この十句では、京都のことを思い出し、官途についてからの半生を振り返り、鑽堅研微し祖業を受け継いだ儒家として、また祖業は「儒林」で人々の間に高くそびえていると誇っている。讃岐の国守としても立派に治め功績を挙げたとの自負を述べる。

151 京國歸何日　京国に帰らんこと何れの日ぞ
152 故園來幾年　故園に来ること幾年ぞ
153 却尋初營仕　却って尋ぬ初めて仕を營みしことを
154 追計昔鑽堅　追ひて計ふ昔堅きを鑽りしことを
155 射毎占正鵠　射ては毎に正鵠を占む
156 烹寧壊小鮮　烹ては寧ぞ小鮮を壊らんや

157 東堂一枝折　東堂一枝折る
158 南海百城専　南海百城専らにす
159 祖業儒林聳　祖業儒林聳く
160 州巧吏部銓　州功吏部銓る

【十七段】

この十句では、分不相応に、矢継ぎ早に、重責の任を与えられ栄進を重ねていったことを詠う。そして細心の意を用いて帝の補佐をして来たと、その心情を吐露する。

161 光榮頻照耀　光榮は頻に照耀す
162 組珮競榮纏　組珮は競ひて榮纏す
163 責重千鈞石　責は千鈞の石よりも重し
164 臨深万仞淵　臨むことは万仞の淵よりも深し
165 具瞻兼将相　具瞻将相を兼ねたることを
166 僉曰缺勲賢　僉曰く勲賢を缺くと
167 試製嫌傷錦　製を試みては錦を傷るを嫌ひ
168 操刀慎缺鉛　刀を操りては鉛を缺くことを慎しむ
169 兢兢馴鳳扆　おそれ戒めて慎みながら、帝の後ろの屏風に馴れるようにした

170　懍懍撫龍泉　（慎み慎みて帝に従ったものである）。
危ぶみおそれながら宝剣を撫でていたのである
（おそるおそる帝に寄り添い補佐してきた）。

【十八段】

この十句では、ますます栄進を重ね、公私ともに政に身を置くようになったこと、それに対し、不才ながらも誠実にそして精一杯帝に仕えてきたこと。又、その帝への恩に報いることが出来ないまま、この太宰の地に流されてしまったこと。そしてこの地で終焉を迎えることになるかもしれないことへのやりきれなさと無念さを詠う。この辛い心情を慰撫するものとして、百七十九句、百八十句で、潘岳・張衡の二人の事例を『文選』の賦作品より持ち出している。そしてそこに表出している古人、二人の心情を我が身になぞらえ、時を得ないまま、終わりを迎えざるを得なかった者への同情と世の不条理に一層のやりきれなさと憤りを内在させて、次の「十九段」に続ける内容となっている。

171　脱履黄埃俗　履（くつ）を脱ぐ黄埃の俗
172　交襟紫府仙　襟を交ふ紫府の仙
173　桜花通夜宴　桜花通夜の宴
174　菊酒後朝筵　菊酒後朝の筵
禁中密宴、余毎預之　禁中密宴、余毎に之に預かる

175 器拙承豊澤　　器拙くして豊澤を承け
176 舟頑済巨川　　舟頑にして巨川を済る
177 國家恩未報　　国家の恩未だ報いざるに
178 溝壑恐先填　　溝壑先ず填まらんことを恐る
179 潘岳非忘宅　　潘岳宅を忘るるに非ず
180 張衡豈廃田　　張衡豈田を廃せむや。

【十九段】

この十句では、左遷されるに到った状況の分析とそのことに対する心情を吐露する。才あるが為に却って災いに遭う『文選』や『荘子』の故事を踏まえて、自分自身の高位に登ったことが、この今の状況を生んだと悔やむ。またその災いが我が身のみならず家族、菅家一門に苛酷なまでに及び、今まで誠心誠意務めて来たことが却ってあだとなったことを嘆き、憤るその憤怒の念が横溢する内容となっている。

181 風摧同木秀　　風に摧けて木の秀づるに同じ
182 燈滅異膏煎　　燈滅えて膏の煎らるるに異なり
183 苟可営々止　　苟しくも営々として止まるべし
184 胡爲脛々全　　胡爲れぞ脛々として全からむ
185 覆巣憎轂卵　　巣を覆して轂卵を憎み

186 搜穴叱蚳蝝　穴を搜して蚳蝝を叱す
187 法酷金科結　法、酷して　金科　結び
188 功休石柱鐫　功、休して　石柱　鐫る
189 悔忠成甲冑　忠の、甲冑と成らんことを悔い
190 悲罰痛戈鋋　罰の、戈鋋よりも痛きことを悲しむ

【二十段】

この結末の十句では、『晉書』の「羊祜傳」にある故事を踏まえて、京に戻ることもかなわず自分自身が太宰の地で命を落とすであろう予感にどこにも怒りを吐露することも出来ない無念さと、現状の非情さにおののきつつ、これも己れの宿命だと諦念する心情が流れる。これは、先に指摘したように、「一段」と対峙させればより鮮明になる。ここにも道真の見事な作品構成への配慮がなされていることを再確認できる。

そして、この句の一九九句、二〇〇句こそがこの作品の主題となっている。つまり、白居易・元稹等の唱和詩の内容を一方で対比させれば、そうした心を許し合える友を持ちえぬ、道真の「天涯孤独の底知れぬ心の闇」の叫びである。

191 璅璅黄茅屋　璅璅たり　黄茅の屋
192 荒荒碧海壖　荒荒たり　碧海の壖
193 吾廬能足矣　吾が廬は能く足りぬ

194 此地信終焉　　此の地は信に終焉ならん
195 縱使魂思峴　　縱使魂　峴を思ふとも
196 其如骨葬燕　　骨の燕に葬らるを其如せん
197 分知交糾纏　　分は糾纏に交はるを知る
198 命詎質筌簿　　命は詎ぞ筌簿に質さん
199 敍意千言裏　　意を敍ぶ千言のうち裏
200 何人一可憐　　何人か一に憐むべき

[構成論　総括]

以上二〇〇句を十句毎、「二十段」に分けながら構成を考察して来た。ここで総括をしてみる。この「敍意一百韻」は、五言二百句からなる排律という定型で構成され、しかも、全篇に亘り下平声「先」韻による一韻到底が貫かれている。又、全篇、奇数句と偶数句とが対をなすという徹底した構成の統一美が実践されていることにまず注目すべきである。そうした中で、句内容についても同様に、道真の意識的な構築がなされていると考えた。一方、この句構成については既に先学によりさまざまな考え方が提起されて来ている。(注4)

筆者が全篇をあえて「均一」に「十句毎」に区分することを提起した大きな根拠は、八〇句「琴聲未改絃」の句のあとに、「已上十句、傷習俗不可移」の分注が見られる（一部の写本や刊本全本）点である。傍線を引いたようにこれを、十句を一まとまりのものとして構築していることを示唆する道真自身による分注と考えたからである。詩全篇に敷延して考察すると、十句毎に二十段に区切ることで見事に、構成の統一がはかられていることが、先の具体的詩

句の例示で実証できたと思う。

つまり、この構成一つをとっても徹底的にその統一性にこだわる道真の性向とも換言できるものを指摘できるように思う。道真の美意識がそこから垣間見られるのである。

そして、この作品の構成を考える時、見逃してはならないのは、「季節の推移」を基軸としていることである。「春」から「初夏」「梅雨」「盛夏」（「残暑」）「初秋」「仲秋」という京から太宰の地に我が身を移しながら、その我が身の周辺の事を季節の推移に触発されながら詠っているという一貫した詠作姿勢を押さえておく必要がある。一見、道真の心情が、あるいは志向するものが、その時々によって大きく変わっていく様が、そこに詠作上の一貫性を欠く詠みぶりの証左とも考えられるが、これを「季節の推移」を基軸として、とらえ直すとその季節感が読者に共有されていれば道真の心情の変化が無理なく読み手に伝わることが理解できるのである。

三

［出典の分析（その一）～表層部分の投影考察～］

この章では、「敍意一百韻」の注釈を複数回に分けて公にして来たもの[注2]を、「出典の考察」に絞り論を進める。

ここでは「敍意一百韻」の詩句に道真自身が中国古典籍からの引用を明言しているもの、あるいは、それを明確に指摘できるものに特定して主なものを以下に例示した。

▼①二句目「運命在皇天」の「皇天」に込められている中国古典籍の考察

この「皇天」については、既に『書経』『楚辞』等に用例が見えることは言及した。そして更には「宋玉」の「九

辯五首」からの投影を通して考察すべきものではないかと考える。この作者である宋玉が屈原に仮託して、楚の懐王を想う心情を、道真に移すと、左遷の宣命を出した醍醐天皇、それを阻止しようとした宇多法王を想うそれと酷似していることに気付く。不本意な太宰府左遷、無実の心情を伝える術のない絶望的状況にあったであろう道真に、この宋玉の「九辯五首」は、どれほど心の支えになったか想像に難くない、まさしく道真自身の今の心情の代弁ともなっているこの作品を「皇天」という共通の詩語を使って、この道真の詩を読むものに想起させるという構造になっている所を見逃してはなるまい。

▼②十三句目「臨岐腸易斷」の「腸易斷」に込められている故事

○『世説新語』「黔免」の一文。

▼③十六句目「啼聲鵑杜亂」の「杜鵑」に込められている故事

○『文選』「蜀都賦」の「碧出萇弘之血、鳥生杜宇之魄」の注の一文

▼④五十五句目「傅築巖邊耦」の句に込められている故事について

○『史記』巻三「殷本紀」第三の一文

○『孟子』巻第十二「告子章句下」の一文

▼⑤五十六句目「范舟湖上扁」の句に込められている故事について

○『史記』巻一二九「貨殖列傳第六十九」の一文

○『蒙求』「范蠡泛湖」の一文

▼⑥五十七句目「長沙沙卑湿」の故事について

○『史記』「屈原・賈生列伝二十四」にある、文帝に仕えていた賈誼が長沙王の太傅に左遷させられた故事を響かせている。

そしてこれに続く『史記』の次の一文および、後述の『文選』の一文が、この五十七句の詩語の措辞となっている。

賈生長沙王太傅三年、有鴞飛入賈生舎、止于坐隅。楚人命鴞曰服。賈生既以謫居長沙。長沙卑湿、自以為寿不得長、傷悼之。乃爲賦以自廣。

この故事は、『漢書列伝　十八』及び『蒙求』「賈誼忌鵬」にも載せる。又、右に引用した一文は『文選』の「鵩鳥賦一首　并序」（賈誼作）にも載る。

▼⑦五十八句目「湘水水瀏樟」の故事について

○『史記』「屈原・賈生列伝二十四」にある、失意のうちに汨（べき）羅（ら）の川に入水自殺した屈原の故事を響かせている。

そしてこれに続く『史記』の一文が、この五十八句の詩語の措辞となっていると思われる。

▼⑧八十五句目「魚觀生竈釜」の表現に込められた故事の考察

○『蒙求』「范冉生塵」にある、清貧質素な人の話を踏まえる。

▼⑨八十九句目「瘦同失雌鶴」の句に込められている「鶴」についての考察

○『文選』司馬相如「長門賦一首」の中の「白鶴噭以哀號兮　孤雌跱於枯楊」の二句の用例。

○『藝文類集』「巻九十、鳥部上、鶴」の項の一文。

○『白氏文集』「0608　代書詩一百韻寄微之」にある「寡鶴摧風翮（寡鶴　風翮を摧き）」と、江州刺史に左遷させられた元稹を案じている句内容。

▼⑩九十句目「飢類嚇雛鳶」の句に込められている「嚇雛鳶」についての考察

○『荘子』「秋水」の一文。

○元稹「酬楽天東南行一百韻」にある「鵷鷺鳥方求侶、鴟鳶已嚇雛」（傍線筆者）の句内容。

▼⑪九十八句目の「荘叟」について

○『史記』「老子・韓非列伝第三」の一文。

▼⑫一〇七句目馮衍について

○『蒙求』「馮衍帰里」の一文。

▼⑬一〇八句目仲宣について

○文選』「登楼賦一首」の内容を踏まえる。

▼⑭一三四句目「鏡照嘆花顛」一三五句「旅思排雲雁」一三六句「寒吟抱樸蝉」に投影されている古典籍の考察

道真が太宰の謫居で初めて味わった梅雨・酷暑に悩まされながら、どれほど涼気の漂う秋の到来を心待ちにしたか、想像に難くない。その一方で、秋は万物の凋落を象徴する時候でもある。それは『楚辞』を始めとして古くから中国の文人たちが、多く詠んできたことでもある。

筆者は、道真のこの一三六句の「寒吟抱樸蝉」に『文選』所収の潘安仁の「秋興賦并序」中の「蝉嘒嘒而寒吟兮」の句の投影があることを既に言及したが、改めて、この「秋興賦」全文を吟味してみると、道真がこの賦の主題・詩情を強く意識し、投影させたものとなっていることに気付く。

▼⑮一七八句目「溝壑恐先填」の「溝壑」についての考察

○『春秋左氏傳』「昭公十三年」の一文。

○『孟子』「滕文公下」の一文。

○また一七八句目「溝壑」および五十四句目「迍邅（ちゅんちゅんてん）」の二語の用例として、『文選』に左思（左大沖）の「詠史詩八首」の七首目に、「憂在填溝壑／英雄有屯邅（憂ひは溝壑に、填（うずま）るに在りしなり／英雄も屯邅（ちゅうてん）する有り）」の句が見え、この道真の詩への投影が窺える。

▼⑯一七九句目「潘岳非忘宅」の「宅」についての考察

○この一句は『文選』巻第十六志下「閑居賦一首」、賢臣であったが時運を得なかった潘岳の「賦」を踏まえている。この賦の最後に、「退求己而自省、信用薄而才劣。奉周任之格言、敢陳力而就列。幾陋身之不保。尚奚擬於明哲。仰衆妙而絶思、終優遊以養拙」の一文が載る。一七九句にはこうした詩情が投影されている。

▼⑰一八〇句目「張衡豈廃田」についての考察

○この一句は、張衡（張平子）の「帰田賦一首」を踏まえている。そしてこの賦の最後に、「苟縱心於物外、安知榮辱之所知」の一文が載る。一八〇句にも、こうした詩情が投影されている。

▼⑱一八一句目「風摧同木秀」についての考察

○この句には次の故事の投影がある。

『文選』「運命論一首、李蕭遠」の次の一文。

「故木秀二於林一、風必摧レ之、堆出二於岸一、流必湍レ之、行高二於人一、衆必非レ之。」（傍線筆者）。

○『白氏文集』「0608代書詩一百韻、寄微之」の「木秀遭風折、蘭芳遇霰萎」（傍線筆者）の句。

▼⑲一八二句目「燈滅異膏煎」についての考察

○『荘子』「内篇人間世第四」に次の一文を載せる。

「山木自寇也、膏火自煎也。」（傍線筆者）。

▼⑳一九五句～一九六句目「縱使魂思峴、其如骨葬燕」の二句に込められた「羊祜の故事」

○『晋書』巻三十四「羊祜傳」および『蒙求』「54羊祜識環」の故事を踏まえる。

以上、出典の明らかなものを主に例示してみた。本稿、一章で既に論じたところであるが、この作品が太宰の地に突如左遷され全てから隔絶された「天涯孤独」の中で詠作されたものであるだけに、その中に詠み込まれている道真の心の支えとなるものは、周りには見出せず、道真の脳裏の中に素養として生き続けている中国古典籍の中の不遇の中で命を落としていった古人たちの事蹟しか存在しなかったものと思われる。こうした古典籍の典故を一つ一つひも解く中で、道真の太宰の地での心象風景が鮮明に浮きぼりにされてくる。まさしく道真による、漢籍の素養のあるものが読めば、必ず伝わるメッセージである。筆者はこれを「表層部分の投影箇所」と便宜的に呼称する。それは又はからずも、道真自身の漢籍への造詣の深さと摂取の傾向を改めて読み手に強く印象付けるものになっている。

換言すれば、道真の漢詩文につとに投影関係が指摘されて来た白居易の『白氏文集』を始めとする唐代の漢詩文からの投影は、この「敍意一百韻」の詩句の「表層部分」においてはなりをひそめ、先に例示したように大半が「四書五経」「正史」『文選』等の典故に拠っていることを大きな特徴とする。これは道真自身の漢籍受容の根底に「儒家」としての矜持があることを認識すれば納得出来ることである。

四

［出典の分析（その二）～深層部分の投影考察～］

前述で、この作品の詩句の表層部分においては、『白氏文集』等からの投影を明らかに指摘できる箇所は少ないと言及したが、全編に流れる詩情、構成法に視点を移すと、先学の指摘の如く谷口孝介氏の言を借りれば、「杜甫が創始し、白居易と元稹とが文学形式として定着せしめた一百韻形式の五言排律を倣ったものであり、ことに白居易「東南一百韻」とそれに和した元稹「酬楽天東南行詩一百韻」とに多くの措辞を拠りながら制作されたことについては、すでに川口久雄氏による詳細な指摘が存在する」のである。(注5)

この川口久雄氏の指摘されている元白「東南行一百韻」及び「酬楽天東南行詩一百韻」と道真の「敍意一百韻」との比較考察並びに投影の指摘箇所に筆者は異論をはさむ余地はないし、又新たに付加するものを持ち合わせていない。川口氏を始め先学の指摘通り、この道真の「敍意一百韻」制作の大きな動機・背景としてこの元白の唱和詩があることは明らかである。これは単に、詩句の措辞の投影にとどまるものではなく、作品制作の根源にかかわる深層部分への深い投影とも換言できる。

筆者は、今回稿を起こすにあたり、新たに提起したかったことは、前述の元白の唱和詩とともに考察すべき「代書詩一百韻寄微之」という、白居易の元稹宛の長律詩の存在である。この詩の道真の「敍意一百韻」への投影関係の指摘は、先の川口久雄氏の著の中で若干触れられてはいるが、詳細にこの詩を吟味すると新たな事象が浮かび上がってくるように思う。

以下、その事を論じてみる。

白居易の「代書詩一百韻寄微之」は白居易三十九歳の時、元稹が事により江陵（湖北省）の江陵士曹に左遷させられる事件が起きる。長安にいる白居易がその元稹を気遣って送った詩である。これは唱和詩で、元稹の返答詩にも残る。

ここでは原文のみを以下に引用してみる。

「代書詩一百韻寄微之」白居易

甲

憶在貞元歳，初登典校司。身名同日授，心事一言知。
肺腑都無隔，形骸兩不羈。疏狂屬年少，閒散為官卑。
分定金蘭契，言通藥石規。交賢方汲汲，友直每偲偲。
有月多同賞，無盃不共持。秋風拂琴匣，夜雪卷書帷。
高上慈恩塔，幽尋皇子陂。唐昌玉蕊會，崇敬牡丹期。
笑勸迂辛酒，閑吟短李詩。儒風愛敦質，佛理賞玄師。
度日曾無悶，通宵靡不為。雙聲聯律句。八面對宮棋。
往往遊三省，騰騰出九逵。寒銷直城路，春到曲江池。
樹暖枝條弱，山晴彩翠奇。峰攢石綠點，柳宛麴塵絲。
岸草煙鋪地，園花雪壓枝。早光紅照耀，新溜碧逶迤。
幄幕侵堤布，盤筵占地施。徵伶皆絶藝，選伎悉名姬。

粉黛凝春態，金鈿耀水嬉。風流誇墮髻，時世鬬啼眉
密坐隨歡促，華樽逐勝移。香飄歌袂動，翠落舞釵遺。
籌插紅螺碗，觥飛白玉巵。打嫌調笑易，飲訝卷波遲
殘席諠譁散，歸鞍酩酊騎。酡顏烏帽側，醉袖玉鞭垂。
紫陌傳鐘鼓，紅塵塞路岐。幾時曾暫別，何處不相隨。
荏苒星霜換，迴環節候推。兩衙多請假，三考欲成資。
運偶千年聖，天成萬物宜。皆當少壯日，同惜盛明時。
光景嗟虛擲，雲霄竊暗窺。攻文朝矻矻，講學夜孜孜。
策目穿如札，毫鋒鋭若錐。繁張獲鳥網，堅守釣魚坻。
並受夔龍薦，齊陳晁董詞。萬言經濟略，三道太平基。
中第爭無敵，專場戰不疲。輔車排勝陣，掎角搴降旗。
雙闕紛容衛，千僚儼等衰。恩隨紫泥降，名向白麻披。
既在高科選，還從好爵縻。東垣君諫諍，西邑我驅馳。
再喜登烏府，多慙侍赤墀。官班分內外，遊處遂參差。
每列鵷鸞序，偏瞻獬豸姿。簡威霜凜冽，衣彩繡葳蕤。
正色摧強禦，剛腸嫉喔咿。常憎持祿位，不擬保妻兒。
養勇期除惡，輸忠在滅私。下韝驚燕雀，當道懾狐狸。
南國人無怨，東臺吏不欺。理冤多定國，切諫甚辛毗。

造次行於是，平生志在茲。道將心共直，言與行兼危。

乙

水暗波翻覆，山藏路險巇。未為明主識，已被倖臣疑。
木秀遭風折，蘭芳遇霰萎。千鈞勢易壓，一柱力難撑。
騰口因成痏，吹毛遂得疵。憂來吟貝錦，謫去詠江蘺。
邂逅塵中遇，殷勤馬上辭。賈生離魏闕，王粲向荊夷。
水過清源寺，山經綺季祠。心搖漢皋珮，淚墮峴亭碑。
驛路緣雲際，城樓枕水湄。思鄉多繞澤，望闕獨登陴。
林晚青蕭索，江平綠渺瀰。野秋鳴蟋蟀，沙冷聚鸕鷀。
官舍黃茅屋，人家苦竹籬。白醪充夜酌，紅粟備晨炊。
寡鶴摧風翮，鰥魚失水鬐。闇雛啼渴旦，涼葉墮相思。
一點寒燈滅，三聲曉角吹。藍衫經雨故，驄馬臥霜羸。
念涸誰濡沫，嫌醒自歠醨。耳垂無伯樂，舌在有張儀。
負氣衝星劍，傾心向日葵。金言自銷鑠，玉性肯磷緇。
伸屈須看蠖，窮通莫問龜。定知身是患，應用道為醫。
想子今如彼，嗟予獨在斯。無聊當歲杪，有夢到天涯。
坐阻連襟帶，行乖接履綦。潤銷衣上霧，香散室中芝。

念遠緣遷貶，驚時為別離。素書三往復，明月七盈虧。
舊里非難到，餘歡不可追。樹依興善老，草傍靜安衰。
前事思如昨，中懷寫向誰。北村尋古柏，南宅訪辛夷
此日空搔首，何人共解頤。病多知夜永，年長覺秋悲。
不飲長如醉，加餐亦似飢。狂吟一千字，因使寄微之。

（本文は新釈漢文大系本に拠る。白詩中にある分注は省略した）

（傍線筆者）（二重傍線筆者）

この白詩の詩内容を概観すると本文は、甲と乙とに二区分できるように思う。甲の部分では、白居易と元稹の交情が、二人の出会いから元稹の江陵士曹の貶謫に至るまでのことが、情感豊かに描き出されている。そして乙の部分では、一変して元稹の江州左遷という思いがけぬ事態が起こり、その非情な命に従わざるを得ぬ元稹の心情を代弁するが如く、江州貶謫の様が詠まれている。そしてそれに、長安で案じる自分自身の心情を付加するという構成となっている。元稹と白居易の交情については川合康三氏の近著に詳しい。(注6)

ここで注目したいのが、著者が傍線を引いた乙の原文の箇所である。明らかな詩句の措辞を傍線で、又詩情の類似した箇所には二重傍線を付して指摘をしてみた。

具体的に例示すると白詩の「木秀遭風折／蘭芳遇霰萎」を道真は一八一・一八二句で「風摧同木秀／燈滅異膏煎」と表現し、白詩の「千鈞勢易壓」の「千鈞」の詩語は、道真の一六三句の「責重千鈞石」に見える。又、白詩の「吹毛遂得疵」の詩情は、道真の一八五・一八六句の「覆巣憎誚卵／搜穴叱蚳蝝」の詩内容に通じるものがある。又白詩

の「賈生離魏闕／王粲向荊夷」の「賈誼」「王粲」の二人は、道真の五十七句「長沙沙卑湿」と一〇八句「銷憂羨仲宣」で使われている。又白詩の「淚墮峴亭碑」で晋の「羊祜」の故事を、道真は一九五句の「縱使魂思峴」として同様の故事を響かせている。又、白詩で「官舍黄茅屋／人家苦竹籬」の詩内容を、道真は、一九一・一九二句で「璅璅黄茅屋／荒荒碧海壖」と表現する。又白詩の「寡鶴摧風翮」の表現を、道真は八十九句で「瘦同失雌鶴」と同表現をしている。又、白詩の「明月七盈虧」の表現を、道真は一三八句で「九見桂華圓」と類似した詠み方をしている。

そしてこれらの詩語の措辞の指摘できるものが、白詩の乙のブロックに集中していることに注視する必要がある。それを更に二重傍線を付した「詩情の類似した箇所」に目を向けると、そこに白詩と道真の詩との差異が鮮明に浮かび上がってくる。

白詩が「伸屈須看蠖／窮通莫問龜／定知身是患／應用道為醫」と詠う詩情は、道真の詩の冒頭の一・二句「生涯無定地／運命在皇天」そしてそれに呼応する結末の一九七・一九八句「分知交糾纏／命詎質筌簿」に見事に投影されているように思う。そして白詩が「中懷寫向誰」「何人共解頤」と問いかけて、それを「狂吟一千字／因使寄微之」と結ぶ詩情を、道真は「敍意千言裏／何人一可憐」として詠まなければならなかった所に、白居易のように心から信頼し合える元稹のような友を持ち得ぬ悲しみ、「天涯孤独」の絶望感を一層際立たせる句作りとなっていることが、明らかになる。ここが道真のこの「敍意一百韻」で訴えたかった核心部分ではなかったのか。その事が理解できれば元稹と白居易の交情を描いた甲のブロックの句が道真のこの自作の中に、全く投影箇所を指摘できないのは合点が行く。道真が共鳴し得たのは白詩の乙のブロックの詩情に他ならなかったからである。

五

以上長きに亘って道真の「敍意一百韻」を構成論に的を絞って考察してきたが、明らかに出来たことを整理してみる。

一．この詩が五言一百韻の排律で、しかも一韻到底、そして全編に亘り奇数句と偶数句が対句という徹底した統一性を持って構成されていること。

一．私見ではあるが、十句ずつを一段落とする、二十段落の見事な構成法がとられていること。しかも、冒頭の一段落と結末二十段落は詩内容そのものが呼応関係にあるということ。

一．出典の考察の中では、詩句内容の表層部分で出典の明確に出来る中国古典籍は、「四書五経」『正史』『文選』等である。それは、文章道をきわめた「儒家」としての道真の素養を改めて浮きぼりにするものとなっている。

そして、この道真の詩の主題とも言える道真の「この詩で何を訴えようとしているか」ということに対しての私見を述べて結びとしたい。

その鍵は、［出典の分析（その二）～深層部分の投影考察～］で取り上げた、白居易と元稹らとで定着させた一百韻形式の五言排律の作品群にある。とりわけ、先学の指摘にあるように、道真のこの詩の構成法は、白居易の「東南行一百韻」、元稹の「酬楽天東南行詩一百韻」に拠るという考え方に全く異論はない。そしてその事実は谷口氏が言及する、「この「敍意」詩の形式が一百韻であることによっておのずと同形式の白居易「東南行」を踏まえて作って

いることを読む者に理解させ、意識に上らせる仕掛けとなっているのである。このように元白の一百韻詩をいっぽうに置いてこの「叙意一百韻」を読むことでこの作品の性格もより明確に理解できる[注5]」の一文に尽きると考える。筆者はこの視点を更に補強できるものとして、新たに白居易の「代書詩一百韻寄微之」からの投影関係を探ってみた。既に指摘のある「東南行」よりも更に深層部分で濃厚な投影関係があることが判明した。

筆者はその理由を次のように考える。

先の白詩の「東南行」は、白居易が元稹を含む八人の親友に送ったものに対し、「代書詩」は「元稹」のみに向けられた唱和詩だからではないか。換言すれば、この道真が「敍意一百韻」で最も訴えたかったのは、今の自分の心情を共に分かちあえる「一人」の友も持ち得ぬ「孤独感」ではなかったのか。自分の生の軌跡を「誰とも共有出来ぬ絶望感」とも言い直せるものである。

白居易が「代書詩」で「狂吟す　一千字／因って微之に寄せしむ」と結ぶのと、道真が「意を敍ぶ　千言の裏／何人か一に憐むべき」と詠むその詩情の落差こそが、道真のこの詩で最も後世の者に伝えたかったことではないだろうか。その心情は、この白居易の「東南行」や「代書詩」を下敷にすることで、改めて浮きぼりにされる構成法を意図しているのだと分析した。ここにこの道真の詩の表層にある古典籍の典故を散りばめることにより、古人の事蹟により、我が身を慰撫する心情と、その深層に元白の唱和百韻詩の内容を響かせることによって、この詩の核心を浮きぼりにさせる重層構造の真相が明らかにされるように思う。

注

（1）拙稿「菅原道真研究――『菅家後集』全注釈（十四）」（「国語国文学研究」第四十二号）熊本大学国語国文学会

（2）拙稿「菅原道真研究――『菅家後集』全注釈（十四）」（「国語国文学研究」第四十二号）熊本大学国語国文学会
拙稿「菅原道真研究――『菅家後集』全注釈（十五）」（「有明工業高等専門学校紀要」第四十三号）
拙稿「菅原道真研究――『菅家後集』全注釈（十六）」（「国語国文学研究」第四十三号）熊本大学国語国文学会
拙稿「菅原道真研究――『菅家後集』全注釈（十七）」（「有明工業高等専門学校紀要」第四十四号）
拙稿「菅原道真研究――『菅家後集』全注釈（十八）」（「有明工業高等専門学校紀要」第四十五号）
拙稿「菅原道真研究――『菅家後集』全注釈（十九）」（「国語国文学研究」第四十五号）熊本大学国語国文学会
拙稿「菅原道真研究――『菅家後集』全注釈（二十）」（「有明工業高等専門学校紀要」第四十六号）
『「敍意一百韻」（『菅家後集』）全注釈』焼山廣志監修　道真梅の会（大牟田市民大学ゼミ）編
（3）川口久雄著『平安朝漢文学の開花――詩人空海と道真』（吉川弘文館）
「菅原道真の文学と元稹・白楽天の文学～大宰府における「叙意一百韻」詩をめぐって～」一三五頁～一三六頁
金原理著『平安朝漢詩文の研究』（九州大学出版会）「第二章　貞観延喜の時代　菅原道真の漢詩」二七二頁～二七四頁
（4）波戸岡旭氏著『宮廷詩人菅原道真』の注（8）の中に次の一文がある。
「叙意一百韻」が十句乃二十句の小節をなすと看做すのは、全くの私見による試案である。因みに金原理氏は随意十段落とし（「菅原道真の漢詩」（『平安朝漢詩文の研究』））、大岡信氏は十八段に区切っている。
最近の研究成果の一つに柳澤良一氏の「敍意一百韻」全編に亘る注釈稿がある。その中で「全体の構成と要旨」として、全篇を「序・一・二・三・四・五・終章」と区切り、第二章は更に四節に分け、第三章を更に三節に分ける構成法を考案されている。（章毎の句数は随意。）（『菅家後集』注釈稿（十七）八十五頁～八十六頁《「金沢学院大学紀要」第六号》）
（5）川口久雄著『平安朝漢文学の開花――詩人空海と道真』（吉川弘文館）「菅原道真の文学と元稹・白楽天の文学～大宰府における「叙意一百韻」詩をめぐって～」一一三頁～一六〇頁
金原理著『平安朝漢詩文の研究』（九州大学出版会）「第二章　貞観延喜の時代　菅原道真の漢詩」二六八頁～二七七頁
谷口孝介著『菅原道真の詩と学問』（塙書房）「第三章　道真文学の行くえ　二、一百韻形式の享受と意図」二四九頁～二六〇頁
（6）川合康三著『白楽天～官と隠のはざまで～』（岩波新書）「第3章　諷諭と閑適　3・元稹との交情」「第4章　生きるよろこび――自足する晩年」一四九頁～一七八頁

参考

以下「敍意一百韻」全句の通釈を付す。

通釈

1 人の一生というものには、定まった状態とてなく

2 その人間の運命は、天を支配する神に全てを委ねられている。

3 (かって今まで)私自身が、鎮西の太宰権帥といった職を手にしようと考えたことがあっただろうか。

4 右大臣の職から(突如として)左遷の身に替わろうとは一体どうしたことか。

5 官位をおとししりぞけられること、塵芥よりも軽くあしらわれ

6 京から追い払われること 弓から矢が放たれるかのようにせかされた。

7 (その事態の当事者である私は)恥ずかしさで赤面し、それが高じて、顔面がいよいよ厚くなる。

8 (その事態に遭遇して)あわてふためき追放される様は、踵を向きかえる時間もないほどであった。

9 (太宰府へ放逐されて行く道々での)牛のひずめの跡のわずかな水たまりさえも私には(大きな)落とし穴のように思え

10 (太宰府へ放逐されて行く)鳥の飛ぶ道には、(いつも)鷹やはやぶさが待ち構えているように思えた。

11 老僕は、その長い道すがら、いつも杖に助けられ、私につき従った。

12 (余りの道程の長さに)疲れ切った馬を進ませるのに、何度も何度も鞭をあててきた。

13 京からの別れ道に立っては、腸がちぎれるほどの筆舌に尽くし難い悲しみを味わって来た。
14 遠く京都の宮城をあとにし、(これが見納めになるのでは、と)目が穿つほど、その情景を凝視したものだ。
15 別れに及んで流す涙は、着物に落ちた朝露と見違うばかり。
16 (別れに及んで)泣く声は、(哀切悲愴な泣き声で知られている)杜鵑のそれをかき乱すほどのものであった。
17 (追放されて行く道中の)街道は風に砂塵が舞って、雲が立ち込めたように四方は煙っていた。
18 (追放されて行く道々の)野原には(春光を浴びて)草があたり一面に生い繁っていた。
19 (道中の)駅舎では新たにあてがわれる馬とてなく(今まで乗り続けてきた)蹄を傷め、疲れ果てた馬を見送るしかなかった。
20 (道中の)港では船尾がこわれかかった船が(私たちを)迎えるのみであった。
21 太宰府までの宿駅は五十余り(泊りを重ね)
22 太宰府までの行程は千五百里であった。
23 (やっと着いた)太宰府南楼のもとで、(今までの行程を伴にした)疲馬を解放し
24 (私のこれからの住み家となる官舎のある)右郭のほとりで下車した。
25 (車から降り立って)小閣(くぐり戸)を開いてみると
26 好奇心に満ちた人々が南北の道にあふれて見つめているのがはっきりみえた。
27 気分が悪くなり、吐いてしまったが、それでも胸はまだむかつきがおさまらなかった。
28 体は疲労のため衰弱してしまった上に、脚までもがかがまってしまう始末。
29 (かって丸々と)肥っていた肌には苦労によるしわが、我先きを競うかのように深く刻み込まれ、

30 精神と気魄も、ともに(墨を磨るように)ほとんど擦り減ってしまった。
31 とりあえず仮の宿舎に二泊したが、所詮は旅先の気分で落ち着くことができない。
32 気分が勝れずぼうぜんとした今の心境は、まさに逆さ吊りされたような非常な苦しみである
33 (宿に)村の老人がやってきて、昔話を語ってくれると、
34 (この大宰府に)留め置かれているわが身の辛さを(片時だけでも)忘れさせてくれる。
35 (わが身にふりかかった)この苛酷な災いを、どうしてさけたらいいのだろうか(避けることはもはや無理である)。
36 しかし(謀反の罪を着せられた私の)悪い評判だけは、何としても晴らしたい。
37 いまだかって、邪は正に勝ったためしはないというが、
38 ことによっては(今の私のように)誠心誠意で行ってきたことも、すべて謀略とみなされてしまう。
39 人気のない寂しいひっそりとした官舎に移り、
40 朽ち果てた粗末な建物(住居)の修理をする。
41 (官舎の周囲は人気も無く)荒れはてて、官舎に至る道も迷って見失うありさまだし、
42 (官舎の)敷地は、一畝半に少し足りないくらいの狭さだ。
43 井戸はふさがっていたので、(そのふさいでいる)砂を掘り出して盛り上げ、(改めて)甃(いしだた)みしなおして使えるようにし、
44 まがきは破れてまばらになっていたので、竹を割って編み直した。
45 (うち捨てられた畑には)冬葵の古い根が一畝残り、

46 まだらに蘚(こけ)の生えたこぶし大の石が、一つころがっていた。
47 (官舎の)この有様は、長く空き家だったころのままで(殺伐とし)、
48 私が住むようになっても、(官舎の、この殺伐とした風景は)変わることはなかった。
49 時折、たまらなくやりきれなくなることもあるが、
50 なんとか心身を落ちつかせ安らごうとしている。
51 同病相憐れもうと思って同じような悩みを持った友を(古典籍に)求める。
52 憂い(左遷され、流されてきた苦しみ)を(少しでも)軽くしたいと思って、そういう目にあった先人のあとを尋ねる。
53 才能などは(かえって)時運に不利であり結局何の役にも立たない。
54 富貴の身とかいうものは、元来行き悩んで困難にあうものだ。
55 傅巖(ふがん)の野で傅説(ふえつ)は罪人に交じって土木工事に従事していた(不遇の時代があったし)、
56 范蠡(はんれい)は扁舟(小舟)に乗って五湖から揚子江に浮かんで去り行方をくらまし(わが身の保身をはかった)
57 長沙の地は低地で湿気が多い。(この地は前漢の賈誼(かぎ)が若くして博士に任ぜられ一年の間に太中大夫まで出世し、そして天子は彼を公卿の位に就けようとしたが、その事を妬まれ卑湿の地、長沙王の太傅に左遷させられたところである)。
58 湘水は深くひろびろとよどみなく流れている。(この川は屈原が懐王の左徒として王の寵愛が厚かったが、上官大夫がこれを妬み讒言したので江南に貶められ、その後、石を抱いて汨羅の川に身を投じて死んだ所である)。

59 一方の私は下降直前(正月七日)に、位は従二位に叙せられたけれど、それも空しい昇進だった。
60 ただ数を揃えるために、一体誰を、私の後釜の右大臣の官に任じたことであろう(実は大納言　源光を右大臣に任じたのである)。
61 ありがたい事に(こうして故人の事蹟を訪ねていると)、旧いなじみの友人が貧しい中から自分の食事を分けて私に食べさせてくれる(ような気持ちになるし)、
62 親族の者達が私の汚れた衣服をつかんで洗ってくれているような心持になるのである。
63 これらの故人の生き様を知るにつけそれによって私の生きる苦悩を慰められているのである。
64 だから、何故早く死なぬのかと呪うほどのこともない。
65 (たとえ貧しくて乏しい)食事を日々に口にする事ができるのは、天地自然また、万物を創造化育することの、またその神々のお恵みによるもの。
66 周りの人たちが(私のことを)憶測で何を取りざたしようが、自然の成り行きに任せるほかはない。
67 悲しくて苦しい毎日を嘆いている間に温陽な春をやり過ごしていた。
68 私の暗い心をよそに、穏やかに晴れた初夏、日の光に明るく新緑も映えて世の中も治まっていて、おだやかな日々。
69 この土地の風俗、風習には当然ながら次第になじむようにしたいし、
70 それぞれの習慣にもしきたりのままに従いたいと思っている。
71 (ところが、この太宰の地といったら京との余りの違いに驚くばかりで、例えば)この土地の塩が苦味強いのは、ただ木か炭で海水を炊くだけの塩だからだ。(京辺りの藻塩は風味があった)。

72 (一方周りには)あくどい取引で手に入れた布を、高く売りつけて儲けている商人たちが(うようよ)いる。
73 (この地の人間は)人の殺生を自らの手で気軽に行い
74 群盗も落ち着き払って我がもの顔に肩を並べて歩いている。
75 (役人はだらしないことに)魚袋を魚籠(びく)に見立てて腰にさげ、釣り糸を垂らしている有様だし
76 杆篁を(用途を違えて)舷を叩きながら唄を歌う時に使うものとして代用している
77 (商人たちは)米の商売を始めて、あくどく儲け、
78 また、にせものなのに良質の筑紫綿(絹)と偽って、官の綿として献上する。
79 この地では、塩魚を売る店は大変な臭気を発しているし
80 調子の狂った琴は糸を張り替える必要があるのに、この地ではそれが未だなされていない。
以上の十句、この土地の慣わしがまだ改変するに至らず、野蛮の地であることを悲しみ傷んだ句である。
81 誰かと共に(荒れ果てたこの地で)語り合えたらどんなに心が慰められることか。
82 (そんな話相手もいないので)一人さびしく肱を枕にして眠る。
83 毎日、降り続く長雨の梅雨は蒸し蒸ししてうっとうしい。
84 (官舎は雨漏りもひどく)朝ごはんを炊くこともできないで、炊事の煙も絶えてしまっている。
85 (長い間、ご飯が炊けないので)かまどや釜の中に水がたまって、ぼうふらなどが泳いでいる。
86 蛙たちが、きざはし(階段)の敷き瓦のところで、まるでまじないの呪文をとなえるかのようにやかましく鳴いている。
87 (こんな私に同情してか)田舎(農家)の子供が、野菜を持ってきてくれるし

88 炊事のお手伝いが、うす粥を作ってくれたりもする

89 〈今の私は〉(夫婦仲睦まじい)鶴が雌鳥を失ったときと同じように痩せ衰えてしまった。

90 空腹のため、鵷雛(えんすう)を襲う鳶(＝鴟(ふくろう))のように卑しくなった。

91 崩れ落ちた(建物の)壁は、(屋根を伝って)激しく滴り落ちてくる雨水をせきとめてはくれるが(大きな水溜りをつくっている。)

92 庭土はぬかるみになって、(いたるところに)濁り水が流れ込んできている。

93 一方で(長く降り続いた雨もようやく上がり)晴れた空には赤い太陽が照り輝き、

94 夕方になって日が沈みかけると、あおみどり色の幕をかけたように太宰府の周辺の山々は、清清しい。

95 折に触れてこうした境遇に出会うと、心をむなしくすれば、(何もなくがらんとした部屋に日の光が差し込むように)、自然に気も晴れてくる。

96 自由気ままに(書の世界に没頭し)、故人と語り合う中に、奥深い心境になることもある。

97 老子は、無為自然に淡々と生きたし

98 荘子は、名利など望まない偏屈な生き方をした。

99 人間の本性は不変不易の常道に背いてはいけないし

100 人生の根本は、本来のままに、ありのままに振る舞うべきだ。

101 (荘子の)「斉物論が説く万物はみなひとしい」という考え方は、今の私にとって心に熱く伝わってくる言葉である。

102 また(荘子の)寓言篇のなかの話は、私の気分をしっとりと和らいだ気分にしてくれる。

103 しかしながら(初夏の)景色は老荘のいう夢よりも奥深くみえ、
104 自然の趣を愛でるという(詩人としての)私の性癖は、まだなおってはいない。(悟りきっていないのである)。
105 私の創作し得た詩文は、いったいどこに散り落ちていくのだろうか。
106 私の今の感情・情感はどうしても眼前の風物に引き止められてしまうのである。
107 (それを押し止めるべく)大志を抱いていても認められず郷里に帰り不遇でありながら節を曲げなかった後漢の馮衍を憐れみ、我が身を慰めようとしたり、
108 (同じく)文人として秀でた才能を持ちつつ不遇をかこっていた王粲が、その想いを綿々とつづって、己れの「憂い」を消そうとしたその文才に羨望の念を抱いたりもした。
109 (しかしながら今の私は、と言えば)私の一言が忌諱に触れることを恐れて(その想いを形にすることすらはばかられるのが現状である)。
110 (それを押して)胸中の押し止めようもない衝動につき動かされて書きなぐるものだから、筆先は擦り切れてしまった。
111 これらの草稿ともいうべき推敲の不十分な詩文は、いったい誰に見せるというのか。
112 (今の私には)この私の書きなぐりの句に，唱和してくれる詩友とて、誰一人として存在しない。
113 心に浮かんだ詩を思いのたけ、紙に取り書き写してみては
114 それを詠じたところで、誰かに聞いてもらうことも見せることもないので行灯の火で燃やす。
115 こうしたことを何度も繰り返しているので、恨む思いは煙とともに薄れてしまう。
116 こんなに辛いことも、前世からの因縁であろうかとあきらめの思いになる.

117 ほんの少しずつでも慾・執着心を捨て、これからは仏を信じて心の平安をもとめよう。
118 次第次第に芥の強い野菜や、生肉などをやめ、精進に務め、
119 手を合わせて仏を拝み、厚く仏法を信仰し仏に帰依せんことを願う。
120 廻心して自己の迷いに気がつき、気持ちを改めて静かに黙念し、入定の境地に入ることを習い学ぶことを知りたいと思う。
121 (私は)今のこの世の罪業と欲望とを厭い嫌って、それらから遠く離れることとし
122 古えの真の悟りを、謹んで敬うことにしよう。
123 (空を仰げば)一切のものはすべて空であるという真理の月が白く穢れなく輝き
124 (地には)仏法の妙法(絶対の真理)をあらわすという蓮の花があまねく開いているのが見える。
125 仏や菩薩が一切衆生をすくわんとする広大な誓願にうそ偽りがあるはずがなく、
126 それによって救われる幸せは十分に厚いのであるから、その誓願が作り話として空しく捨て去られるということは、決してないだろう。
127 (そうこうしているうちに)もだえ苦しんだ夏の猛暑も少しは和らぎ、
128 そろそろ涼しい気配が順序どおりに訪れるはずで、間もなく秋が到来しよう。
129 (古代においては)灰を吹いて、その灰の飛び散り具合で気候を推しはかり、
130 北斗七星の柄の指し示すところによって、天の運行や季節の変化を知ったものだが、
131 〈今の私は〉都から引き離されて、ますます(時節のみならず)時勢との隔たりも深くなり困窮している。
132 京の家族からの手紙も途絶えて、家族の様子も分からない。

133 私の体は痩せて帯がゆるくなり、紫の官服も色あせて、それを見ては涙がこぼれる。
134 鏡を照らして、そこに映った白髪頭を見ては嘆き悲しむ。
135 この太宰府で一人もの思いにふける様は(あたかも)たった一羽で雲を押し分け飛んでゆく雁のように切なくわびしいものだ。
136 私の泣く声は、秋風に吹かれて木肌にしがみついて寂しい声で鳴いている、つくつく法師のようだ。
137 蘭(藤袴)の花が萎みおちて芳しい香りがなくなるのを(都を去り太宰府の地に赴いて)初めて目の当たりにし
138 月が満ちるのを九度見た。(外界は今、九月を迎えたのである)。
139 何もないがらんとした部屋にいて貧しさにも慣れ
140 門は閉ざしたまま鍵をはずすのも億劫だ。
141 我が身は、片足が悪いうえにつながれて自由のない雌羊のようで
142 さらに、かさができたうえに体の自由が利かず、飛べない雀のようでもある。
143 (そんな不自由な体ながら)無理やりにかきねの外を望み
144 人目を忍んで戸口や窓の前をうろついている。
145 (九月となり)目をやれば、(空気が澄み)遥か彼方の山々がはなだ色に輝き、(くっきりと)見えるようになった。
146 (秋が深まり静寂さが訪れ)小川ははるか遠くまでさらさらと流れている音を聞き、(静かに)その様を思いやる。
147 (こうした情景を目にすると)痩せて虚弱な身体も、にわかに健やかになるような気持ちがするし

148 (こうした情景に)身を任せていると(病のことも忘れ)命も伸びる心地がする
149 (その一方でこうした好時候に巡り合うと)茫然自失し、心(魂)が京都に馳せて行ってしまうのである。
150 まぶたを閉じると(改めて京の事が想起され)、目から涙が止めどもなく流れて出る。
151 都に帰れる日は いったいいつになるのだろうか。
152 故郷にたどり着けるのは いったいいつになるのだろうか。
153 振り返って想う、初めて仕官した頃を。
154 寸暇を惜しんで学問に専念し、聖賢の道を修行していた頃を。
155 対策(官吏登用試験)にも及第し、
156 政においても、料理のとき小魚を煮るのにそうするように、いたずらに効果をあせって施策を加えかき回すようなことはしなかった。
157 (八七〇、貞観十二年)文章得業生(もんじょうとくぎょうしょう)の試を受け、対策及第した。
158 その後(八八六、仁和二年)南海讃岐の国司となって任地に下り、讃州の多くの町や村を治めた。
159 こうして私は父祖以来の学問を受け継ぎ儒家の人々の間に高く聳え立っている。
160 讃州の国主として州を治めた功績は式部省の役人もよく調べて知っている。
161 輝かしい栄誉は私の身を明るくかがやかすことになった。
162 帯びた玉珮は争って輝き、身にまとわすことになった。
163 高官への栄進とともに責任は重くなり、ずしりと身に感じた。
164 (その一方で)身辺の危険は増大し、万仞の淵を臨むようなものだった。

165 人々が仰ぎ見るような地位、(万人が仰望の)右大臣右大将を兼務したのを、
166 (それを見て)皆ことごとく言った。「あなたは功績も才能も欠く人物だから職を辞退したら」と。
167 衣服を仕立てることを試みては、あでやかな絹織物を損なうことを、ひたすら恐れるように(天皇を補佐するに当たっては、天皇の権威を損なうことのないように注意に注意した)。
168 鉛刀(なまくら刀)を手にしたところで、役には立たないだろうから、めったなことをしないように用心に用心をして(国政に参与してきた)。
169 おそれ戒めて慎みながら、帝の後ろの屏風に馴れるようにした(慎み慎みて帝に従ったものである)。
170 危ぶみおそれながら宝剣を撫でていたのである(おそるおそる帝に寄り添い補佐してきた)。
171 (また)黄色の土ぼこりにまみれた俗習を惜しげもなく捨ててしまって
172 宮中の殿上人たちと交際するようになった
173 桜花を愛づる夜通しの宴にも出たし、
174 重陽の菊の節句の翌朝にある、菊酒の宴にも出た。禁中の親しいもの同志の私的な宴には、自分は毎回出席していた
175 (私の)器量はにぶくて役立たずであるにもかかわらず、天子より豊な恵み(官位)をうけ、
176 頑固でおろかな身でありながら、巨川を渡る船の舵(宰相として政治)をまかされた。
177 〈それが今となっては〉国家(君)の恩に報い得ないまま
178 この鎮西の太宰府で左遷されたまま死んでしまうのではないかと恐れる。
179 晋の潘岳は家(故郷)を忘れたのではなく，宦官や小人に誣いられ閑居を余儀なくされて、不遇な目にあった

（と聞くし、）

180 漢の張衡は、官を辞めて野に下り、農耕生活を余儀なくされた（と書には書かれている。）

181 林の中で高く抜き出た木は、かならず風が吹き倒すものだ（今の私と同じように）。
（私も官位高きが故に左遷の憂き目に会ったのだ。）

182 油が尽きて消える燈火と、（強風にあおられて）我とわが身を燃やしながら消える燈火とは異なるのだ。（私の場合は職を全うする前に小人の讒言によって志なかばにして断たれてしまったのだ）。

183 私を陥れた小人たちは、ブンブンうなりながらあちらこちらへ飛び回る青蝿のように宮中に止まっていることだろう。

184 （このような宮中においては）どうして正直に事を行なっていく者が、無事に命を全うすることができようか。

185 （親鳥のみならず、その）巣をひっくりかえして中の卵まで割り

186 穴の中まで探し出して蟻の子までつぶしてしまう。（そのように自分だけでなく、わが子孫まで徹底的に抹殺しようとする）

187 （わたしは今）厳しすぎる法によって裁かれ

188 今までのわたしの功績は、石柱を刻むごとく過去のものとなった

189 忠義を尽くすこと、（あたかも君のために）甲冑のごとくなろうとしたこと（がかえってあだとなったこと）を悔いる。

190 ほこで突かれるよりも酷い厳しい刑罰に嘆く身を悲しむ。

191 (その私は)小さく粗末なあばらや(に、住み)
192 薄暗く暗澹とした(西海の果ての)青海原のほとり(に、立つ)。
193 私の粗末な廬(いおり)は今の私には十分事足りているし
194 この地がおそらく私の終焉の地となるであろうことは間違いなかろう。
195 たとえ西晋の羊祜のように、おのれの魂が峴山(湖北の襄陽)を恋しく思っても(どんなに京都を恋しく思っても)
196 その骨が遠く離れた北方の燕に葬られるとしたらどうであろうか。(私の、この西方の僻地に生を閉じようとしている心情を察してもらいたい)。
197 (今となっては)さだめというものはあざなえる縄のようなものであると知った。
198 (私の)運命を(今さら)竹を折って占って将来を問うたところで何になろう。
199 以上この千言のうちに、私の意(思い)を述べたが
200 (この詩を読んで)いったい誰が専念に(私のことを)憐れんでくれるというのか(そんな者は存在しないであろう)。

◆『菅家後集』所載「秋夜　九月十五日」作品考

「485　秋夜　九月十五日」

本文　平仄

黄萎顔色白霜頭　○○○●●○◎
況復千餘里外投　●●○○●●◎
昔被榮花簪組縛　●●○○○●●
今為貶謫草萃囚　○○●●●○◎
月光似鏡無明罪　●○●●○○●
風氣如刀不破愁　○●○○●●◎
随見随聞皆慘慄　○●○○○●●
此秋獨作我身秋　●○●●●○◎

脚韻は下平声尤韻。韻字は頭・投・因・愁・秋である。

訓読

・黄萎の顔色　白霜の頭
・況んや　復た　千餘里の外に投するをや。
・昔は榮花　簪組に縛せられ
・今は貶謫　草萊の囚と為る
・月光　鏡に似て罪を明らかにすること無し
・風氣　刀のごとくにして　愁を破らず
・見るに随ひ、聞くに随ひて　皆慘慄。
・此の秋　獨り　我が身の秋と作る

通訳

黄色にやみつかれ萎えしわんだ血色のない顔、霜をかぶっているかのような白髪頭(これも、老いたる身の必然)
・ましてや、京都より千五百里も離れた西の果てに追いやられた私の容姿がどうなっているかは言うまでもなかろう。
・今思えば、昔、京に居て得意の時代、私はかんざしや組ひもをして正装で宮中に伺候していたものである。(束縛も多かったが心に張りがあり充足した日々であったことよ)
・ところが今は貶謫の身、仕官する束縛から解放されたものの、日々の生活は生い茂る雑草の中の田舎暮らし。(牢生活をさせられているのと大差はない。)

・月光のさやけさは鏡面そのもののようだ。(本当の鏡なら人に罪がなければ明らかに顔面を写し、罪科があれば鏡面は曇るというのに)こんなにも明らかに照り輝いているのに、私の無実を何一つ証してはくれない。
・秋風のつきさすような冷気はまるで刀のそれのようなのに、我が肌身にはつきさせても、私のこの深くこもった愁いは破っては(消しては)くれない。
・そんな月の光を見るにつけ、秋風の音を聞くにつけても私には、身震いがおきるほどすさまじく感じられる。
・(一般に秋は人々にとり悲しい季節であるけれども)とりわけ今年の愁えは、わが身の上に集まり、私にだけに悲しみが限りなく深いように思えてならないことよ。

考察①

○五句目「月光似鏡無明罪」の表現について

『菅家文草』『菅家後集』の中で「月光」を「鏡」にたとえる表現はこの「485 秋夜」の他にも散見するが、一方で「鏡」と「無明罪」の表現との関わりについては『菅家文草』「254 對鏡」に注目する必要がある。この詩と、『白氏文集』との関わりについての考察を既に拙稿で論じた(注二)ことがある。ここでは「鏡」そのものの語を考察す為に再度原文の一部と書き下ろし文を岩波古典大系本より引用してみる。(一部、筆者試読)

254 對鏡

四十四年人　　四十四年の人

生涯未老身　生涯未だ老身ならず
無心無所忌　我が心忌む所無し
對鏡欲相親　鏡に対して相親しまんとす
半面分明見　半面分明に見ゆ
雙眉斗頓頻　雙眉斗頓に頻む
此愁何以故　此の愁へ　何を以ての故ぞ
照得白毛新　白毛新なることを照すこと得ればなり
自疑鏡浮翳　自ら疑ふらくは　鏡に翳を浮かぶるかと
再三拭去塵　再三　塵を拭ひ去れば
塵消光更信　塵消えて　光更に信かなり
知不失其眞　知りぬ　其の眞を失はざることを
（下略）　（傍線　筆者）

この詩は道真が讃岐の国守として赴任中に詠んだもので、鏡に今の自分の容姿を写したところ、白髪が生えてきた愁人の己れの姿が明らかになったという主旨のものである。ここで道真自身が鏡に己の姿を写すという意味合いを押さえておく必要がある。すでに川口久雄氏が頭注で指摘している(注三)ように「鏡は将来の吉凶を照らすもの、思うところを自照すればやがてあらわれる。又鏡は毛筋ほどの微細なことや病気のことまでも照らし出すと考えられていた」との認識は、『藝文類聚』「服飾部下・鏡」の項に載せられている『抱朴子』中の「或問知將來將來

吉凶爲有道乎。答曰、用明鏡九寸自照、有所思存。七日則見神仙、知千里外事也」の内容が道真を始めとする当時の漢詩人に享受されていたことの証となる。故にこの「254 對鏡」の三句目「我が心忌む所無し」だから四句目「鏡に対して相親しまんとす」の句が生まれるのである。換言すれば、己れに忌む所があれば鏡からそれを見抜かれ、鏡そのものが曇ってしまうのであるし、又将来に不安があっても鏡に凶として曇りが生じるはずである。九句目「自ら疑ふらくは鏡に翳を浮かぶるかと」と一寸道真が不安になるのは、「鏡に翳を浮かぶ」のは、自分の将来に凶とする不安要因がひそんでいることを鏡が予知しているのではないか、又自分に忌む所があるのを鏡により見抜かれているからではないかと考えるからである。故に一〇句目で鏡の表面を磨き、一一句目でそれにより「光が更に信か」になり、一二句で「知りぬ、其の眞を失はざることを」と安堵する内容になっている。このような鏡に対する認識が基底にあることを踏まえてみると、「485 秋夜」の「月光 鏡に似て罪を明らかにすること無し」の表現内容が理解できる。つまり「本当の鏡なら人に罪がなければ＝忌む所がなければ明らかに顔面を写し、罪科があれば鏡面は曇るというのにこんなにも明らかに鏡面さながらに月光が照り輝いている（＝私には何一つやましいところがないことを証してくれているはずな）のに、私の無実を何一つ証してくれない」という納得ができない、不満の心情が明らかになるのである。

考察②

○六句目「風氣如刀不破愁」の表現について

この句については、小島憲之氏が既に指摘されているように(注四)「風気」が「刀のごとし」という表現は次の『白氏文集』が踏まえられていると考えられる。

2542 晩寒

急景流如箭　急景　流るること箭のごとく
凄風利似刀　凄風　利きこと　刀に似たり
瞑催雞翅斂　瞑催して雞翅斂まり
寒束樹枝高　寒束ねて樹枝高し
縮水濃和酒　水を縮めて和酒を濃かにし
加緜厚絮袍　緜を加へて絮袍を厚うす
可憐冬計畢　憐むべし冬計畢り
煖卧醉陶陶　緩かに臥し醉うて陶陶たり

(傍線　筆者)

更にこの「風氣」が「愁いを破る」の「破」の表現には、和歌の縁語と掛詞に似た用法が含まれており、愁いを「風」との関連で「吹き破る」意で用いたのと、愁いを「消す」の意を重ねあわせられている。

考察③

○八句目「此秋獨作我身秋」の表現について

この句の表現には『白氏文集』の次の句の投影があることが既に川口久雄氏（注五）や小島憲之氏（注四）により指摘されている。

『白氏文集』（「鸞子樓　三首　序」）

860　其一

滿窓明月滿簾霜　　滿窓の日月　滿簾の霜
被冷燈殘拂臥牀　　被冷やかに　燈殘して臥牀を拂ふ
燕子樓中霜月夜　　燕子樓中　霜月の夜
秋來只爲一人長　　秋來　只だ一人の爲に長し

（傍線　筆者）（『新釈漢文大系　白氏文集三』二八三頁）

(注二)拙稿「道真の詩「早春侍宴仁寿殿　同賦認春応製」「対鏡」の二詩をめぐって—道真の『白氏文集』からの摂取態度の一考察(その六)」
「国語国文学研究」二六号(熊本大学文学部国語国文学会)

(注三)岩波日本古典文学大系『菅家文草・菅家後集』三〇三頁

(注四)日本漢詩人選集—『菅家道真』　小島憲之・山本登朗著　一五二～一五四頁

(注五)岩波日本古典文学大系『菅家文草・菅家後集』七三五頁・補注

◆『菅家後集』所載「哭奥州藤使君」の構成論考

（一）

『菅家後集』所載の「486　哭奥州藤使君　九月二十二日、四十韻」は五言八十句古詩のスタイルで、「敍意一百韻」に次ぐ長編の作品である。題注にもあるように、道真五十七歳時、太宰府左遷の当該年の秋、九月二十二日に詠まれたとある。その内容は、人の呪詛を受けて亡くなったと伝え聞く旧友の陸奥守藤原滋実（しげざね）の死を京都からの家族の手紙とそれを太宰の謫居に届けに来た使者より知り、その死を悼み、さらに今の我が身を鑑み、ともにこの世の非情を嘆く心情が、鬼気迫る筆致で貫かれている。太宰府での道真の心情の変遷を知るうえで注視すべき作品である。この詩については、既に注釈書（注一）を公にした。又、その作品内容より窺えることを「総括」の形で、前稿（注二）で提起してみた。しかしながら紙頁の制限があり、その中で十分意を尽くすことが出来なかった恨みがあり、今稿は、再度、全文を取り挙げ、構成論に視点を置き、更に考察を深めることが大きな意図である。

具体的には、前稿（注二）で提起したことを踏まえて、改めてここに整理し考察を深めることにある。

それは本詩の第七十九句・八十句にある「拙詞四百言／以代使君誄（拙詞四百言／以て使君の誄に代へん）」の句内容の意味するもの、とりわけ「誄」の使い方に注視する必要がある点。そしてここから本詩の構成の仕方の糸口が見える点の二点である。

（二）

まず「誄」の使い方についての考察を再度以下に整理してみる。

道真は、第七十九句・八十句で〔〕「五言四十韻」の古詩でもって、「誄」の代用をした〕と詠む。その「誄」とは、「①死者の生前の功績をたたえ、その死を悼む」意と、又「②しのびごと。死者を哀悼する文章」のことであるが、前稿で提起したように、ここでの使われ方は、「誄」を死者を追悼する文章「しのびごと」の漢訳語としてではなく、古代中国本来の「誄」の文体を指していると考える。

井上和歌子氏の論文（『『空也誄』考―文体、成立の指示、評価―』）（「和漢比較文学」一号）に次のような言及がある。

漢文の誄は「――誄井序」、即ち散文の序と韻文の誄の二部で構成される誄は、四字句で押韻する頌で綴るのが通例であった。（中略）誄について、より詳細な説明は『文心雕龍』等の文体論に見える。（中略）この誄に関する文体論は、以下の五点に纏められる。（中略）⑤記述の方法。伝のスタイルで記述し、頌の文を用い、生前の徳を誉め、そして死を悲しむ。称える事と哀悼する事が両立する記述が必要である。（中略）死者の徳行を伝によって記述し、更に哀悼の詞を述べ、かつ声に出して朗読されることが誄に求められたのである。」

ここで、この「哭奥州藤使君」の詩に目を移す。井上氏の言及する「誄」の文体とどう関連するのか、又この詩の構成とどう関わるのか、全八〇句を便宜上八句ずつ十段落に分け考察を進める。

【一段】

	原文	訓読文
1	家書告君喪	家書　君が喪しことを告ぐ
2	約略寄行李	約略　行李に寄す
3	病源不可醫	病源　醫すべからず
4	被人厭魅死	人に厭魅せられて死す
5	曾經共侍中	曾経　共に侍中たりき
6	了知心表裏	了知す　心の表裏
7	雖有過直失	過直の失有りと雖も
8	矯曲孰相比	矯曲　孰か相比せん

▼〔藤原滋実の陸奥での国守としての功績・徳行〕（その一）

妻からの藤原滋実の死を告げる家書が届き、太宰に派遣された使者より、その死に至るまでのいきさつがつかめた。それは病気や事故によるものではなく、呪詛によるものであることが判明する。その想定外の友の死に、道真は言葉を失う。と同時に、滋実の生前の在りし姿が道真の脳裏にありありと甦ってくる。この【一段】では、滋実と自分との関わりの契機、そして滋実の顕著な性格、（それは正直過ぎて一本気な所はあるが、とにかく不正に対してつゆとも妥協しない潔白さがあったこと）をまずこの【一段】で特記する。

【二段】

原文	訓読文
9 東涯第一州	東涯の第一州
10 分憂為刺史	憂ひを分けて刺史たり
11 盈口含氷雪	口に盈(み)たして氷雪を含み
12 繞身帯弦矢	身に繞(めぐ)らして弦矢を帯ぶ
13 僚屬銅臭多	僚屬銅臭多し
14 鑠人煎骨髄	人を鑠(とか)して骨髄を煎る
15 土風絶布悪	土風布の悪しきを絶(た)ち
16 殷勤責細美	殷勤に細美なるを責(もと)む

▼〔藤原滋実の陸奥での国守としての功績・徳行〕(その二)

【二段】では【一段】の内容を受けて、藤原滋実の陸奥の国守としての功績及びこの徳行を具体的に記す。十一句・十二句の「口に盈たして氷雪を含み／身に繞らして弦矢を帯ぶ」の句意は、先の注釈書(注一)の中で須藤修一氏が具体的に考察しているように(注三)、滋実の奥州国守としての実直な仕事ぶりを活写している内容にとどまらず、滋実の性格そのもの、つまり、「口に巧言なく実直、誠実で、わが身を持すことには厳しく、自他ともに不正を容赦しなかったこと」を高く評価している点に注視すべきである。その対極として、悪に染まった汚職まみれの人間や社会風潮を次の段から次々に暴露していく。

【三段】

原文	訓読文
17 兼金又重裘	兼金（けんきむ）又（また）重裘（ちょうきう）
18 鷹馬相共市	鷹馬（ようば）相共（あいとも）に市（か）ふ
19 市得於何處	何（いづ）れの處（ところ）にか市（か）ふこと得たる
20 多是出邊鄙	多くは是れ邊鄙（へんぴ）より出（い）でたり
21 邊鄙最獷俗	邊鄙（へんぴ）最（もっ）も獷俗（くわうぞく）にして
22 爲性皆狼子	爲性（ひととなり）皆（みな）狼子（らうし）なり
23 價直甚蚩眩	價直（あたひ）甚（はなはだ）しく蚩眩（しげん）す
24 弊衣朱與紫	弊衣（へい）朱（あか）と紫（むらさき）とにす

▼〔藤原滋実の陸奥での国守としての功績・徳行〕（その三）

この【三段】では【二段】を受けて、藤原滋実の人となりと対極に位置する、人間や社会風潮を具体的に列記する。ここでは京の法秩序や文化の及ばぬ陸奥の住民の野卑さ、横暴さを記す。・これはこの詩の先に制作されたと思われる「敍意一百韻」の太宰の地の野卑さを記す箇所、「苦味の塩、木を焼き／邪羸の布銭に當つ／殺傷軽しく手を下し／羣盜穏やかに肩を差す／魚袋出して釣を垂れ／屏篁舷を叩くに換ふ／貪婪販米を興し／行濫官綿として貢す／鮑肆方に息を遺し／琴聲未だ絃を改めず」（七十一句～八十句【八段】）の口吻と酷似する。

【四段】

原文	訓読文
25 分寸背平商	分寸も平商に背けば
26 野心勃然起	野心勃然として起る
27 自古夷民胼	古自り夷民の變は
28 交關成不軌	交関　不軌を成す
29 邂逅當無事	邂逅して事無きに當りては
30 兼贏如意指	兼ねて贏すること意指の如し
31 惣領走京都	惣領して京都へ走り
32 豫前顔色喜	豫め前むれば顔色喜ぶ

▼〔藤原滋実の陸奥での国守としての功績・徳行〕（その四）

この【四段】では、紛争の絶えない事由が陸奥の住民の性格に拠ることを記す。それは裏をかえせば、このような地に勇んで赴き、統治しようとした、滋実の多大の労苦と尽力を、改めて読み手に想起させる内容となっている。そして後半より、こうした住民を利用し、わが私欲を肥すために、やっきになっている、汚職まみれの受領たちとその悪事に便乗する京の小役人どもの悪事を赤裸々に活写していく。

【五段】

原文	訓読文
33 便是買官者	便(すなは)ち是れ官を買ひし者
34 秩不知年幾	秩(ちつ)、年幾ばくなるかを知らず
35 有司記暦注	有司　暦注(こよみ)を記す
36 細書三四紙	細書すること三四紙
37 帰来連座席	帰り来たらば座席に連なり
38 公堂偸眼視	公堂　眼を偸みて視る
39 欲酬他日費	他日の費(ついえ)に酬いんと欲し
40 求利失綱紀	利を求めて綱紀を失ふ

▼〔藤原滋実の陸奥での国守としての功績・徳行〕(その五)

この【五段】では【四段】を受けて汚職まみれのあくどい受領と京都にいる官僚たちの癒着ぶりが、赤裸々に詠まれている。潔癖さにおいて誰よりも己れに厳しかった滋実が、こうした小役人の犠牲になってしまった憤りを暗示する句内容となっている。三十五句・三十六句の「有司　暦注を記す／細書すること三四紙」三十七句・三十八句の「帰り来たらば座席に連なり／公堂眼を偸みて視る」という表現内容は余りに具体的で、そこには道真の過去に見聞した国司時代の実体験が投影されていると考えるしかないような、迫力がある。

【六段】

原文	訓読文
41 官長有剛腸	官長　剛腸有らば
42 不能不切齒	齒を切らざること能はず
43 定應明糾察	定めて應に糾察を明かにすべし
44 屈彼無廉恥	彼の廉恥無きを屈す
45 盜人憎主人	盜人は主人を憎む
46 致死識所以	死を致して所以を識る
47 精靈入冥漠	精靈冥漠に入りて
48 不由見容止	容止を見るに由あらず

▼〔藤原滋実の陸奥での国守としての功績・徳行〕（その六）

この【六段】では【五段】の受領と京都在住の役人との癒着とは対照的な、滋実の筋金入りの潔白さで、物事を押し進めて来たこのことが、却って悪人どもの恨みをかうことになり、命を落とすことになった無念さを、強い憤りをもって詠い上げる。そこには、太宰府左遷に到る我が身の顚末と重なるものからくる心情が込められている。

【七段】

原文	訓読文
49 骸骨作灰塵	骸骨　灰塵と作り
50 無處傳音旨	音旨を傳ふるに處無し
51 葬来十五旬	葬りてより来のかた十五旬
52 程去三千里	程は去ること三千里
53 廻環多日月	廻環す　多くの日月
54 重複幾山水	重複す　幾山水ぞ
55 憶昔相別離	憶ふ昔　相ひ別離せしとき
56 寧知獨傷毀	寧ぞ知らむ　獨り傷毀せらるるを。

▼〔人々の呪詛により命を落とした藤原滋実への哀悼〕（その一）

この【七段】より、今まで滋実が死に至るまでのいきさつの推測から、既に死去しあの世に旅立った滋実の死を惜しみ悼む心情を詠むものに変わる。

死者である滋実と生者である自分自身とが二人だけで真摯に対峙し、赤裸々な心情を吐露する内容が展開されて行く。

【八段】

原文	訓読文
57 君閒泉壤入	君は閒かに泉壤に入り
58 我劇泥沙委	我は劇しく泥沙に委す
59 天西與地下	天の西と地の下と
60 隨聞爲哭始	聞くに随ひて哭の始めと爲す
61 哭罷想平生	哭すること罷みて平生を想ふに
62 一言遺在耳	一言遺りて耳に在り
63 曰吾被陰德	曰く　吾　陰德を被りて
64 死生將報爾	死生　將に爾に報いんとすと。

▼〔人々の呪詛により命を落とした藤原滋実への哀悼〕(その二)

【七段】に続き、死者の滋実と生者である自身との一対一の対峙がなされている。滋実の東北の地での無念の死と西府の太宰の地で謫居生活を余儀なくされ、生きる屍となりつつある自身を「泉壤」「泥砂」と対比させる。そして、かつて道真に語った滋実の言葉を想い起こす。そこには、「敍意一百韻」の中においても、「秋夜」の中でも繰り返し詠まれている「絶望的な孤独」の心情が、亡き友滋実に対して初めて心を開くかのように、自分の今の心情を語りかけようとするのは他ならぬ、「滋実」が「死者」(あの世の人間)であることに因る。つまり、この世での絶望があの世での光であって欲しい切なる願いが込められているのではないか。

【九段】

	原文	訓読文
65	惟魂而有靈	惟れ魂にして靈有らば
66	莫忘舊知己	舊き知己を忘るること莫かれ
67	唯要持本性	唯だ要ず本性を持して
68	終無所傾倚	終に傾倚する所無からしめよ
69	君瞰我凶慝	君 我が凶慝を瞰ば
70	擊我如神鬼	我を擊つこと神鬼の如くせよ
71	君察我無辜	君 我が辜無きを察せば
72	爲我請冥理	我が爲に冥理に請へ

▼〔人々の呪詛により命を落とした藤原滋実への哀悼〕(その三)

【八段】を受けこの【九段】は亡き友滋実に、より具体的に今の心情を、激情がほとばしるように、声高に詠み上げる。今生きている人間に働きかける術を持たぬ道真にとって、又、生きている人間が自分の無実を晴らし、京に呼び戻してくれる気配の全くない絶望感の中で、今、道真がすがりたいのは、「公正な神」の存在であり「天の神による公正な裁き」である。そしてそれを滋実に必死に訴え願うのは、その「自分」と「天の神」との仲立ちの役目である。滋実が「死者」であるからこそ頼める願いである。私が「無実」であるか否か、公正なる天の神が存在するならば、必ず白黒をはっきりさせてくれるはずだ。自分に疾しさがあるのであれば、命を落とすことも辞さない。もし無実であるならば、天下の者にそのことを明らかにして欲しいと叫喚する。裏を返せば「無実」が晴れないのは、「天の神」の不在に他ならないことを言う。これは須藤

修一氏の論ずる(注三)『白氏文集』「哭孔戡」(注四)の中にある、優れた友「孔戡」を失くしたことに対し白居易が、天の神に訴える二十五句から三十二句「賢者の生民を爲むる／生死懸って天に在り／天　人を愛せずと謂はば／胡爲れぞ其の賢を生ず／天　果して人を愛すと爲さば／胡爲れぞ其の年を奪ふ／茫茫たる元化の中／誰か此の如き権を執る」の句内容、つまり「天命はだれが握っているのか」という切なる問い掛けが、投影されていると見て間違いないと思う。

【十段】

原文	訓読文
73 冥理遂無決	冥理　遂に決すること無くんば
74 自茲長已矣	茲れより長く已みなん
75 言之涙千行	言えば涙千行
76 生路今如此	生路　今此のごとし
77 聞之腸九轉	聞けば腸九轉す
78 幽途復何似	幽途復た何似ん
79 拙詞四百言	拙詞四百言
80 以代使君誄	以て使君の誄に代へん

▼〔人々の呪詛により命を落とした藤原滋実への哀悼〕(その四)

そして【九段】を受け、七十三・七十四句の「冥理　遂に決すること無くんば／茲れより長く已みなん」の句意が前述した白詩「哭孔戡」(注四)の三十一句・三十二句「茫茫たる元化の中／誰か此の如き権を執る」の内容と表裏をなしていることが判明する。白居易が直接的に天の神の「在」「不在」を問い掛けるのに対し、道真は一歩ひかえた婉曲的な表現

に徹しているは、道真の今の置かれている立場の不安定さを暗示する。その揺れる心情が、最後の句へと一気に流れて行く。そして君を悼む気持ちを、本来ならば「誄」の文体で綴るべきだったのだが、その自分の心情は、この五言古詩というスタイルでしか、言い尽せなかったと、この一文を止めるのである。

（四）

以上、全八十句を便宜上、八句ずつ十段落に分けて概略を述べてきた。ここで改めて各段落とのつながりを考察してみる。すると、前述の井上氏の「誄」の言及に、この道真の詩を充てて考察すれば、この作品の構成が上手く説明できるように思う。

つまり、

▼［一段・二段・三段・四段・五段・六段］　【徳行】

↓（藤原滋実の陸奥の国守としての功績・徳行）

▼［七段・八段・九段・十段］　【哀悼】

↓（藤原滋実が人々の呪詛により命を落としたその死を悲しむ）

「前半」で藤原滋実の生前の徳を誉め、「後半」でその死を悲しむという、井上氏の言及する「称える事と哀悼する事が

両立する記述」になっていることが明らかになる。

そして、次に、考えなければならない事はなぜ、道真が、この詩を古代中国で制作されてきた「誄」の文体を意識し、それに倣った構成にしつつも、「誄」ではなく、「誄」に代わる「五言古詩」のスタイルにしたのかということである。

私論だが、それは道真自身が、この「五言古詩」こそが、我が心情を吐露できる最も意を得た作詩スタイルであると考えていたからではないかと考える。その根拠は以下のようなものである。

井上氏が言及するように、「誄」ならば、「四字句」を押韻する「頌」で綴るのが通例であったこと。又、「嗚呼哀哉」という四字の哀悼の定型句を用いなければならないという制約があるのに比して、古詩にはそうした制約が全くない点、そして何よりも「五言古詩」へのこだわりが道真自身にあったことを物語っていると考える。それは、筆者が、百韻という大作「敍意一百韻」が五言排律であったこと。そして、この大作のあとにこの「哭奥州藤使君」が詠まれたと考えるからである。つまり、「敍意一百韻」と「哭奥州藤使君」は当時の道真の心情を窺える「表裏一体」の大作ではないかと分析しているからである。

（注一）「哭奥州藤使君」他一編（『菅家後集』）全注釈（二）
焼山廣志監修「道真梅の会」篇　大洋印刷　平成二十五年一月

（注二）菅原道真研究―『菅家後集』全注釈（二十五）
国語国文学研究（熊本大学　文学部）第四十八号　平成二十五年二月

（注四）『白氏文集』「0003 哭孔戡」を以下に引用する。

0003 哭孔戡

洛陽誰不死　洛陽誰か死せざらむ
戡死聞長安　戡が死　長安に聞ゆ
我是知戡者　我は是れ戡を知る者
聞之涕泫然　之を聞いて涕泫然たり
戡佐山東軍　戡は山東軍の佐たり
非義不可干　義に非ずんば干（もと）むべからず
拂衣向西来　衣を拂ひ西に向って来る
其道直如絃　其の道　直（なお）きこと絃の如し
從事得如此　事に從ひ此の如きを得るは
人人以爲難　人人以て難しと爲す
人言明明代　人は言ふ明明の代
合置在朝端　合（まさ）に置いて朝端に在らしむべし
或望居諫司　或は諫司に居かんことを望む
有事戡必言　事有らば戡必ず言はんと。

或望居憲府　　或は憲府に居かんことを望む
有邪戡必弾　　邪有らば戡必ず弾(ただ)さんと。
惜哉両不諧　　惜しいかな。両(ふた)つながら諧(かな)はず。
没齒爲閑官　　齒(よはひ)を没(をは)るまで閑官たり。
竟不得一日　　竟(つひ)に一日も
謇謇立君前　　謇謇(けんけん)として君前に立つを得ず。
形骸從衆人　　形骸衆人に從ひ
斂葬北邙山　　北邙山に斂葬(れんそう)す
平生剛腸内　　平生　剛腸の内
直氣歸其間　　直氣其の間に歸す
賢者爲生民　　賢者の生民を爲(をさ)むる
生死懸在天　　生死懸って天に在り
謂天不愛人　　天　人を愛せずと謂はば
胡爲生其賢　　胡爲(なんす)れぞ其の賢を生ず。
爲天果愛人　　天　果して人を愛すと爲さば
胡爲奪其年　　胡爲(なんす)れぞ其の年を奪ふ。
茫茫元化中　　茫茫たる元化の中
誰執如此権　　誰か此の如き権を執る。

(本文は朱金城箋校『白居易集箋校』(上海古籍出版社)に拠る)。
(訓は続国訳漢文大成『白楽天詩集』に概ね従う。)

（原文中の傍線は、道真の詩に引かれている詩句）
（原文中の点線は、道真の詩内容に間接的な投影が窺える詩句）

この詩の大意は次のようなものである。

私（白居易）は孔戡の死を聞いてそぞろに涙を流した。孔戡はかって山東の節度府（地方長官の役所）で掌書記（文書係）であったとき、従史（小役人）の不正を潔しとせず、病気を理由に官職を中途で辞して、洛陽に帰ってきた。その道（生き方）の真っ直ぐなことは弓弦のようで、少しも曲がったところはない。その後、二つの要職の話があったが、惜しいかな、二つとも叶わないで閑職にいて一生を終えた。そのため平生の剛気も空しく地に帰してしまった。天が万民を愛するものだとするのならば、何故に孔戡の寿命を奪ったのであろうか。天命は、一体だれが握っているのだろうか。

（續國訳漢文大成『白楽天詩集』）

◆『菅家後集』所載「哭奥州藤使君」の執筆背景論考

（一）

筆者は先に「敍意一百韻」に試注を施した拙稿の「作品制作時期考」で次のような一文を公にした。以下再載する。

従来、この詩の制作時期については、川口久雄氏を始めとして多くの先学が一三九句の「九見桂華圓」の句の解釈を「左遷後九ヶ月後の時期」つまり、「十月から十一月」（晩秋から初冬の候）であろうと論じられて来た。

ところが、前述したように、この詩は「季節の推移」を基軸とした詠作内容になっている。そこには、「春」から「初夏」「梅雨」「盛夏」「残暑」「初秋」そして「仲秋」景を詠いつつも、「晩秋」から「初冬」の叙景や心象風景が全く詠まれていないように思えるのである。したがって「左遷後の九ヶ月後」という推定にはどうしても納得がいかない。（中略）

そこで「九見桂華圓」を「今年に入って九回目の満月を迎えた（＝今まさに九月仲秋の明月が照り輝いている）」との解釈を提起したい。

と述べ、その根拠の一つに、この詩の直後に「485秋夜　九月十五日」（棒線筆者）を置いていることが、既論の「十月から十一月」という詠作時期との整合性からの矛盾点になるのではないかと論じた。

（「菅原道真研究―『菅家後集』全注釈（二十一）―
「国語国文学研究」第四十六号　九十四～九十五頁」）

今回、「486 哭奥州藤使君　九月廿二日　四十韻」に全句にわたって注釈を施した上で考察を施すと、内容上からも、前述の筆者の論を裏付けることが出来るように思う。

その点を、先に挙げた「484 敍意一百韻」「485 秋夜　九月十五日」二首及び本稿の「486 哭奥州藤使君」の三首を並記し、三作品に流れる「詩情」を通して言及してみる。

筆者の論旨を明確にするために、まず大まかな図式化を試みる。

三詩の制作年時考

①「484 敍意一百韻」
（陰暦九月十五日直前）

⇦

②「485 秋夜　九月十五日」

⇦

③「486 哭奥州藤使君
九月廿二日四十韻」

【根拠】
139 句目「九見桂華圓」
（今年に入って九回目の満月を迎えた）

⇦

題注「九月十五日」

⇦

題注「九月廿二日」

三 詩の詩情考

【詩句】

①199句「敍意千言裏」
200句「何人一可憐」

⇦

②5句「月光似鏡無明罪」
8句「此秋獨作我身秋」

⇦

③71句「君察我無辜」
72句「為我請冥理」
73句「冥理遂無決」
74句「自茲長已矣」

【詩情】考

今の自分の心情を共に分かちあえる「一人」の友も持ち得ぬ「孤独感」。自分の生の軌跡を誰とも共有出来ぬ「絶望感」

⇦

自分の無実を晴らしてくれるような心を許し合える友を持ち得ぬ、「天涯孤独の底知れぬ心の闇」の叫び

⇦

亡くなった藤原滋実を通して天の神に自分の無実を世に明らかにしてもらうことを請う。それが、なされなければ、万策尽きるだろうという「絶望感」

このように、三詩を並記して考察すると、①→②→③の流れの中で、道真の当時の心情が手に取るように伝わってくる。

つまり、①「484 敍意一百韻」で道真の博識を改めて想起させる、古典籍の故人の事跡に拠りながら、二百句という長大な詩句を通して浮かびあがった詩情は、「自分の今の心情を誰とも分かちあえぬ孤独感」であった。だからこそ、古典籍の故人の行跡をひたすら追うしか術がなかったのである。そこにしか、慰撫するものを見出せない、道真の「絶望感」が詩の根底に流れていることを痛感する詩内容であった。

それが②「485 秋夜 九月十五日」の律詩で、「十五夜」より想起する昨年までの自分と、今の謫去の身の落差。そして「無実」の自分を誰一人弁護してくれるものを持ち得ぬ、現状への絶望感が①を受けて、改めて詠われる詩内容となっている。そして今回取り挙げた③「486 哭奥州藤使君」へとつながっている。

この詩については、「滋実の死を悼むという形を借りて、自分自身を語っていること。そこには策略によって友を死へ追いやった者への憤怒の情が込められている」ことの指摘が、先学より既になされている[道真梅の会篇『菅家後集』全注釈(二)一〇一頁]が、その指摘は、①→②→③と三詩を並べることで、より明らかにされる。

①・②の詩作品で道真が訴えていたのは、「心を許し会える友」を持ち得ぬ孤独感であったが、それは、③の詩を読むことで、それが道真の「無実」を晴らしてくれることに力になってくれる、又そうしようとしてくれる現世での人間を持ち得ない絶望感であったことがわかる。藤原滋実が呪詛によって非業の死をとげたことが、道真を大きく刺激した。それは、「現世」ではない、「あの世」の人間だからこそ、真情を吐露する作品に仕上がったのだと思う。そして「あの世」の人間に切望するのは、「天の神」への我が身への公平な采配の仲立ちであった。

そしてそれがならぬ時は、万策尽きてしまうと詠むのは、裏をかえせば、「神はどうして私の無実を晴らしてくれないのか。」「神は本当に存在するのか」という根源の問い掛けに他ならない。

これは、既刊の[道真梅の会篇「哭奥州藤使君」他一編『菅家後集』全注釈(二)]の十二句「繞身帯弦矢」の「弦矢」の出典考察の中で須藤修一氏が投影の濃厚なものとして指摘する、白居易の諷喩詩「0003哭孔戡」全句(注四)の詩情、とり

わけ、31句・32句「茫茫元化中／誰孰如此權（茫々たる元化の中／誰か此の如き権を執る）」の句内容を強く意識していると考えたい。

このように考察を進めれば、いかに道真が精神的に追いつめられていたのか、そして激情がほとばしるような詩内容になっているのか、自ずと理解できるように思う。

参考

以下、「哭奥州藤使君」全句の通釈を付す。

1　妻からの手紙では、君（藤原滋実）が死んだことを告げ、
2　（ことの）あらましは使いの者に託してきた。
3　病の原因はいやすこともできず
4　人の呪詛をうけて亡くなったと。
5　かって私たちは同じ所で蔵人として勤めていた。
6　だから彼の心の表裏はくまなく心得ているつもりだ。
7　君は真正直に過ぎるという欠点はあったが
8　曲がったことを正すということにかけては並ぶものがなかった。
9　（君は）さいはてにある東国最大の国、陸奥の
10　国守となって赴いた。
11　氷雪を口に含んで渇をいやし、〔口に巧言なく〕
12　身には弓矢を帯びて警戒を怠らなかった。〔身を持すること厳正で不正を容赦しなかった〕

13 属官のなかには金銭によって今日の官位を買った徒輩が多かったから、
14 君のことを骨の髄まで溶かさんばかりに悪く言っていた(しかし君は毅然として清節を守った)。
15 土地柄、産するのは粗悪な布なのであるが、それが租税として認められないものだから、
16 君は細美の絹帛を税として納めることを、ねんごろに(誠心誠意、手厚く)求めた。
17 値が通常の倍する上質の黄金や皮衣
18 鷹や馬、これらは共に取引の対象となる。
19 これらの交易は、どこでやるかといえば
20 多くは、(蝦夷の住む)辺境の地である。
21 この辺境の異民族の地は、東国の最も荒々しい風俗で
22 蝦夷の性格は、皆まるで狼子のように凶暴で、いつまでも野心を忘れず、人に馴れ親しむことをしないのだ。
23 (商う品物には)常識では考えられない程の値段を吹きかける。
24 破れ着古した服でさえ、高貴な人が身につける朱衣や紫衣のような、とてつもない高値をつけるのだ。
25 ほんの少しでも公正な取り引きに反すれば(双方が合意に達しなければ)
26 だしぬけに秩序をみだして反乱を企てる。
27 ずっと昔から夷狄(いてき)の民は、気短くすぐに不満を表すと云う。
28 取引きもなかなかもって規則に合わず、法を守ってくれない。
29 期せずしてなにも起こらないときは、
30 二倍の儲けが意のままだ。
31 受領は、東国の特産物をすべてとりまとめて京都におもむくのである。
32 前もって付け届けをしたせいで上役の顔も(自然に)ゆるむ。
33 金で地位を買った役人は

34 秩録が年にどれほどになるか図り知れぬほどだ。
35 担当の役人は付け届けを暦の月日に書き入れをし
36 (更に)三・四枚の懐紙に細かに記している。
37 受領たちが任満ちて帰京して、付け届けをしていた役人と座席を並べて会う。
38 宮中の役所で、付け届けを記した役人と受領とが眼をひそかに見合わせて、目でうなずき合っている。
39 役人たちは、いつぞやの東国からの贈り物に対してお返しをしようと思って
40 私利私欲をむさぼることに目がくらんで、国政の根本の決まりを乱してしまう。
41 もし上役に物に屈しない度胸があれば
42 (その様子に)歯ぎしりせずにおられようか。
43 必ずやはっきりと不正を糾弾し
44 あの恥知らずどもを屈伏させるに違いない。
45 ところが、あろうことか、この盗人どもは、悪事の露見を恐れ、君のような不正を糾弾した主人を逆恨みし
46 君を死に到らしめてはじめてそのことの内情が明らかになった。
47 君の霊魂は　暗い黄泉路に入ってしまい
48 もはや立ち居振る舞いをうかがう手立てもない。
49 君の亡骸はすでに灰塵となっていて
50 言葉をかけて、我が思いを伝えるあてもないのだ。
51 葬られてから百五十日が過ぎ
52 東国と九州と、隔たること三千里。
53 君と別れて以来、あまたの月日がめぐり
54 我ら二人を隔てて重なり合う幾山河。

55 思い起こせば昔、東国へ赴任する君と別れたとき
56 君が(私より先立って)傷つき死んでしまうなど、どうして想像できたであろう。
57 君はひっそりと黄泉(よみ)の地に入ってしまい
58 私は目まぐるしく泥土(でいど)に棄てられる身になった。
59 西の空の果てにいる私と地下にいる君と
60 その君の訃報(ふほう)を聞いたとたん私は声をあげて泣きだした。
61 泣きやんで昔を回想すると
62 君の、ある言葉が耳朶(しだ)に残っている。
63 君は言った「私はあなたから人知れぬ恩徳を蒙りました。
64 (私の)生命ある限り、いや、死んだ後であってもあなたのご恩には必ず報いたいと思っています」と。
65 君の魂に霊が宿るのなら
66 どうかこの昔からの友を忘れないでほしい
67 そして願わくば、私が本性をしっかりと保ち続け
68 ゆらぐこと無く、しっかりと私が信念を貫けるように私を支えてもらいたい。
69 もし、この私によこしまな振るまいがあると見たならば、
70 鬼神となって私を撃ちくだいてくれ。
71 一方、今の私が無実の罪に陥っていると知ったなら、どうか天の神の許で正当な裁きが行われるよう請うてくれ。
73 もし、あの世で、公正なる神の裁きもつきかねるような事態になれば、
(君の祈りにも拘わらず神の裁きがないのならば、〈無実が晴れないのならば〉)
74 これで、すべては、永久に闇に(葬れて、埋もれて)しまうだけだ。
(もう真実を訴える術が全てが絶たれる)
75 こうして君に(この今の私の気持ちを)告げると、涙がとめどなく流れてくる。

76 今の私の生き様は、このような有様だ。
77 君の訃報を聞いて、私のはらわたは、九転するほどの悲しみに打ちひしがれている。
78 君のあの世への旅路はどうなのだろうか。
79 この拙い詩、四〇〇字でもって、
80 君の惜しまれる死への誄（追悼文）に代えさせてもらいたい。

◆『菅家後集』所載「讀開元詔書　五言」作品考

「479　讀開元詔書　五言」

原文　平仄

1　開元黄紙詔　○○○●●
2　延喜及蒼生　○●●○◎
3　一為辛酉歳　●●○●●
4　一為老人星　●●●○◎
5　大辟以下罪　●●●●●
6　蕩滌天下清　●●○●◎
7　省徭優壮力　●○○●●
8　賜物恤頽齢　●●●○◎
9　茫々恩徳海　○○○●●
10　獨有鯨鯢横　●●○○◎　具見于詔書
11　此魚何在此　●○○●●
12　人遣汝新名　○●●○◎
13　呑舟非我口　○○○●●

14 吐浪非我聲　●●○●◎
15 哀哉放逐者　○○●●●
16 蹉跎喪精靈　○○●○◎

詩形　押韻・韻字

五言古詩　下平声八庚韻ならびに下平声九青韻の通韻。韻字は生・星・清・齡・横・名・聲・靈。

訓読

1 開元黄紙の詔
2 延喜蒼生に及ぶ
3 一つは辛酉の歳の為なり
4 一つは老人星の為なり
5 大辟以下の罪
6 蕩滌して天下清し
7 徭を省きて壮力を優し
8 物を賜ひて頽齡を恤れぶ
9 茫々たる恩徳の海
10 獨り鯨鯢の横たふるあり　具に詔書に見ゆ
11 此の魚何ぞ此に在らん
12 人は譖ふ汝が新名なりと

13 舟を呑むは我が口に非ず
14 浪を吐くは我が聲に非ず
15 哀しい哉放逐せらるる者
16 蹉跎(さた)として精霊を喪(うしな)ふ

通釈

1 黄紙に書かれた開元の詔書を読んだ。
2 延喜という語の通り、うれしいことが一般人民にも広く及ぶことであろう。
3 改元が行われたのは、一つには辛酉の歳にあたり、革命が起きる恐れがあるためであり
4 あと一つは昨年(昌泰三年)老人星が現れたためである。
5 大赦令が発布されて、死罪以下の罪を、
6 洗いすすぎ天下が清らかになった。
7 夫役を省きて壮者の力を余裕あらしめ、
8 高齢者に物を賜って救済がなされた。
9 天皇のはてしなく広大な慈悲の海に
10 一頭の鯨鯢が横たわる(と詔書に見える。)(詳細が詔書の中に記されている)
11 鯨鯢などという名の魚がここに出てくるのであろうか。
12 人は「鯨鯢」はこの私の新しい名だという。
13 舟を呑むのは私の口ではない。(私は断じて逆臣などではないのだ)。

14　浪を吐く響きは私の声ではない。（私は何も言ってはおらぬ）。
15　何と哀しいのだろう。（無実なれど）放逐された者は。
16　（為す術もなく身も心も）よろよろとして私は魂のない抜け殻のようだ。

考察①

「讀開元詔書　五言」と「開元詔書」について

「延喜改元」「開元詔書」についての言及は既に先学によりなされているが、とりわけ、この作品と「延喜改元」「開元詔書」についての、詳細な考察がなされたものとして谷口真起子氏の論を挙げることが出来る。

（『「開元の詔書を読む」と延喜改元』（『菅原道真論集』P.387～P.405）

谷口氏はまず、この十六句中の自注のある十句以前の詩句はすべて詔書を踏まえた記述ではないかと推測し、その措辞と内容の両面から、現存するほかの詔書、特に「改元詔書」との比較を試みその分析から、次のように論じている。

「延喜開元詔書」は現存していないが、本詩の構成から、元（もと）の「開元詔書」の構成を推測することが可能である。その根拠を次のように示す。それはこの「読開元詔書」が、「開元」「蒼生」「大辟以下」「蕩滌」「天下」といった定型の措辞を含むこと、かつ

第二句は延喜という新・元号を、

第三・四句は、改元の理由を、

第五・六句は、恩赦について、

第七・八句は、朝廷からの施し(賑恤)について叙述すること

など内容的にも他の改元詔書と一致する傾向を持っていることから、第十句以前はすべて延喜開元詔書を踏まえた記述と考えられるからである。言い換えれば道真の「読開元詔書」から、現存しない「延喜開元詔書」の構成が推測できる。

更に『扶桑略記』(昌泰四年裏書)が、この改元について「逆臣并びに辛酉革命に依る也」或は「逆臣、辛酉革命、老人星の事に依りて改元せし由、諸社に申さるる」と述べる一文に触れ、「延喜改元が行われた背景には、老人星出現や辛酉革命など天がもたらした要因以上に藤原仲麻呂にも比すべき反逆者を完全に排除しようとする動きがあり、それは「鯨鯢」という詔書中の一語に端的に示されていた。改元を主張したのは三善清行だが、彼が詔書の起草者であったかは分からない。しかし清行の論旨と道真の詩とを並べてみれば、改元詔書の記述内容に清行の意見が色濃く反映されていたことは確実で、『扶桑略記』の裏書が改元の理由の筆頭に「逆臣」を挙げたのは適切な理解であった。

(『「開元の詔書を読む」と延喜改元』、『菅原道真論集』P.400)

と結論付けている。傾聴すべ言及だと思う。

考察②

第10句、「獨有鯨鯢横」の「鯨鯢」についての考察

この「鯨鯢」については[語釈]の頁(『春秋左氏傳』宣公十二年、杜預注)に用例が見えることは言及した。さらに『白氏文集』の使用語句鯨鯢と呑舟について考察すると、

「0007 題二海圖屏風一　元和己丑年作」に「鯨鯢得二其便一、張レ口欲レ呑レ舟」の句が見える。以下、この詩の原文と書き下し文を引いてみる。

0007 題二海圖屏風一　元和己丑年作

海水無風時。波濤安悠悠
鱗介無小大。遂性各沉浮
突兀海底鼇。首冠三神丘
釣網不能制。其来非一秋
或者不量力。謂茲鼇可求
贔屭牽不動。綸絶沉其鈎
一鼇既頓頷。諸鼇斉掉頭
白濤與黒浪。呼吸繞咽喉
噴風激飛廉。鼓波怒陽候
鯨鯢得其便。張口欲呑舟
萬里無活鱗。百川多倒流
遂使江漢水。朝宗意亦休
蒼然屏風上。此畫良有由

海圖の屏風に題す　元和己丑の年作る

海水風無き時、波濤安ぞ悠悠たる
鱗介無小大と無く、性を遂げて各沉浮す
突兀たり海底の鼇、首に三神丘を冠し
釣網も制する能はず、其来ること一秋に非ず
或者力を量らずして、茲鼇求む可しと謂ひ
贔屭牽けども動かず、綸絶えて其鈎を沉む
一鼇既に頷を頓れば、諸鼇斉しく頭を掉ふ
白濤と黒浪と、呼吸して咽喉を繞る
風を噴きて飛廉を激し、波を鼓して陽候を怒らしむ
鯨鯢其便を得、口を張って舟を呑まんと欲す
萬里活鱗無く、百川倒流多し
遂に江漢の水をして、朝宗意亦休せしむ
蒼然たり屏風の上。此の畫良に由有り

（本文は『白居易集箋校』朱金城箋校に拠り、訓は「続国訳漢文大成　白楽天詩集一』に概ね拠る。）

この白詩において、鯨鯢が舟を呑む意は、広大な万里にわたって穏やかな海をその性を全うして泳いでいたありとあらゆる大魚小魚を、まるで舟を呑みこんでしまうかのように、鯨鯢がその大きな口で丸呑みにしてしまうこと、そのために万里にわたって活きた魚がいなくなるほどの衝撃を表わしている。

政に言い換えてみれば政治が穏やかでとてもうまく治まった世の中において、一人の国家を奪おうとする人間がことを起こし、国を丸呑みにして天下を我がものとしてしまうことの意味になるのではないか。「鯨鯢」を人間に置き換えれば、この残虐な行為を犯した大罪人といえよう。

所功氏は著に

「改元詔書」の文中には「逆臣」道真を「鯨鯢」になぞらえて非難するようなところがあったとみられる。とすれば、この延喜改元は辛酉革命説や老人星出現を表向きの理由としながら、それも実は巨魁道真の左遷を正当化する目的のための手段に過ぎなかったことになろう」と言及している。

（『三善清行』吉川弘文館一〇〇頁）

考察③

第13句「呑舟非我口」の「呑舟」と、第14句「吐浪非我聲」の「吐浪」とについての考察

「呑舟」と「吐浪」の語句については、［語釈］の頁で意を記しているが「呑舟」も「吐浪」も大魚である「鯨鯢」を指している。そして、この対になっている二つの言葉は『文選』左思の「呉都賦」の次の一文を踏まえている。

「於」是乎長鯨呑」航、脩鯢吐」浪」

この「呉都賦」の一文から窺えることは、「鯨呑航」は天下を丸呑みにする「逆臣」のことを指しているのであり、また「鯢吐浪」は讒言の言葉を吐く（好ましくない言葉を吐く）意と考えられる。

考察④

第15句「哀哉放逐者」の「放逐」についての考察

この「放逐」の語釈に投影されているものの考察として、既に滝川幸司氏より指摘がある所だが（後述）先の「語釈」の「15放逐」の頁で引いた「白詩」二首のうちの一首「1134和萬州楊使君四絶句競渡」を再度以下に全句載せてみる。

1134 和萬州楊使君　四絶句競渡　（萬州の楊使君に和す　四絶句競渡）

競渡相傳為泪羅　　競渡　相傳ふ　泪羅の為にすと
不能止遏意無他　　止遏する能はず　意他無し
自經放逐來憔悴　　放逐を經てより來憔悴せり
能校靈均死幾多　　能く靈均を校べて死するまで幾多ならん

（原文・訓ともに新釈漢文大系本に拠る。『白氏文集四』一六二頁）

新釈漢文大系本の「解題」には「万州刺史楊帰厚に和して詠んだ四首の絶句、使君は刺史の敬称。其の一は「競渡」、つまりベーロンの年中行事について詠んだ詩」と説明があり「語釈」には「競渡」について「舟をこぐ競技、ボートレース、ベーロン、梁・宋懐の『荊楚歳時記』に「五月五日、競渡あり。俗に屈原が泪羅に投ずるの日、其の

死所を傷むが為なり。敬に並びた舟楫に命じて以て之を拯(すく)ふ」と。」の説明が又、「放逐」「憔悴」については『楚辞』漁夫篇に「屈原既に放たれて、潭に遊(さまよ)ひ、沢畔に行吟し、顔色憔悴し、形容枯槁す」と」の説明が、又、「霊均」については「屈原の字。『楚辞』離騒に「余に名して曰く正則、余に名して曰く霊均」と」の説明がある。

つまりこの白詩は、白居易自身が、江州に貶謫されている我が身を、屈原のそれになぞらえ詠んだ詩内容である。「汨羅」「放逐」「憔悴」「霊均」はすべて屈原の故事による措辞であることがわかる。一方、道真が「放逐」という詩語を使うその背景に讒言により貶謫され、汨羅に身を投じた屈原の故事を響かせていると明言してもよいと思う。

このことについて、滝川幸司氏は、次の一文を載せる。

「放逐」は追放の意であるが、司馬遷「報任少卿書」(『文選』41)に「屈原放逐せられて乃ち離騒を賦す」、賈誼「屈原原文」(同60)に「屈原は楚の賢臣也。讒を被りて放逐せられ離騒賦を作る」とあるように、屈原が讒言によって追放されたことと関わって使用される。((中略))。道真のいう「放逐者」というのも、自らを屈原と重ねて表現していると考えられよう。屈原と同じように、無実にもかかわらず讒言によって「放逐」されたというのである」　(国文学解釈と鑑賞」平成十四年四月号)

また所功氏はこの「放逐」の背景として、次のような言及をしている。

翌昌泰四年(901)正月二十五日、道真は突如右大臣の座から太宰権帥に引き降ろ

された。これは一種のクーデターであって、その首謀者は左大臣時平であり、大納言源光や中納言定国なども共謀していたとみられる。また急を聞いて内裏に駆け付けられた宇多法皇を侍従所の西門前で強引に阻止したのは『扶桑略記』に紀長谷雄と伝え、『江談抄』や『北野縁起』には藤原菅根であったと伝えられている」。さらに「道真は一言の弁解も許されず、旅装を整える遑もなく、二月一日には罪人として大宰府へ下向せねばならなかった」（『三善清行』所功著）

と説明する。

総括考察

「開元詔書」を詠んだ道真の苦しい思いが生々しいほどに私たちの心に訴えかけてくるような詩内容となっている。藤原時平の策略によって太宰府への左遷を余儀なくされ、辛く苦しい日々を強いられる道真にとって、「詔書」に書かれた「鯨鯢」の語は思いもよらぬ語だっただろう。無実の罪が明らかになって都へ帰れるかもしれないという、まさに祈るような微かな希望さえも打ち砕かれたのではないかと察せられる。為す術も無く、胸を刺すような痛みを感じながらその場にうずくまる道真の姿が感じ取れる。とりわけ十六句目の「蹉跎喪精霊」の句が哀しいほど心に響いてくる作品である。

◆『菅家後集』所載「慰少男女　五言」作品考

「483　慰少男女　五言」

原文	平仄	
1　衆姉惣家留	●●●○○	
2　諸兄多謫去	○○○●◎	仄声六御韻
3　少男與少女	●○●●●	
4　相随得相語	○○●●◎	仄声六御韻
5　晝飡常在前	●○○●○	
6　夜宿亦同處	●●●○◎	仄声六御韻
7　臨暗有燈燭	○●●○●	
8　當寒有綿絮	○○●○◎	仄声六御韻
9　往年見窮子	●○●○●	
10　京中迷失據	○○○●◎	仄声六御韻

11 裸身博弈者 ●○●●●

12 道路呼南助 ●●○○◎ 仄声六御韻

南大納言子、内蔵助、博徒。今猶号南助矣

13 徒跣彈琴者 ○●○○●

14 閭巷稱辦御 ○●○○◎ 仄声六語韻

俗謂貴女為御。蓋取夫人女御之義也。藤相公、兼弁官、故称其女也。

15 其父共公卿 ○●●○○

16 當時幾驕倨 ○○●○◎ 仄声六御韻

17 昔金如沙土 ●○○○●

18 今飯無饜飫 ○●○●◎ 仄声六御韻

19 思量汝於彼 ○○●○●

20 天感甚寛恕 ○●●○◎ 仄声六御韻

詩形 五言古詩。

押韻・韻字 仄声六御韻の通韻。韻字は去・語・處・絮・據。

訓読文

1 衆姉は惣て家に留まり
2 諸兄は多く謫去す
3 少男と少女と
4 相随ひて相語るを得たり
5 晝 飡するに常に前に在り
6 夜 宿するに亦處を同じくす
7 暗きに臨んでは燈燭有り
8 寒さに當りては綿絮有り
9 往年窮子を見るに
10 京中迷ひて據を失ふ
11 裸身にて博弈せる者
12 道路 南助と呼ぶ
《南大納言の子 内蔵助、博徒なり。今猶 南助と号す》
13 徒跣して彈琴の者
14 閭巷 辨御と称す
《俗に貴女を謂ひて御と為す。蓋し夫人・女御の義なり。藤相公、弁官を兼ぬ。故に其の女を称せり》。

15 其の父は共に公卿にして
16 当時、幾たびか驕倨せる
17 昔は金をも沙土の如くし
18 今は飯にも饜飫する無し
19 汝を彼に思量するに
20 天感　甚だ寛恕たり

通釈

1 母上や大きい姉達は京の家に留めおかれた
2 それぞれの地位にあった兄達も謫され、遠くへと流され京を去って行った。
3 幼い男の子と女の子のお前達は私とともに西へ下ってきた。
4 (今)その子供達と私は起居を共にし、またともに語り合えている。
5 昼、食事をするときも、いつもお前達の前に父の私がいるし、
6 日が暮れて宿で寝る時にもいつもお前達と父の私は一緒である。
7 夜の暗さにも、ともし火があって怖くはないだろうし、

8 寒い夜にも(その寒さを防ぐくらいの)衣服はお前たちにあてがわれている。

9 過ぎし年(先年)、私は暮らしに困っている子を京で見たことがある。

10 京の街中をさまよっていたが、きっとよるべきところの家をなくしたのだろう。

11 裸身で賭博をする者を

12 道行く人は、南助と呼んでいた。

《大納言南淵(年名)殿の子、内蔵助(良臣)は、(身を持ち崩して)博打打ちとなった。(零落したとはいえ)今でも「南助(内蔵助の南淵君)とあだ名される。》

13 素足で琴を弾く女を、

14 巷では、弁御と呼んでいた。

《一般に貴女のことを御という。思うに「御」の字を夫人・女御の意に取ったものと思われる。参議藤原氏は弁官を兼任していたので、其の娘を「弁の御」(弁官の姫君)と呼んだのだ》。

15 彼らの父親は共に上流貴族で

16 その当時は傲りたかぶり、人を見下していたものである。

17 お金も沙土のように惜しみなく使い果たし、

18 今では一食一食の食事さえ、こと欠くありさまである。

19　お前達を(そんな)彼らと比べると、
20　天の思いは非常に寛大で優しい(と感謝すべきである)。

補説①

この詩の背景を知れるものとして、川口久雄氏や柿村重松氏を始めとする先学が指摘する次の『大鏡』の一文がある。傍線を付した箇所は既に語釈の「1衆姉」「2諸兄」の項で、『研究資料日本古典文字』の注を引用して論じた。

『大鏡』左大臣時平傳

右大臣の御覚えことのほかにおはしましたるに、左大臣やすからず思したるほどに、さるべきにやおはしけむ、右大臣の御ためによからぬこと出できて、昌泰四年正月二十五日、太宰権帥になしたてまつりて流されまふ。

このおとど、子どもあまたおはせしに女君たちは婿とり、男君たちは皆ほどほどにつけて位どもおはせしを、それも皆方々に流されたまひてかなしきに幼くおはしける男君・女君たち慕ひ泣きておはしければ「小さきはあへなむ」とおほやけもゆるさせたまひしぞかし。帝の御おきて、きはめてあやにくにおはしませば、この御子どもを同じ方につかわさざりけり。

(日本古典文学全集『大鏡』)(小学館)(傍線筆者)

補説②

この詩の対象である道真の「我が子」を詠む作品として、『菅家文草』『菅家後集』の中で明らかなのは次の四篇である。

① 「117 夢阿満」（七言古詩）（『菅家文集』）→補説②
② 「260 言子」（七言古詩）（『菅家文集』）
③ 「483 慰少男女」（五言古詩）（『菅家後集』）→本稿
④ 「503 秋夜」（七言絶句）（『菅家後集』）→補説②

この四首のうち①と④については後述する。②の「260 言子」は、我が子を詠む視点に、陶淵明の詩「責子」に相通じるものがあるが、我が子の不才・不器量を嘆く建前を取りながら、実はいとしい子供たちを置き去りにして讃岐守として謫居している我が身を嘆くところは先の陶淵明が「酒」で子の不出来を慰めようと諦める句内容とは異質の句作りとなっている。

一方、今回取り上げた「483 慰少男女」で詠まれているのは、補説①で引いた『大鏡』の一文（幼くおはしける男君。女君たち慕ひ泣きておはしければ「小さきはあへなむ」とおほやけもゆるさせたひしぞかし」のような背景のもとで、太宰の地に引き連れて来た子供たちであった。その道真にとって、いとおしくてならない、また、悲傷の日々の中で大きな支えとなり、慰めでもあったであろう、この子供の中の一人を亡くしたことを詠った詩が、次の④「503 秋夜」である。この作品については既に拙稿で論じた。

（熊本大学「国語国文学研究」第三十九号　五〇頁～五十四頁）

ここでは、原文・訓及び口語訳のみを載せる。

「503 秋夜」

1 床頭展轉夜深更　　床頭　展轉して夜深更
2 背壁微燈夢不成　　壁に背く微燈　夢成らず
3 早雁寒蛬聞一種　　早雁　寒蛬　聞くに一種
4 唯無童子讀書聲　　唯童子の書を讀む聲無し

童子子小男幼字　近曾夭亡　　童子は小男が幼字、近ごろ曾て夭亡す

口語訳

1 (秋の夜長)寝床で眠れるまま寝返りをうっているうちに(いつの間にか)夜明けを迎えてしまった。
2 壁を背にした、ほの暗い灯の下で(私の愁いは一層深まり)眠りにつくことが出来ない。
3 秋の到来を告げる早雁の声を聞いた時も、秋の深まりを知らせる寒蛬の声を耳にした時も、その鳴き声は例年のそれと少しも変わるものはなかった。
4 (なのに)今年の秋だけは幼かった我が子の書物を読む声が聞かれないのである(ことが、たまらなくつらい。)

〔童子とは年かさの行かない幼い子の呼び方である。この幼子を近ごろ亡くなってしまった。〕

この「503秋夜」は『菅家後集』の編集事情より鑑みるに、既に論じて来たように、大概は、時系列に配列されている。とすれば、この詩は、大宰府左遷二年目、つまり二度目の秋を迎えた中で詠作されていると考えられる。道真の死がすでに半年後に迫っている頃のものである。「483慰少男女」が詠まれてほぼ一年後の出来事と考えられる。

この詩の読後感を一言で記すならば、「寂寥感」もしくは「惨悽感」といったものであろう。いとしい我が子を亡くして、その悲しみや苦悩を詩に託す気力が、道真にはことごとく削り落とされている印象を抱く。我が子の死と迫りくる我が身の死とが異次元のものではないといった諦念がこの詩の根底に流れているように思えてならない。そして、それが、一層、重く、悲痛さを、読み手に訴えていることが、次の、道真三十九歳のころに詠まれた次の①「117夢阿満」の詩と比較すれば、合点がいく。

次に引くこの①「117夢阿満」は岩波古典大系本の補注で川口久雄氏が指摘するように「〈阿満〉は固有名詞ではなく、愛情をこめて、私のむすこというほどの意」(六六七頁)である。以下、原文・訓・口語訳のみを載せる。なお、原文及び口語訳は、大方を、小島憲之・山本登朗両氏の『菅原道真』(研文出版)を引用し、筆者が若干の加筆を施してみた。

「117　夢阿満」

原文

1　阿満亡來夜不眠
2　偶眠夢遇涕漣漣

訓読文

阿満亡せにしより　夜眠れず
偶たま眠れば　夢に遇ひて涕漣漣たり

3 身長去夏餘三尺　身長は去にし夏　参酌に余れり
4 齒立今春可七年　齒立ちて今春　七年可り
5 從事請知人子道　事に從ひては知らんことを請ふ　人の子の道
6 讀書暗誦帝京篇　書を読みては暗誦す　帝京篇

初讀賓王古意篇　初め賓王の古意篇を読みたりき

7 藥治沈痛纔旬日　薬の沈痛を治めしことは纔かに旬日
8 風引遊魂是九泉　風の遊魂を引きしは是れ九泉
9 爾後怨神兼怨佛　爾後　神を怨み兼、仏を怨む
10 當初無地又無天　当初　地無く又天無し
11 看吾兩膝多嘲弄　吾が両膝を看て　嘲弄すること多し
12 悼汝同胞共葬鮮　汝が同胞を悼みて　共に鮮を葬る

阿満已後、小弟次亡　阿満已後、小弟次いで亡せり

13 韋誕含珠悲老蚌　韋誕　珠を含みて　老蚌を悲しむ
14 莊周委蛻泣寒蟬　莊周が委蛻　寒蟬に泣く
15 那堪小妹呼名覓　那んぞ堪へん　小妹の名を呼びて覓むるに
16 難忍阿孃滅性憐　忍び難し　阿孃の性を滅ぼして憐れぶに
17 始謂微微腸暫続　始めは謂へらく　微微として　腸の暫らく続くと
18 何因急急痛如煎　何に因りてか急急として痛きこと煎るが如き
19 桑弧戸上加蓬矢　桑弧は戸上にありて蓬矢加ふ
20 竹馬籬頭著葛鞭　竹馬は籬頭にありて葛鞭を著く

21 庭駐戯栽花旧種　庭には駐む　戯れに花の旧き種を栽るしを
22 壁残学点字傍辺　壁には残す　学びて字の傍辺に点ぜしを
23 毎思言笑雖如在　言笑を思ふ毎に在るが如しと雖も
24 希見起居惣惘然　起居を見んことを希へば惣べて惘然たり
25 到処須弥迷百億　到らん処は須弥　百億に迷はん
26 生時世界暗三千　生まれん時は　世界三千　暗からん
27 南無観自在菩薩　南無観自在菩薩
28 擁護吾児坐大蓮　吾児を擁護して大蓮に坐せしめたまへ

通釈

【一段】

1 阿満が亡くなってからこのかた、夜も眠れない。
2 偶たまどろんでも、阿満を夢に見て涙がはらはらと落ちる。
3 身長は去年の夏、三尺(約九十センチ)に余るほどにもなり、
4 年齢は今年七つになっていた。
5 勉学に従事すれば人の道の基本である孝について学びたいと言い、
6 書を読めば(長篇の)帝京篇を暗誦さとしてしまうような聡い子であった。

【二段】

7 薬であの子の激しい痛みを和らげてやれたのはわずか十日。
8 風があの子の体から遊離した魂を運び去ったのは九泉の国。
9 それ以来私は神を怨み仏を怨みんだ。
10 (特に)当初はあまりの悲しみに呆然として天も地もないような思いだった。
11 (かつては)あの子がまとわりついて遊んだ我が両の膝を見てあざけり笑いたくなるような気持になるのは、
12 おまえの弟までも相ついで亡くなって、夭折した一児をいっしょに葬らねばならなかったからだ。

【三段】

13 かつて孔融が韋康・韋誕の兄弟の息子を持つ父親にいった言葉が、(親の目からみて)この兄弟に比すべき我が子らを失った悲しみとして(一層つらく)響いてくる。

(＊晉陳寿撰『三国志』魏志・荀或伝の裴松之の注に見える逸話。韋康・韋誕の兄弟が二人ともすぐれていたので孔融という人が二人の父親に「あなたのような年老いた蚌(はまぐり)から二つの真珠が採れようとは」といったという故事を踏まえる)

(静永健氏　教示)

14 また荘周が、子孫は天地から委ねられた抜け殻のようなものに過ぎないと説くのを見るにつけても　私はやはり麻呂を思い出して、
　秋の初めに鳴くひぐらしの声に泣かずにはおれない。
15 どうしてこの悲しみに堪えられよう、おまえの小さな妹が、(まだおまえが死んだということが理解できなくて)おまえの名を呼んで探し求めるとき
16 まことに忍び難い、おまえの母親が・ほとんど命も堪え難げに嘆いているのを見るのは、

17 最初、少しお腹がしくしくすると言っていたが
18 どうしたことか、急に煎るような激しい悲しみに襲われたのはいったい何によるか。

【四段】

19 木の弓と蓬の矢(男子が生まれると、これで天地四方を射て、将来の雄飛を祈念した)は、まだ戸口に懸けてある。
20 籬にはまだ阿満が遊んでいた竹馬が、葛で作った鞭を添えて立てかけたままになっている。
21 庭には、あの子が戯れに植えた古い花の種が芽を出している。
22 壁には字を練習して傍らに訂正を加えたものが今も残っている。(それらを見ると、もうほとほと絶え難い悲しみに襲われる。)
23 あの子の言笑する様子は今もありありと目に浮かぶけれど、
24 その立ち居振る舞いを見ようと思うと、(あの子はもういないのだと気づいて)呆然とする。
25 阿満の亡魂は今ごろ、須弥山のほとりの無数の道に心細く迷っているのではないか。
26 そして無明 の輪廻を脱しえず、父の知らない三千世界のどこかでまた生まれ変わるのだろうか。
27 南無観世音大菩薩、
28 どうぞ吾児を守護して、極楽浄土の大きな蓮の上に座らせてやってください。

＊小島憲之・山本登朗『菅原道真』(日本漢詩人選集)一九九八年)

＊―線筆者訂正・加筆箇所

道真の愛息を失った父親としての悲愴感・喪失感が道真自身の絶叫とも換言できるような語で畳み込まれており、読み手にそれが深く迫ってくる。

しかしながら、「503秋夜」と比すと、明らかに、道真自身の詩情が異なる。詩という媒体に託す道真の精神の昂揚度合が大きく異なるのである。この「117夢阿満」を詠む道真には子を失う喪失感とともに、亡き子の冥福を切に祈る親としての強い使命感、(それはとりもなおさず生命力に他ならないが、)それが横溢していることを認めることは容易である。そこに「503秋夜」との大きな差異を感じる。

そしてこの詩を通して「503秋夜」の方に却って一層の子を亡くした苦悩と喪失感が浮かび上がってくるように思えてならない。太宰の謫居生活での救いようのない道真の精神状態を垣間見る思いがする。

総括

道真の我が子を詠んだほかの作品にも言及しながら「483慰少男女」の解釈を試みたが、そこに指摘できたことは、このような「公」「私」の「私」を主題とする詩には詠み手の精神状態が濃く反映しているという自明のことの再確認である。「483慰少男女」も、その例外ではない。京より母親や兄弟姉妹から引き離されて、父親に伴ってついてきた幼子を父親である道真は、何をもって慰めようとしたのか、それが痛いほど伝わる詩内容であった。自分たちよりより悲惨な状況にあった子供たちの例を出して、それよりは、まだと慰撫する道真の真意は、とりも直さずそれを自分に投影させ、古典籍の偉人の不遇と我を鑑み、今の我が身を鼓舞しようとする精神の葛藤が詠み手に強く迫ってくる作品であった。

第一部　［作品論］

「2. 太宰府謫居二期　延喜元年（九〇一）初冬～延喜二年（九〇二）早春」

「東山小雪」

「雪夜思家竹」

「梅花」

この期の作品としては「東山小雪」から「梅花」あたりのものを想定している。この時期、延喜元年の冬を迎える頃から道真の詩風に変化の兆しが見えて来るように思う。具体的なこの期の道真の詩の傾向として次の二点を指摘することが出来る。「1．太宰府謫居一期」時に詠まれている作品群に比して道真自身が、精神的に或る種の安定が見られるようになったことが大きいと思われるが、「自然の事物」を「事物」として見つめることが出来るようになり、その「事物」に「自己の感情移入」を図る作品が目立つようになる点が、まず一点目である。そしてその「自己の感情」とは、主に「望京の念」と換言してもよい。

そして二点目は、道真の得意とする「見立て」の技法を駆使する作品が目立つ点である。これは道真の「詩人」としての自負、執念なるものが或る種の精神の安定期を迎え、表出した事象とも言い換えられる。

ここでは「東山小雪」「雪夜思家竹」「梅花」の三首を取り上げ考察をする。

◆『菅家後集』所載「東山小雪　五言」作品考

「487 東山小雪　五言」

本文　　平仄

雪白初冬晩　●●○○●

山青反照前　○○●◎

誤雲獨宿磵　●○●○

疑鶴未歸田　○●●◎

不放行看賞　●●○○●

無端坐望憐　○○●●◎

客魂易消滅　●○●●

遇境獨依然　●●●◎

脚韻は下平声先韻　韻字は前・田・憐・然である。

訓読

・雪は白し　初冬の晩
・山は青し　反照の前
・雲は獨り　磵に宿るかと誤つ
・鶴は未だ　田に歸らざるかと疑ふ
・行きて看て賞せむことを放されず
・無端くて坐して望みて憐れむ
・客魂　消滅し易し
・境に遇ひて　獨り依然たり

通釈

・初冬の夕暮れの今日、外では雪が降り白化粧の様である。
・山は夕焼けの中に残影を受けて青く浮き立ったように見える。
・谷間に白い雪がたちこめているのと思うと、それは白雪が降ったのを見誤ったのだった。
・白鶴が田に帰らないで山にいるのかと思うと、それは山に降った白雪だったのである。
・山に降った新雪をめでて外に出てみたいのだが、それは今の私には許されないことだ。
・どうすることも出来ずこの客舎にすわったままで遠望して雪をながめやり、一人感慨を催している。
・旅にある身の物思いは、切なく魂も消え消えとなり易い。

・折に触れてこうした境遇に出会うと(忘れていた旅愁を新たにする。)
身の憂えは、依然として旧のままによみがえることだ。

考察①

○二句目「山青反照前」の「反照」の表現内容について

向島成美氏は著『漢詩のことば』(〔あじあブックス〕大修館書店)の中で、次のような詳細な論を展開されている。

漢語で「返景」「反照」の日本語訳が「夕日の照りかえし」とあるのが大半だが、この語の含む「光線が一旦何かに当たって反射する」意は漢語にはないのではないかという視点より論を起こされ、中国の古典籍より多くの用例を出し考察分析をなされている。

具体的には、中国詩史の上で夕日がうたわれるようになったのはほぼ三世紀初めの魏晋の頃で『詩経』や『楚辞』にもその例がないし、漢代においても夕日は詩にうたわれることはなかった。故に「返景」「返照」についての用例も『文選』や六朝詩の『玉台新詠』には見えない。「返景」の語が見えるのは唐・王維の「鹿柴」と「瓜固詩」の二詩で、特に後者の「瓜固詩」中の「返景」には南朝梁の劉孝綽の「侍宴集賢堂応令」中にある「反景入池林」を

踏まえたものと考察され、この劉孝綽の詩句の「返景」には『初学記』巻一、天部上、日の項にある「日西落、光反照於東、謂之反景、(日西に落ち、光東を反照する。これを反景と謂ふ)」を背景とした使用例だと考察され、「反景」とは西から東の方向を照らす夕日の光そのものなのであり「反」は光が格別何かに当たって反射するというのではなく、太陽が沈む西とは反対の方向、つまり東へ光がかえるということを意味するもののごとくに思われる。「景」は太陽そのものではなく、光を意味する語と結論付けられている。

一方、「反照」も『文選』『玉台新詠』にその用例は見られず、唐以降の詩人にこの語が多く使われるようになったことを杜甫の詩の例を引きながら論じられている。そして「返照」の「返」も「反照」の場合と同様に西から東へかえすという意味にとるべきだとまとめられている。

(「返景」「返照」考　二一二～二三〇頁)

考察②

○三句目「誤雲獨宿磵」四句目「疑鶴未歸田」の表現について

既に先学より指摘されている(『平安時代文学と白氏文集　道真の文学研究篇第二冊』金子彦二郎著　三九五～三九六頁)事だが、この表現には次の『白氏文集』の投影が濃厚である。

2624　和劉朗中望終南山秋雪(劉朗中が終南山の秋雪を望むに和す)

遍覧古今集　遍く古今の集を覧るに
都無秋雪詩　都て秋雪の詩無し
陽春先唱後　陽春先づ唱へて後
陰嶺未消時　陰嶺未だ消えざる時
草訝霜凝重　草には霜の凝って重きかと訝り、
松疑鶴散遅　松には鶴の散ずること遅きかと疑ふ
清光莫獨占　清光獨り占むる莫く
亦對白雲司　亦對す　白雲の司

（『續國訳漢文大成・白楽天詩集三』（傍線筆者）

又、小島憲之氏は著『古今集以前』の中の「比喩的表現」の頁でこの道真の句をひかれ次のように論じられている。

（傍線、筆者）

○雪を白雲に見たてたもの。

島田忠臣の「人間去却りて踏む白雲の天」（巻上、観禁中雪）もその一例。また菅原道真の「雲は独り磵に宿るかと誤つ」（『後集』東山小雪）も、雪を谷間に沈む白雪になぞらえる。この比喩は漢詩の手法に基づき、平安詩人や歌人たちが採用した、いわゆる「外」からの比喩である。もとは日本的なものではない。

○鶴を愛した白居易には

「松には疑ふ鶴の散ずること遅きかと」(『後集』巻九、和劉朗中望終南甫山秋雪)

「翅を曝せば常に疑ふ白雪の消たらむかと」(同、池鶴二首)の如く、雪と白鶴とをそれぞれ比喩として捕える。友人、元稹の詩にも

「孤飛して空鶴唳き、裴回して霜雪耀く」(巻三、松鶴)

とみえる。

やがて鶴と雪との比喩は、平安人の詩にも及ぶ。

道真の、「鶴は未だ田に帰らざるかと疑ふ」(『後集』東山小雪)にもみえ、白詩に学んで雪を白鶴になぞらえる。

忠臣の「叙雪、五十韻」(巻上)にみえる「松に栖む鶴自らに馴る」も、その表現に雪が背景となる。

このような詩の比喩は次第に歌の常識的なそれにも及ぶ。

紀貫之の

「千世までの雪かとみれば松風にたぐひて鶴の声ぞ聞ゆる」(『貫之集』巻一)

「松が枝に鶴かと見ゆる白雪は積れる年のしるしなりけり」(同　巻三)

などもその例である。漢詩に基づく比喩は、常識的・規約的な比喩として平安人の詩はもちろん、歌の世界にも流行する。

(『古今集以前』二五八～二六四頁)

更に、小島憲之氏は「誤…疑〜」の表現について次のように論じられている。

「誤」の用法は、詩でいえば、盛唐ごろから例が多くなる。「誤つ」ことは直線的にいえば「似ること」(「如し」に同じ)にもなるが、屈折していえば「…ではないかと疑う、思う」ことでもある。道真の詩には、「誤」と「疑」との対比の詩句が数例もみえる。

たとえば、

「晴れては誤つ雲を穿ちて星の乍に見ゆるかと、秋には疑ふ雨を冒して菊の新に開くかと」　(巻五、「賦雨夜紗燈、応製」)

「雪の別鶴驚くかと誤ち、野の幽蘭を払ふかと疑ふ」　(同、「風中琴」)

は、その一例。

(『古今集以前』二六五〜二六六頁)

◆『菅家後集』所載「雪夜思家竹」作品考

「490 雪夜思家竹」

本文	平仄
・自我忽遷去	●●●○●
・此君遠離別	●○●●⊙
・西府與東籬	○●●○○
・關山消息絶	○○○●⊙
・非唯地乖限	○○●○●
・遭逢天慘烈	○○○●⊙
・憫黙不能眠	●●●○○
・紛々專夜雪	○○○●⊙
・近看白屋埋	●○●●○
・遙知碧鮮折	○○●○⊙
・家僕早逃散	○●●○●

・凌寒誰掃撤　○○○○⊙
・抱直自低迷　●●●○○
・含貞空破裂　○○○●⊙
・長者好漁竿　○●●○○
・悔不早裁截　●●●○⊙
・短者宜書簡　●●○○●
・妬不先編列　●●○○⊙
・提簡且垂竿　○●●○○
・吾生堪以悦　○○○●⊙
・千万言無效　○●○○●
・漣洏亦嗚咽　○○●○⊙
・縱不得扶持　●●●○○
・其奈後凋節　○●●○⊙

五言古詩

脚韻は入声の屑韻である。韻字は「別」「絶」「烈」「雪」「折」「撤」「裂」「截」「列」「悦」「咽」「節」である。

訓読

・我忽ち　遷去せしより
・此の君に遠く離別す
・西府と東籬と
・關山　消息絶ゆ
・唯、地の乖限せらるるのみに非ず
・天の慘烈なるに遭ひ逢ふ
・憫黙して眠ること能はず
・紛紛たり　専夜の雪
・近く　白屋の埋もるるを看る
・遙かに　碧鮮の折らるるを知る
・家僕は早く逃散す
・寒さを凌ぎて誰か掃撤せん
・直を抱きて自ら低迷す
・貞を含みて空しく破裂す
・長き者は漁竿に好かりしに
・悔ゆらくは早く裁ち截らざりしことを
・短き者は書簡に宜かりしに

・妬まらくは先づ編列せざりしことを
・簡を提げ、且つ竿を垂るれば
・吾が生、以て悦しむるに堪へん
・千万言ふとも　效なからん
・漣洏としてまた嗚咽す
・縱ひ　扶持することを得ずとも
・其れ、凋むに後るる節を奈せん

通釈

・私が晴天の霹靂のように左遷の命を受けてから
・(宣風坊の家の庭に植えてあった)竹とも遠く離れてしまった。
・鎮西のこの左遷された土地と我が京都の家の東籬とは
・(はるかに幾重の関所、山々に隔てられて)家からの消息も絶えてしまった。
・ただ単に地理的・物理的に隔絶させられているだけでなく、
・(精神的にも)天候の酷烈な寒気に遭遇し、
・憂えもだえる日々が続き、夜は少しも心して休むことが出来ない。
・しんしんと、夜の間中、雪が降り積もり、
・(朝になり)近くの家々が雪で白くうずまっているのを目にすると

・はるか彼方の京都の我が家の竹もこの雪の重みで折れていることだろうと心配になってくる。
・(主人もいなくなって、家を守ってくれるはずの)家僕も、とっくに逃げ散っているに違いない。(竹の管理なども誰もかえりみるものはいないであろう。)
・いったい、この寒い中をおして誰が竹に降り積もった雪を掃き捨ててくれているだろうか。
・竹は、まっすぐに伸びる真直な心を抱きつつも自ら(雪の重みで)低く地に倒れ伏している。
・竹はひたぶるな貞節な心を抱きつつ、(雪の重みで)二つに割れてしまっている。
・竹の長いものは、漁竿にしておけば良かったものを
・早くこうなる前に裁断しておかなかったことが悔やまれる。
・竹の短いものは、書簡にしておけば良かったものを
・こうなる前に早く切って編みつらねなかったことが惜しまれる。
・屋内では竹筒を提げ、屋外では釣竿を垂れることの出来る日々が送られれば、
・私の生涯は、この上なく幸せであったはずなのに
・こんな繰り言を何千何万回と口にしようと、今となっては何の効き目もない。
・ただ涙がとめどなく流れて来て、一人寂しくむせび泣くのみである。
・たとえ、私という主人がなく、だれもあの雪に折れた竹を支えてやることは出来なくても
・松柏とともに凋み後(おく)れる竹であるお前の貞節な心は(囲りがどうであろうと、主人がいようがいまいが)どう出来よう。(きっと)いつまでも不変であり続けるはずである。

考察①

○二句目「此君遠離別」の「此君」について

晉の王徽之が竹を指して「何ぞ一日も此君無かるべけん」といった故事とは次の一文を指す。

〔『晉書』王徽之傳〕

嘗二寄居空宅中一、便令レ種レ竹、或問二其故一、但嘯咏指レ竹曰、何可三一日無二此之君一

▼『枕草子』「五月ばかり、月もなう、いと暗きに」（第百三十段）にこの故事を踏まえた次の一文を見出すことが出来る。

五月ばかり、月もなう、いと暗きに、「女房やさぶらひたまふ」と声々していへば、「出でて見よ。例ならずいふは、誰ぞとよ」と仰せらるれば、「こは誰ぞ。いとおどろおどろしう、きはやかなるは」といふ。ものはいはで、御簾をもたげて、そよろとさし入るる、呉竹なりけり。「おい。此の君にこそ」といひたるをききて「いざいざ、これまづ、殿上にいきて語らむ」とて式部卿の宮の源中将・六位どもなど、ありけるは去ぬ。頭弁は、とまりたまへり。

（新潮古典集成『枕草子上』萩谷朴校注）（傍線筆者）

▼『本朝文粋』巻第十一に「321 冬夜守二庚申、同賦二修竹冬青一 応レ数藤篤茂」に「晋騎兵参軍王子猷、種而称二此君一、唐太子賓客白樂天、愛而為我友」の句が見える。この句は次の『和漢朗詠集』にも載せる。

▼『和漢朗詠集』巻下「竹」

晋の騎兵参軍王子猷　栽るて此の君と称す
唐の太子賓客白楽天　愛して吾が友と為す

晋騎兵参軍王子猷　栽称此君
唐太子賓客白楽天　愛為吾友

篤茂（とくぼ）

（日本古典文学全集『和漢朗詠集』菅野禮行校注・訳）

考察②

○三句目「西府與東籬」の「東籬」について

この語は、典拠とする作品を以下に引く。

「飲酒-五」　陶　潛

結廬在人境　而無車馬喧　　廬を結んで人境に在り、而も車馬の喧しき無し
問君何能爾　心遠地自偏　　君に問ふ何ぞ能く爾るやと、心遠ければ地自ら偏なり
采菊東籬下　悠然月南山　　菊を東籬の下に采り　悠然として南山を見る
山氣日夕佳　飛鳥相與還　　山氣日夕に佳く　飛鳥相與に還る
此中有眞味　欲辨已忘言　　此の中に眞味有り　辨ぜんと欲すれば已に言を忘る

（『漢詩大系5　古詩源下』星川清孝著）（傍線筆者）

○十五・十七句目「長者好漁竿」「短者宜書簡」の表現について

『白氏文集』「3521 洗竹」の十三・十四句目に次のような句がある。

小者截魚竿　小なる者は魚竿に截り
大者編茅屋　大なる者は茅屋に編め

（傍線筆者）

この字句は白居易が、太子少傅分司時代（六十七歳）（八三八年）洛陽の自宅の竹が、密生しているのを見兼ねて疎にしたことを叙した作品である。ここでは作品全般からの投影は見られず、道真はこの作品の二句を抄句としてここでは使っているものと考えられる。

考察③

○「雪夜思家竹」の詩全般について

この詩は、太宰府謫居時代の道真の詩風の変遷をみる上で重要な位置を占める作品だと考える。筆者は別稿(注二)で太宰府時代の作品を詩風の変遷という視点から三期に分けてみた。その中でこの詩は「太宰府謫居二期」の作品群の特質の一つとして取り挙げた次の点の好例として取り挙げることが出来る。

「太宰府謫居一期」時に詠まれている作品群に比して道真自身が精神的に或る種の安定が見られるようになったことが大きいと思われるが「自然の事物」を「事物」として見つめることが出来るようになり、その「事物」に「自己の感情移入」をはかる作品が目立つようになる点

この「490 雪夜思家竹」では、謫居での雪を目のあたりにし、京の自宅の竹の様を想い起こし、十三・十四句で「抱直自低迷／含貞空破裂」と詠み二十三・二十四句で「縦不得扶持／其奈後凋節」と詠む詩句には道真自身の姿が重ねられているのは自明である。こうした指摘は、既に川口久雄氏の「悲運におしひしがれて、なおかつ忠節を貫こうとしている道真の心を竹に感情移入している。」〔川口久雄校注　日本古典文学大系『菅家文草・菅家後集』四九〇補注(八)七三六頁〕があるが、筆者には、とりわけ道真の「詠竹詩」について詳細な分析と考察をなされている後藤昭雄氏の学恩に拠る所が大きい。この「490 雪夜思家竹」を取り挙げられ考察されている一文を引用が長くなるが以下に紹介する。

竹を「此君」「碧鮮」の語でいうこと、その属性を「直」「貞」「後凋節」などの語でいうこと、あるいは切って釣竿にしようという発想、それらはこれまでに指摘してきたように拠る所がある。そうした措辞はもとより用いるが、雪が埋もれて「碧鮮折る」また竹が「低れ迷う」「空しく破れ裂く」というイメージは、従来の詠竹詩にはたえて見いだしえなかったものである。（中略）霜雪に逢っても、衆草に異なり、ひとり竹のみは亭々として立つとするのが伝統的な発想である。この道真の詩はそうした旧来の発想の外に立つものである。

それは次のことと深く相関わる。（中略）「直を抱きて自ら低れ迷う」「貞を含みて空しく破れ裂く」のは竹であるとともに道真自身なのである。「扶持すること得ず」とは雪折れの竹を支えるものがないということと、これに重ねて孤立無援の現在の自己の境遇をいうものでもある。「後凋の節」も常緑の竹の性質をいいつつ、逆境に置かれた中での自らの堅固な貞節をいい、何ものもこれを動かすことはできないというのである。すなわち、この詩は単なる詠物詩ではなく、詠竹に託して詩人の内面が詠出された述懐詩となっている。翻って考えるに、このような述懐詩であることが発想の常套を打ち破ったのである。

このような旧套を脱した述懐詩の詠出は、やはり太宰府謫居という、このとき詩人が置かれていた境遇の中で初めて達成されたものと見るべきであろう。

（後藤昭雄「菅原道真の詠竹詩について」『平安朝　文人志』一三〇～一三二頁）

（注二）拙稿『菅家後集』編纂事情の一考察～巻尾の詩「謫居春雪」の解釈を通して～

（和漢比較文学会編『菅原道真論集』勉誠出版　二〇〇三年二月）

◆『菅家後集』所載「梅花」作品考

「495　梅花」

本文　　平仄

宣風坊北新栽處　○○○●○○●
仁壽殿西内宴時　○●●○●●◎
人是同人梅異樹　○●○○○●●
知花獨笑我多悲　○○●●●○◎

脚韻は上平声支韻、韻字は「時」「悲」である。

訓読

・宣風坊の北　新に栽(う)える處(とき)
・仁壽殿の西　内宴の時
・人は是れ同人　梅は異なる樹
・知りぬ　花のみ獨り笑みて、我は悲しみ多きを

通釈

・(私は以前)自宅のある京都の宣風坊の北の地に、新たに一株の梅を植えそれを愛でていた(のが、この時期だったし)

・仁寿殿の西側に植えてあった紅海を賞翫する内宴に参列した(のもこの今の時期であった)

・その梅の花を見る者は同じなのに、この太宰府で見る梅の花と以前見てきた梅の花とは同一ではない。

・梅の花だけは昔と変わらずひとり咲き新春を満喫しているが、私にとってはこの期を迎えるのは一層、悲しみを増長させるだけの事である。

考察①

○一句目「宣風坊北新栽處」について

道真の『書斎記』の中に次のような一文がある。

東京宣風坊有一家。《中略》戸前近側、有一株梅。東去数歩、有数竿竹。毎至花時、毎当風便、可以優暢情性、可以長養精神。(東京の宣風坊に一家有り。《中略》戸前の近き側に、一株の梅有り。東に去ること数歩、数竿の竹有り。花時に至る毎に、風の便に当る毎に、以て情性を優暢すべし、以て精神を長養すべし) (傍線筆者)

考察②

○四句目「知花獨笑我多悲」の表現について

『凌雲集』にこの道真の作品への投影を指摘できる次のような詩が見える。

19 和進士貞主初春過菅祭酒舊宅悵然傷懐簡布巨・藤三秀才作一絶

(進士貞主(さだぬし)が「初春菅祭酒が旧宅に過(よぎ)りて悵然(ちょうぜん)に傷懐し・布瑠(ふる)・巨勢(こせ)・藤原の三秀才に簡するのに和す、一絶)

書閣閉來冬變春　書閣閉ぢてより冬の春に変り
梅花獨笑向啼人　梅花独り笑みて啼人に向かふ
雖知世上必然理　世上必然の理を知ると雖も
猶恨門前斷舊賓　猶し恨めし門前に旧賓の断ゆるといふことは

(小島憲之著『國風暗黒時代の文學中(中)』P1467～P1469)(傍線筆者)

以下、小島憲之氏の詳細な考察の一文を引用しながら道真の「495梅花」との比較を試みたい。

まずこの『凌雲集』の作品は、小島憲之氏の考察によると「文章生滋野貞主の〈初春一月、大学頭菅原清公の旧宅に立ち寄ったところ(その荒廃した有様をみて)心にいたみ悲しみ、布瑠・巨勢志貴人・藤原の三秀才にその悲しみの心を書いて贈った詩〉に唱和した御製(嵯峨天皇御作・筆者注)」とある。句意は、小島憲之氏の一文を引くと、

「(菅原家の)書殿が閉鎖されて以来、冬も過ぎて春になった(その庭の)梅の花だけが咲いて、(ここに立ち寄って旧時を思ひつつ)嘆く人に相対する(相対してほころぶ)。」昔を偲んで泣く作者に向かって、梅の花だけひとり淋しく咲きかかるわびしい風景。

「(移り変りの行なはれると云ふ)世間の必然の道理をよく承知してゐるとは云ふものの、やはり(盛時とは違って)門の前にふるなじみの賓客が絶えたのは恨めしいことだ。」

筆者はこの詩の二句目「梅花獨笑向啼人」の表現に殊更、注目してみたいと思う。小島憲之氏はこの二句目についても以下のような傾聴すべき注釈を公にされている。

「笑」は綻び咲くこと。唐太宗の「笑」樹花分」色、啼」枝鳥合」声」(月海)はその一例。「啼人」は泣く人、用例未だ検出し得ない。「啼」は一般に鳥類の鳴く場合のほかに、人の泣く場合にも用ゐることば。(中略)「笑む」即ち「笑く」の花に対して、昔を偲んで「啼く」(泣く)人を同じ句の中にもたらした趣向。なほこの第二句は「梅

花啼人に向かひて独り笑む(笑く)」の意。盛唐劉長卿の「江花独向二北人一愁」(初聞二貶謫一読喜量移登二于越亭一贈二校書一)の類句がある。

(小島憲之著『國風暗黒時代の文學中(中)』一四六九・一四七〇頁)

この『凌雲集』の作品は前述の小島憲之氏の論述にあるように、道真の祖父にあたる菅原清公の書閣の荒廃をいたむ滋野貞主の詩に唱和した嵯峨天皇の御製である。この詩の表現、とりわけ二句目のそれを道真が諳んじていて自作に投影させたことは想像に難くない。

とすれば、道真の四句目「知花獨笑我多悲」の表現を『凌雲集』のそれと並べてみると、「花獨笑」と「我多悲」が対をなしている表現であることがはっきりする。異本で「花獨笑」が「花獨咲」とあるのは、意味上では同様のものだが、この『凌雲集』からの投影関係の視点で考えると「我多悲」の対であるならば「笑」でなければならないことがわかる

第一部　［作品論］

「3．太宰府謫居三期　延喜二年（九〇二）春～延喜二年（九〇二）冬」

「官舎幽趣」

「偶作」

この期の作品としては「奉哭吏部王」から「偶作」を想定している。この期の作品群の特質として次の二点を指摘したい。

その一つは、「仏教への傾倒」である。死期の近い事を悟りつつある道真にとって死後の世界に心の安泰を求めようと、仏教に心の支えを得んとする姿勢がより鮮明になり、仏教用語が詩語として多用されているのがこの期の作品の特徴とうつる。

そして二点目は一点目と深く関わるが、死期の近い事を自覚しつつ、我が日々の謫居生活に何の好転も見出せないことから来る諦念、もしくは意識的にそうしようとする「則天去私」とも言うべき心情に裏打ちされた詠作姿勢が見られる点である。大曽根章介氏の言われる「現世の苦悩を払拭し超俗悟脱の境地に近づこうと真摯な努力をしながらも、遂に果すことの出来ぬ弱い人間の姿が現れている。」や「心情を率直にしかも平明流麗な語句で表現した晩年の詩篇は、至純最高の詩境に到達したものといえよう」と指摘されている事が主にこの期の作品を指しているものと思われる。

ここでは「官舎幽趣」「偶作」を取り上げ作品論を展開する。

◆菅原道真研究『菅家後集』「504官舎幽趣六韻」の詩情一考察

――五句目「此時傲吏思荘叟」十二句目「優於誼舎在長沙」の出典をめぐって――

序

筆者は『菅家後集』の作品の注釈に取り組んでいる者の一人だが、とりわけ今回対象とする「504官舎幽趣六韻」は、この詩に秘められた菅原道真、作者自身の真意がどのようなものであるのか、又何を詠じようとしたのか、その点一つに限っても深く考えさせられる作品のように思える。

この詩に触れている先人の考察の例を二、三紹介すると次のようなものがある。

㈠川口久雄氏（岩波古典文学大系『菅家文草・菅家後集』「504官舎幽趣」補注七　七三八頁）

ここで自分の方がましだというのは賈誼のところへ凶鳥といわれる鵩がとびこんできた。そして長寿を得ないことを予見して「鵩鳥賦」を作ったのであるが、道真の太宰府では、そういうこともなく幽閑をたのしむこと

ができることを思ってましだといったのであろうか。（しかし実は賈誼よりも道真の方が悲惨だったようである。）

㈡清藤鶴美氏（『菅家の文華』「68官舎幽趣」三一五頁）

謫居二年目ごろからの道真の詩には、以前の激越な口調、呪うがごとき口吻は影をひそめる。この詩のごときもそうで、淡々とした調子の中に感懐を吐露し、自然の興趣にひたり、わが身の現状に感謝している。毎日の礼仏のせいであろうか。老荘の影響であろうか。この心境は、一直線に深まらず、この後も時として激し、恨むが、それは罪名の忌わしさだけからでも当然であろう。一進一退ではあるが、漸次に、そして確実に鎮静に向いつつある。（下略）

㈢小島憲之・山本登朗氏（日本漢詩人選集Ⅰ『菅原道真』「51官舎幽趣」一六五頁及び「45不出門」一四四頁）

この一首、謫居であるみすぼらしい官舎での苦しい生活を幽閑な隠士の暮らしに見立て、その境遇に満足しようとする作者の心を述べる。その境地は「45不出門」等にも近い。

〜〈45「不出門」の注釈の箇所では以下のような一文が載る〉【筆者注】〜

（太宰府の謫居での苦しい暮らしの中で、ある月の十五夜に、道真はこのような、ある種の静かな心境に至り、それを「白詩」の「不出門」という詩題やその詩の姿勢を借りて表現しようとしたものと考えられる。この詩にただ道真の怒りや怨恨だけを読み取ろうとするのは、後世の道真怨霊伝説などによる誤読であろう。配所の道真にも、苦悩の中に、時として平穏な自足の時間があった。道真は自分を白居易になぞらえ、白居易に倣うことによって謫居の苦しみに耐えようと試みていたように思われる。）

○筆者は、この詩の詩情をよみ解く鍵が、とりわけ五句目の「此時傲吏思荘叟」十二句目の「優於誼舎在長沙」の解釈にあると考える。

○以下、その考察の前に、前回[1]に引き続いて本稿ではこの「504官舎幽趣」の注釈を試みたい。注釈を進める上での凡例は前稿[2]のそれに倣う。

(一)

本文	平仄
・504官舎幽趣　竇*	
・墉*中不得避諠譁*	●○●●●○◎
・遇境幽閑*自足誇	●●○○●◎
・秋雨濕庭潮*落地	○●●○○●●
・暮煙縈屋澗*深家	●○○●●○◎
・此時傲*吏思荘*叟	●○●●○○●
・隨處空王事尺*迦	○●○○●◎
・依病扶*持藜舊杖*	○●○○○●●
・忘愁*吟詠菊殘花	○○○●●○◎

・食支月俸恩無極　●○●●○○●
・衣苦風寒分有涯　○●○○●●○
・忘却是身偏用意　○●●○○●●
・優於誼舎在長沙　○○●●●○◎

※脚韻は、下平声麻韻。韻字は「譁・誇・家・迦・花・沙」第十句末の「涯」は、上平声佳韻で、韻を踏んでいない。押韻上の例外の句。

校異

○題注「六韻」下…「七言」（内一）（大島）（松平）（尊四）刊本　全本
▼頭注「無七言二字」（大島）
○墺（○）…「郭」（●）（内一）（大島）（加越能）（松平）（彰考）（尊一）（尊三）（尊四）（太一）（太二）
刊本　全本
○誼（○）…喧（○）（加越能）（彰考）（太一）刊本　全本
▼頭注「喧作誼」（加越能）
○閑（○）…間（○）（大島）（太一）（太二）刊本　全本
▼頭注「間作閑」（大島）
○潮（○）…湖（○）（静嘉）

▼頭注「潮作湖」（大島）

○潤（●）下注…「鎌倉本潤作溺」（●）（大島）（太一）（太二）刊本　全本

▼頭注「潤類従本同」（大島）

○傲（●）…徼（●）（大島）（太一）（太二）刊本　全本

▼頭注「徼作傲」（大島）

○莊（○）…右傍注「庄ィ」（尊一）

○尺（●）…釋（●）（内一）（大島）（松平）（尊二）（尊四）（太一）（太二）刊本　全本

○扶（○）…「扶」ミセケチ「扶」（大島）

○杖（●）…「枝」ミセケチ「杖」（内一）（大島）

○忘愁（○○）…且啼（○○）（内一）（大島）（松平）（尊四）刊本　全本

▼「且」下注「鎌倉本啼作愁」（大島）

▼「且」下注「鎌倉本且啼作忘愁」（太一）（太二）刊本　全本

▼頭注「忘愁類従本同」（大島）

訓読

・墺中　諠譁（けんくわ）を避くること得ず

・境に遇ひて幽閑自ら誇るに足る

・秋雨　庭を湿す　潮落つる地
・暮煙　屋を縈る　澗深き家
・此の時　傲吏　荘叟を思ふ
・處に隨がひて　空王　尺迦に事ふ
・病に依り扶持す　藜の舊き杖
・愁を忘れて吟持す　菊の殘れる花
・食は月俸に支へられ　恩は極り無し
・衣は風の寒さに苦しめど分は涯り有り
・是の身を忘却して偏に意を用ふれば
・誼が舍の長沙に在りしより優れたり

通釈

・町なかでざわめきを避けることは（本来）無理なことである（はずなのに）
・（ところが）私の住むこの地は静かで奥ゆかしく自慢するに足る場所と言える。
・秋の雨が庭を濡らすと、まるで潮のひいた潟のような風情をかもし出し
・夕もやが私の住み家を包み込む時は、まるで隠士の暮らす谷あいの家のような風情である。
・（このような住み家にいて）今の私は楚の威王から宰相の招きにも応じず漆園の役人にとどまったあの荘子の生き

方に思いを馳せ、

・（一方）どこにいてもこの世のすべては空であると説いた釈迦の教えに身を置こうと誓う。

・病気の我が身は、あかぎの木で作った古い杖に身をゆだね、

・愁いを忘れて私は、霜にそこなわれて咲き残った菊の花を詠じている。

・私の食べ物は、官吏としての俸給で支えられ、その恩は、はかりしれない。

・わたしの衣服は寒風が吹くと身にこたえる粗末なものだけれど、今の私の身では致しかたのないものである。

（人にはそれぞれの分際があるもので衣服が与えられているだけでも有難い）

・自分のつらい身の上をしばし忘れて、ひたすらにこのように気持ちを切り替えると

・私のこの住まいは、長沙に流されていた時の賈誼（かぎ）の家より優（まさ）っているように思える。

語釈

この稿においては、紙頁が限られている為、調査語句の意は、簡潔な説明にとどめ、その語の出典の考察、類似の表現の見える文献等の引用は最小限に絞って頁を進める。

○官舎…官で建てて官吏に与える住宅。『漢語大詞典』では「官吏的住宅」と説明する。ここは太宰府右郭十一条一条坊あたりの今の榎寺の地にあったと思われる道真の居所。「南館」とも。（『太宰府市史』「建築・美術工芸資料編」参照）

○幽趣…奥ゆかしいおもむき。『漢語大詞典』には「幽雅的趣味」と説明する。

○墉中…＝郭中。城郭のなか。中国の城市やとりでを守る外囲い、外城の中。ここでは『太宰府市史』に言う、「古代都市・太宰府に藤原京や平城京のような条坊制が敷かれていたことは『観世音寺文書』『宇佐大鏡』に見える土地相論を巡る史料に、左郭と右郭、条と坊を用いて太宰府郭内の地点を示した例のあることから知られる。（中略）これらの史料から判明するのは、郭地を管轄する左郭司と右郭司が置かれ、南北に二十二条、東へ十二坊、西へ八坊までの条坊呼称が存在した」（「第二節、太宰府の条坊　一、左右の郭と条坊」九十二頁）ことを指す、

○諠譁（けんか）…かまびすしい。又やかましく言いたてる。讙譁。喧譁。喧嗷。『漢語大詞典』には「声大而嘈雑」と説明する。『菅家後集』「499二月十九日」に「墉西路北賈人聲（墉の西、路の北、賈人の聲）」とより具体的な表現が見える。

○遇境…境遇。『漢語大詞典』には「境況（＝状況）和遭遇」の説明がある。『菅家後集』「487東山小雪」に「客魂易消滅、遇境獨依然（客魂消滅（き）之易し、境に遇ひて獨り依然たり）」の類似表現が見える。

○幽閑…＝幽間。静かで奥ゆかしい。

○秋雨…秋の雨

○潮落…しおの引くこと。引き潮。潮退。干潮。ここでは官舎の庭に降った雨で湿った、水はけの悪い土地を海辺の風雅な光景に見立てている表現。

○暮煙…暮れ方に立つ煙。夕の煙。暮烟。『漢語大詞典』には「亦作“暮烟”。傍晩的烟靄」と説明する。

○澗…山あいの流水。たに。ここは「山あいの」の意。「澗戸」（＝山あいの家）の例。底本では「潤」に作るが、ここでは採らない。後の「二章」で詳述する。

○傲吏…おごっている役人。『漢語大詞典』には「不為礼法所屈的官吏」と説明する。『文選』郭璞の「遊仙」詩「漆園有二傲吏一、萊氏有二逸妻一」の句を踏まえる『荘子』に纏わる語。後の「二章」で詳述する。

○隨所…どこでも。到る處。ここかしこ。『漢語大詞典』には「不拘何地・到処」と説明する。

○空王…仏の尊称。仏が世界を一切皆空なりと説いたからいう。『漢語大詞典』には「佛教語。佛的尊称。佛説世界一切皆空。故称“空王”」と説明する。

○藜杖…あかざの木で作った杖。『漢語大詞典』には「用藜的老茎做的手杖。質軽而堅実」と説明する。

○忘愁…うれいを忘れる。刊本を始めとする他本では「且啼」とする。この二語だと、「且」を動作の同時進行を示す意の「…しながら…する」とみて〈泣きながら私は霜にそこなわれて咲き残った菊の花を詠じている〉との解釈も成り立つが、この道真の詩情を鑑みれば鎌倉本にある「忘愁」を採る方が妥当と思われる。

○菊殘花…「殘菊」のこと。冬まで咲き残った菊。霜にそこなわれた菊。色香の失せた菊花。『菅家後集』の「505 秋晩題白菊」及び「512九月盡」の詩中にも見える。いずれも拙稿で既に語の考察を試みている。(3)

○月俸…月々受ける手あて。毎月支払われる給料。年俸などに対していう。月奉。月給

○無極…限りがない。はてがない。無限。

○有涯…限りがある。はてがある。「無極」の対語。

○忘却…わすれてしまう。忘れる。忘失。

○用意…心をつかう。心を用いる

○誼舎…漢の賈誼が、文帝の時、左遷させられて長沙王の太傅となった時の宿舎の故事を指す。『史記』『文選』に見える語。「二章」で詳述する。

○長沙…右に同じ故事を踏まえる語。『漢語大詞典』には「見“長沙傅”。指西漢賈誼、文帝時賈誼被謫為長沙王太傅、故称」の説明を載せる。『菅家後集』「484敍意一百韻」中にも「長沙卑濕、湘水水瀰瀰」の句が見える。

(二)

筆者は先に「序」でこの詩を読み解く鍵が第五句目の「此時傲吏思莊叟」と第十二句目の「優於誼舎在長沙」にあるのではないかと述べた。ここで各々の句の出典の考察を通して見えてくるものを以下に論じてみる。

●第五句目「此時傲吏思莊叟」について

この句中の「傲吏思莊叟」には川口久雄氏を始めとして既に先学にも指摘があるように『史記』「老子・韓非列傳第三」中の次のような一文を踏まえる。

莊子者、蒙人也。名周。周嘗爲蒙漆園吏。(中略)楚威王聞莊周賢、使使厚幣迎之、許以為相。莊周笑謂楚使者曰。千金重利、卿相、尊位也。子獨不見郊祭之犧牛乎。養食之數歲、衣以文繡、以入大廟。當是之時雖欲爲孤豚、豈可得乎。子亟去。無汚我。我寧游戲汚瀆之中、自快、無爲有國者所羈、終身不仕快吾志焉。

莊子というのは、蒙の人である。名は周。かつて蒙で漆園(うるしばたけ)管理の役人であった。梁の恵王や斉の宣王と同じころである。(中略)楚の威王は莊周を賢者だと聞き、使者をたて手厚い贈り物を与えて迎え、宰相にすると約束した。莊周は楚の使者に向かい、笑いながら言った。「千金の利益は重く、卿(けい)・相(しょう)は尊い位だが、おぬ

しは郊の祭に生贄にされる牛を見たことはないか。何年も飼育して、繡の着物をきせて、大廟へ引きこむ。その時になって小さな豚になりたいと思っても、それができようか。おぬしはすみやかに去れ。わしをけがしてくれるな。わしはきたない溝の中でゆるゆると泳ぎまわるのが愉快なのだ。国をもつ者にしばられることなく、一生仕えず、わしの心のままにしているまでだ。」（原文は『史記會注考證』本に拠り、解釈は、岩波文庫本に拠った。）（傍線筆者）

この「官舎幽趣」の出典を考察するにあたり、とりわけ留意したいのは中国古典籍からの「重層的」な投影が窺える点である。この句の場合も、道真がこの荘子の話を踏まえた出典として想定すべきものは、前述の『史記』ではなく、別の古典籍『文選』に載る郭景純の「遊仙詩七首―一」の次の作品だと考える。

○遊仙詩七首―（一）　郭景純

・京華遊俠窟　　みやこは遊俠の士の多くあつまる所であり
・山林隠遯棲　　山林は隠遁者の棲むところである。
・朱門何足榮　　みやこで富貴の朱門のうちに住むことは何とて栄とするに足ろうぞ
・未若託蓬萊　　それは草深い山林に身を寄せるのには及ばない。
・臨源挹清波　　（その山林では）川の源にのぞみ清らかな水を酌んで飲み、
・陵岡掇丹荑　　岡にのぼって丹芝の若芽を取って食べる。
・靈谿可潛盤　　その谷川のほとりは人知れず遊びまわるのに、ふさわしいから
・安事登雲梯　　はしごで高くに登るごとき朱門の栄達を求めることなど何とて願おうぞ。

・漆園有二傲吏一　昔、河南の漆園には傲慢不遜な荘周がおり（宰相になることを断った）
・萊氏有二逸妻一　また老萊の家には逸（すぐ）れた妻がおり（夫の仕官を止めた）
・進則保二龍見一　元来進み仕えて良き地位を得て身を保ち全うすることも出来ようが、
・退爲二觸レ藩羝一　斥（しりぞ）けられてやめた時、藩（まがき）に角（つの）がぶつかって引っかかりどうしようもない羊のごとくになって困るものだ。
・高二蹈風塵外一　（そのような）俗世をいさぎよく去るべく（仙を求めて山林に入るべく）
・長揖謝二夷齊一　うやうやしく会釈していとまごいし、伯夷、叔斉のごとき小節を去る、

（「本文」・「通釈」ともに新釈漢文大系『文選（詩篇）上』に拠る。一四五～一四七頁）（傍線　筆者）

つまり、道真の「官舎幽趣」の根底に流れる詩情は、まさしくこの「遊仙詩七首」のそれと置き換えられるのではないかと思う。とりわけ先に傍線を付した句を道真のそれと並べるとその観を一層強くする

道真の詩「官舎幽趣」		郭景純の詩「遊仙詩七首」―（一）
・塰中不得避誼譁（一句目）	↕	・京華遊俠窟（一句目） ・朱門何足榮（三句目）
・遇境幽閑自足誇（二句目）	↕	・山林隱遯棲（二句目） ・未若託蓬萊（四句目）
・此時傲吏思莊叟（五句目）	↕	・漆園有傲吏（九句目）

自分の意志とは全く異なる地の、太宰府に左遷された道真にとって、この地を「幽閑の地」と看做し、自らを慰めようとするその真意が、正にこの「遊仙詩」の言わんとする後半の十一句～十四句の句意「順風の時は地位も権

力も備わり身を全うすることも容易だが、一旦、斥けられ権力の座から失墜するとみじめなものである。だからそのような俗世を潔く捨てるに限る」に秘められていると言えるのではないか。この流れで見ると、四句目の「暮煙縈屋澗深家」は、仙人の棲む山林の景に模しているはずで、五字目の「澗」は「潤」ではなく鎌倉本に言うように「澗」でなければ意味をなさない。「山あい深い家」と詠んで五句目の「此時傲吏思莊叟」につながるのではないか。

●第十二句目「優於誼舎在長沙」について

この句の「誼舎在長沙」は川口久雄氏を始めとして先学より指摘があるように、『史記』「屈原賈生列傳第二十四」及び『文選』「鵩鳥賦一首幷序」の「序文」の次の一文を踏まえた表現である。

○賈生爲長沙王太傅三年、有鴞飛入賈生舍、止干坐隅。楚人命鴞曰服。賈生既以適居長沙。長沙卑溼、自以爲壽不得、傷悼之。乃爲賦以自廣。（『史記會注考證卷八十四』「屈原賈生列傳第二十四」）

○誼爲長沙王傅。三年有鵩鳥、飛入誼舎、止於坐隅。鵩似鴞不祥鳥也。誼既謫居長沙。長沙卑濕。誼自傷悼、以爲壽不得長、迺爲賦以自廣。（賈誼が長沙王の守り役になって三年経ったある日、鵩鳥が家の中に飛んで来て、誼のそばに止まった。鵩は梟（ふくろう）に似た不吉な鳥である。時に誼は流され者として長沙に住んでいた。長沙は低くじめじめした所であった。誼は我が身の上を悲しんで、寿命は長くあるまいと思い、賦を作って気持ちを晴らした。）

（傍線筆者）

（本文・訳ともに全釈漢文大系27『文選（文章編）二』一八八頁より引用）

筆者は道真がこの十二句「誼舎在長沙」の表現をするにあたり、先の引用文に傍線を付した箇所の、賈誼が左遷された土地「長沙」が「低地で湿気が多く、自分の身の上を案じて命の長くないことを悲観していた」そうした状況に比して、この道真の住む太宰の地は、まだましではないかと自らを慰めていると言った解釈は表層的なものをなぞっている次元に止まっているように思える。この賈誼の故事に込められているものを、更に慎重に読みとく必要性を感じる。

そこで、「賈誼」が唐代の詩人、とりわけ投影関係が指摘されて久しい白詩を例にどのように認識されていたのかを考察してみたい。「長沙」を検索語として見出し得るもののなかで、「賈誼」を「屈原」との対比の中で引いている次の二首に注目してみた。

〔1〕0095 讀史五首—（一）

・楚懐放靈均　　楚懐靈均を放ち
・國政亦荒淫　　國政　亦　荒淫
・彷徨未忍決　　彷徨して未だ決するに忍びず
・繞澤行悲吟　　澤を繞って行く悲吟す
・漢文疑賈生　　漢文賈生を疑ひ
・謫置湘之陰　　謫して湘の陰に置く
・是時刑方措　　是時刑方に措けり
・此去難爲心　　此に去って心を為し難し
・士生一代間　　士一代の間に生まれ

・誰不有浮沈　誰か浮沈有らざらん
・良時真可惜　良時真に惜しむべし
・亂世何足欽　亂世何ぞ欽むに足らん
・乃知泪羅恨　乃ち知る泪羅の恨
・未抵長沙深　未だ長沙の深きに抵らざるを（傍線筆者）

〔2〕0091偶然二首―（一）

・楚懐邪亂靈均直　楚懐は邪亂にして靈均は直なり
・放棄合宜何惻惻　放棄せらるるは合に宜なるべく何ぞ惻惻せん
・漢文明聖賈生賢　漢文は明聖にして賈生は賢なり
・謫向長沙堪歎息　謫せられて長沙に向ふは歎息するに堪へたり
・人事多端何足怪　人事多端何ぞ怪しむに足らん
・天分至信猶差忒　天分至信にして猶は差忒す。
・月離干畢合霧霈　月畢に離れば合に霧霈たるべきも
・有時不雨誰能測　時有りて雨ふらず誰か能く測らん

（本文・訓読ともに新釈漢文大系『白氏文集（三）』四三八～四三九頁より引用する）（傍線筆者）

この二首より見えてくることは、「賈誼」の方が「屈原」より悩みが深かったと詠んでいる点である。それは、

「屈原」「賈誼」の仕えた君主の相違から来るものと根拠を示す。

それは屈原が「楚の懐王」という人徳のない君主に仕えていた故、『史記』に「屈原があれほどの資質をもち、ほかの諸侯のところへ行っていたら、どこの国でも容れられたであろうに（屈原以彼其材、游諸侯、何國不容）〈「屈原賈誼生列傳第二十四」〉」との言があると思われるのに対し、賈誼は、人徳があり聡明な「漢の文帝」に仕えながらも、その文帝が取巻きの言に惑わされ、賈誼を長沙に左遷してしまった、その犠牲者である賈誼の苦悩は、いかほどであったか、それがとりわけ、文帝への信頼感が強かっただけに、彼の、その失意の念は屈原の比ではないと言うのである。

そして更にもう一つこの道真の「官舎幽趣」の十二句目の句内容に深い投影を窺わせる白詩が存在する。

〔3〕0931 憶微之、傷仲遠　李三仲遠去年春喪

- 幽獨辭羣久
- 漂流去國賒
- 只將琴作伴
- 唯以酒爲家
- 感逝因看水
- 傷離爲見花
- 李三埋地底
- 元九謫天涯

幽獨して羣を辭すること久しく
漂流して國を去ること賒かなり
只だ琴を將て伴と作し
唯だ酒を以て家と為す
逝に感じて困って水を看
離を傷んで為に花を見る
李三は地底に埋まり
元九は天涯に謫せらる

・舉眼青雲遠　眼を舉ぐれば青雲遠く
・回頭白日斜　頭を回せば白日斜めなり
・可能勝賈誼　可に能く賈誼に勝らんや
・猶自滯長沙　猶ほ自ら長沙に滯れり

（本文・訓読ともに新釈漢文大系『白氏文集（三）』三七四～三七五頁より引用する）（傍線筆者）

この白詩の十一・十二句「可能勝賈誼／猶自滯長沙」の表現には賈誼の別の故事が踏まえられている。それは先に挙げた『史記』「屈原賈生列傳第二十四」の次の一文である。

後歲餘、賈生微見。孝文帝方受釐。坐宣室。上因感鬼神事、而問鬼神之本。賈生因具道所以然之狀。至夜半、文帝前席。既罷。曰吾久不見賈生。自以為過之。今不及也。居頃之、拜賈生為梁懷王太傅。

そののち一年余で、賈生は都へよばれた。文帝はちょうど祭りの釐をうけて、宮中の宣室にすわっていた。帝は鬼神につき感じたことがあったため、鬼神の本質を質問した。賈生はそのおり鬼神がなぜそのようであるかのありさまをくわしく述べて、夜半に達し、文帝は膝を乗り出して傾聴した。話がおわると帝は「わしは久しく賈生にあわずにいて、自分ではあれよりも〔知識が〕上だと思うていた。今やはり及ばぬとわかった」と言い、ほどなく、賈生を梁の懐王の太傅に親任した。

（本文は『史記會注考證』本に拠り、解釈は、岩波文庫『史記列伝二』に拠った）（傍線筆者）

とあるように、賈誼が自らの不遇を「鵩鳥賦一首幷序」に託した作品を詠んでから一年余で文帝により召し還さ

れているのである。白居易はこの故事を踏まえて「自分は賈誼と違って長安に戻れず、まだ江州に居続けなければならない」と詠う。

ここで道真の十二句目「優於誼舎在長沙」に目を移すとどうなるか。

白居易が「はたして今の自分が、あの賈誼より優っていると言えようか。（いや言えるはずがないではないか）」と「可能優」（「可」は「豈」の俗語）という表現で直截に反問するのに対して道真は「賈誼の長沙の時の住まいよりも自分の今の太宰の官舎の方が優っている」と詠う裏には、賈誼と自分の今の状況を比して白居易のように詠えない現状を敢えて「優」という一語で断言することで自分を慰めていると解釈すべき所ではないかと考える。

つまり、『菅家後集』の詩作品の配列から考えて、この詩は左遷後二年目の秋、帰還の望みも絶たれ、（翌年二月には命を落としている。）筆者が既に論じてきたように[4]「諦念」と仏に我が身を託すことで、あの世（現世の苦悩を超越した所）に心の安寧を得ようとする状況下で詠作されたはずである。

だからこそ、賈誼のように召し還される状況は自分にはないと思う念が屈折した形で「優」の一字に込められているのではないだろうか。それは前述の『史記』「屈原・賈生列傳第二十四」の最後の一文にある

讀服鳥賦、同死生、輕去就。又喪然自失矣。（賈誼の「服鳥の賦」を読むと、かれは死と生を同じく達観し、いずれに就くかを気にとめなかったのに、と思うと、こんどは何だか自分を見失しなった気がするのである。〈注〉（「賈誼の本心を誤解していたのかとも思う」と解してもよい）

（本文は『史記會注考證』に拠り、解釈、〈注〉は岩波文庫『史記列伝二』に拠る）

司馬遷の賈誼に対する心情、それは、長沙に流されていた時、自己を慰めるために詠作した「鵩鳥賦一首」の中で

賈誼が鵬鳥の口を通して世俗を超越して生きることの重要さを語らせた。その心情と、その詠作から間もなく文帝より召し還されることに応じたその賈誼の心情に不可解さを呈する所感とも換言できようが、その心情に道真のそれと重なるもの、共鳴するものがあったのではないかと思う。

そして一方で、賈誼を長沙に左遷した「文帝」のことから、道真は「宇多上皇」や「醍醐天皇」の事に思いを馳せていたのではないか。その一方で、賈誼と異なって道真自身は「醍醐天皇」に召し還される夢も叶わぬ絶望的な状況を押し込めて、そうした事態を超越すること、諦念すること、正しくそれが十一句目の「忘却是身偏用意」の表現に凝縮されており、それを受けて初めて第十二句目「優於誼舎在長沙」の意味するものが明らかになってくる句作りではなかったのかと考えた。

(三)

以上、五句目「此時傲吏思荘叟」十二句目「優於誼舎在長沙」の出典の考察を通して見えてくるものを論じて来た。

繰り返しとなるが、筆者はこの「官舎幽趣」が、郭景純の「遊仙詩七首―(一)」を詩全体の根底に流れる詩情として生かしながら、その一方で、それに「荘子」や「賈誼」の故事を響かせて、今の自分の置かれている絶望的な状況を、「意識の変革」「自己忘却の念」によって乗り越えようとする心情を、重層的に、中国古典籍の故事や詩句より引用し、それを、巧みに折り込む構造を持った作品ではなかったのかと分析してみた。

注(1) 拙稿「菅原道真研究―『菅家後集』全注釈(十三)」「有明工業高等専門学校紀要」第四十二号

（2）拙稿「菅原道真研究―『菅家後集』全注釈（一）」「国語国文学研究」第三十八号　熊本大学文学部国語国文学会

（3）▼拙稿「菅原道真研究―『菅家後集』全注釈（四）」　有明工業高等専門学校紀要第三十八号　補説「◎二句目「殘菊白花雪不如」の「殘菊」について」の一文参照。（三～五頁）

▼拙稿「菅原道真研究―『菅家後集』全注釈（十）」　有明工業高等専門学校紀要第四十一号　語釈「殘花」の項参照（六～七頁）

（4）拙稿「『菅家後集』編纂事情の一考察―巻尾の詩「謫居春雪」の解釈を通して―」（『菅原道真論集』和漢比較文学会編）四三六頁において「3・太宰府謫居三期（延喜二年〈九〇二〉春～延喜二年〈九〇二〉冬」と分類した期に属する作品。

◆『菅家後集』所載「偶作」作品考

「513 偶作」

本文　平仄

・病追衰老到　●○○●●
・愁趁謫居來　○●●○◎
・此賊逃無處　●●○○●
・観音年一廻　●○●●◎

脚韻は上平声　灰韻。韻字は「來・廻」

訓読

・病は衰老を追ひて到る
・愁は謫居に趁(したが)ひて來る
・此の賊　逃るるに處なし
・観音　念ずること一廻

通訳

・人間が生きて行く上で逃れられないものの一つに「老い」がある。若き日の活力は老いと共に削り取られ、これに追いうちをかけるように「病」が私に襲って来た。

・又、身体の衰えのみならず、精神もこの太宰府の謫居生活とともに衰耗し、愁いが深まるばかりである。

・そして今、私に迫っているものは「死」の賊である。この賊は先の「老」「病」とともに絶対に逃れることは出来ない。

・今は、専ら観音菩薩にすがって、浄土往来の一道に向かうことを念ずるのみである。

考察①

○「513 偶作」に投影の指摘できる『白氏文集』の一考察

『白氏文集』の中に「487 送春」という作品が存する。既にこの詩からの投影の指摘が金子彦二郎氏よりなされている。(注一)以下全文を挙げてみる。

487 送春

三月三十日。春歸日復暮。三月三十日。春歸り日復た暮る。
惆悵問春風。明朝應不住。惆悵して春風に問ふ。明朝應に住まらざるべしと。
送春曲江上　眷眷東西顧　春を送る曲江の上。眷眷として東西に顧る。
但見撲水花　紛紛不知數　但だ見る水を撲つ花。紛紛として數を知らず。
人生似行客　兩足無停歩　人生は行客に似たり。兩足停歩無し。
日日進前程　前程幾多路　日日前程を進む。前程幾多の路ぞ。
兵刀與水火　盡可違之法　兵刀と水火と。盡く之を違けて去るべし。
唯有老到來　人間無避處　唯だ老の到來する有り。人間避くる處無し。
感時良爲已　獨倚池南樹　時に感じて良に已めりとなし、獨り池南の樹に倚る。
今日送春心　心如別親故　今日春を送る心　心は親故に別るるがごとし。

（本文は『白居易集箋校』朱金城著に拠る。）
（訓読みは『續国譚漢文大成『白楽天詩集』に拠る。）（傍線筆者）

白居易が元和十年（八一五）四十四歳、太子左贊善太夫の時、長安、曲江のほとりで三月末日に過ぎ行く春を惜しむ心情をうたった作品である。春風に「明日はもうこの地にとどまっていないだろうな」と問い掛け、花がはらはらと散る様を踏まえて、「人生は旅人（行人）と同じ、少しも停まることをしない」と、月日の流れの無情さを嘆

く十三・四句と「兵戦や水火の難を避ける方法もないことはないが」と次の十五・六句でこの十三・四句と対比させて人間の老いの避けようのなきを際立たせる。「ただ老いの到来は人間にはどうしても避けることが出来ないのである」と表現する。だから今の私に迫る「老」はいかんともし難く一人池南の樹に倚って、今年の春との別れを親故のそれにするような心情で惜しんでいるのだと詠む。

このような白詩と道真の詩との内容まで踏み込んだ詩情の比較となると、両者には大きな隔りがあることが自明になる。確かに「老い」というものが、人間には避けようのないものという表現には、白詩の表現の投影を指摘することも可能だが、道真の詩と白詩との間には、その「老い」を実感する切実感・切迫感が全く異なる。換言するならば、道真の詩には「死」を目前とした「老い」の緊迫感が詩情より明らかに読み取ることが出来る。白詩にはそれを嘆きつゝも「春を送る」心情に道真の詩には見られないある種の余裕が窺える。ここでは、白詩からの詩語の措辞という観点よりもっと深い、仏教思想に裏付けられた用字であろうと考えるのがより自然のように思える。

考察②

○「513 偶作」の根底に流れる詩情の、背景にあるもの

この作品は、絶筆といわれる「514 謫居春雪」の直前に置かれている。筆者の調査した写本・刊本の中で、「金沢市玉川図書館大島文庫本」・「太宰府天満宮所蔵本」、調査刊本十九冊全てに、題字下傍注として次の一文があることに注目したい。

▼「延喜三年癸亥二月二十五薨　五十九歳」

この一文は、本来ならば、前述した『菅家後集』巻尾の作品「514 謫居春雪」の題字の注として付されるべきものだと考える。それが直前の作品「513 偶作」に付されているのは何を意味しているのか、以下私見を述べてみる。

川口久雄氏は次のような所感を述べておられる。

道真の死を前にしての、切迫した心境がうたわれている。この詩は延喜二年十二月ころに作られたものであろう。後世の伝説によればそのころ都では、池の水が尽く紅水となり、氷は連日にわたって解け、潜んでいた何万という魚が泡をふいて死んで浮かびあがり、神泉苑の水の色が、紫の袍の色になったと伝えられる。こういう伝説をよびおこす契機の一つは、この後集の抒情詩の切迫したいぶきの訴える力によるところがあるであろう。

（七三九頁）

更に、川口久雄氏は同書の補注として三句目の「此の賊　逃るる處なし」の箇所の説明で

『天台止観一』に「四山合来、無二逃避処一」とあるに拠る。四山とは老病死衰の四相を山にたとえ、のがれるところがないという説」　（岩波古典文学大系『菅家文草・菅家後集』補注　七三九頁）

と、注目すべき指摘をなされている。

ここで、「四山」について『佛教大辞彙』(龍谷大学編纂)より以下に説明文を引用してみる。

【四山】常に生・老・病・死の四苦に迫られ人身の無情なる相を四大山の下にありて逃るゝことなきに喩へたるもの。北本涅槃經(ねはんきょう)巻二十九【同南本巻二十七】には波斯匿王に対する説法を述べ「大王、親信の人あり、四方より来りて各々是言をなさん。大王、四大山あり、四方より来りて人民を害せんとすと、王若し聞かば何の計をか設くべき、王言く、世尊設し此れ来らば逃避する處なからんと(中略)我説く、四山とは即ち是れ衆生の生・老・病・死常に来りて人に切(せま)るなり」と云へり・摩訶止觀(曾本)巻一ノ四にはこの涅槃經の説に依りて「三界は無常なり。一篋偏に苦しむ。四山合し来らば逃避する所なし」とし、輔行に之を釋して山来ると言ふは非喩を以て喩となす。四山は四大なり。四方は生・老・病・死なり」とせり。(中略)増一阿含經巻十八には同じく波斯匿王に對する説法として四大恐怖襲ひ来りて此身を害せんとするに当り之を避くる由なきことを明せり。即ち一に老壊、少壮を敗して顔色なからしめ、二に病盡、無病を壊敗し、三に死盡、命根を壊敗し、四に有常のものは無情に帰す。此四方は何物も能く障護すべからず、力の能く伏する所に非ず、猶ほ四方に四大山あり四方より来りて衆生を壓するに力の能く却くる所に非ざるが如しとせり。

(『佛教大辞彙』第三巻　二一二〇～二一二一頁)(傍線　筆者)

この説明によれば、人として避けることの出来ないものが「生・老・病・死」の四苦である。これを「513偶作」の詩句に充ててみると、一句目の「病は衰老を追いて到る」の句意が、四苦の「老・病」を踏まえていると考えられる。とすれば、三句目の「此の賊　逃るる處なし」の句意には四苦の「死」が踏まえられていることが判明する。つまり、この詩の背景には、先の仏教の思想が色濃く反映されていることが明らかになる。

このことを念頭に置き、「513偶作」を再吟味してみると、筆者が前稿(注二)で論じた以下のような推測が可能になるように思う。

三句目で「此の賊　逃るる處なし」と自分の死期の迫ったことを悟っている道真には、四句目で「観音念ずること一廻」と浄土往来をひたすら、庶幾う自分を描き筆を置く。そこには仏の道でしか生かされない、救済の道が残されていない今日の自分の姿に対する諦念が色濃く反映されている。「1．太宰府謫居一期」「2．太宰府謫居二期」に見られる作品群とは全く異質の詩風の作品となっている。ここにはこの期の作品の特質を見事に凝縮したものを見る思いがする。筆者は、この作品こそが、残されている『菅家後集』の全作品を吟味した中で、辞世の作ではないかと推測している。

(注一)『平安時代文学と白氏文集―道真の文学研究篇二冊―』　金子彦二郎著　(四〇〇頁)

(注二)拙稿「『菅家後集』編纂事情の一考察―巻尾の詩「謫居春雪」の解釈を通して―」

(『菅原道真論集』和漢比較文学会　勉誠出版)

第二部　［編纂事情考］

菅原道真の太宰府謫居時代に詠作された作品は巻頭の「自詠」から巻尾の「謫居春雪」まで三十九首残されている。それらの作品は今までほぼ制作時順に配列されていると考えられて来た。

今回取り上げて考察を試みた作品以外を含む全作品の注釈をし終えて見えて来たのは、概ね、制作時順に配列の方針を取りつつも、そこに菅原道真の後世に自己の生き様を託そうとする意図の基にこの『菅家後集』が編纂されているのではないかという事である。とりわけ巻尾の「謫居春雪」にそれが顕著であるように思う。この詩を辞世の句だというとらえ方が定説のようになっている。

ところが、太宰府謫居中に詠まれた作品の注釈を施す作業を続けるなかで、この巻尾に置かれている「謫居春雪」は本当は辞世の詩ではないのではないかという疑問が生じて来た。本稿でその疑問に対する筆者の見解を提起し、更には太宰府の地より、盟友紀長谷雄に託した『菅家後集』の編纂事情の一端を考察した。

『菅家後集』編纂事情の一考察

――巻尾の詩「謫居春雪」の解釈を通して――

一

菅原道真の太宰府謫居時代に詠作された作品は巻頭の「476自詠」[1]から巻尾の「514謫居春雪」まで三十九首残されている。今回取り挙げてみたいのは巻尾の「514謫居春雪」である。この作品については、岩波古典文学大系『菅家文草　菅家後集』の頭注で川口久雄氏は「これが道真の絶筆の詩である。延喜三年二月二十五日、彼は太宰府の配所で死んだ」[2]と説明を加えられているのを筆頭にこの詩を辞世の句だというとらえ方が先学よりなされて来たように思う。筆者も久しくこの作品の詠作事情については、この先学の指摘のごとく考えてきた。

ところが、太宰府謫居中に詠まれた作品を逐一注釈を施す作業を続けるなかで、この巻尾に置かれている「514謫居春雪」は本当は辞世の詩ではないのではないかという疑問が生じて来た。本稿はその疑問に対する筆者の一つの問題提起となることを、更には太宰府の地より、朋友紀長谷雄に託した『菅家後集』の編纂事情の一端を垣間見ることを意図している。

二

それではまず「514謫居春雪」を取り挙げる。詳細な注釈は別に稿を改め考察をしてみたいと思う。ここでは作品の内容の考察を主眼として頁を進める。

514　謫居春雪

盈城溢郭幾梅花　城に盈ち　郭に溢る　幾ばくの梅花ぞ

猶是風光早歳華　猶是れ　風光　早歳の華

雁足黏将疑繫帛　雁足　黏将して　帛を繫るかと疑ふ

烏頭点著思帰家　烏頭　点著きては　家に帰らんことを思ふ

※本文は、尊経閣所蔵本『菅家後集』に拠る。訓は筆者試読。以下同じ。

（通釈）

・雪は太宰府の町中にいっぱい降り積もり、いったいどれくらいの白梅が咲いたように思えるだろうか。

・この春雪の降り積もった景色はやはり、新春一番に咲く梅花そのものである。

・この雪が雁の足に粘りついていたとしたら（匈奴で捕虜となっていた蘇武が雁の足に帛で書いた手紙をくくりつけ、生きていることを知らせて故国に戻ることが出来たように）私に幸をもたらしてくれる京からの手紙と思うに違いない。

・またこの雪が烏の頭に点々とついていたとすると烏の頭が白くなったと思って（秦の人質となっていた太子丹が、烏の頭が白くなったことで都に戻ることを許されたように）この私も都に戻れるようになったと信じるに違いない。

川口久雄氏は「この詩は延喜三年（九〇三）正月、死の一カ月前ころの作品か、澄んだ自然観照。」[3]と説明されている。この作品の内容を吟味すると、一、二句で「春雪」を「梅花」に喩える比喩表現が使われている。こうした見立ての技法は中国の詩でも多用されている。（詳細は後論に譲る）そして三句目では、次の匈奴の捕虜となっていた蘇武の故事が「雁足」に込められている。

昭帝即レ位数年匈奴与レ漢和親。漢求二武等一。匈奴詭言武死。後漢使復至二匈奴一常恵請二其守者一与俱得三夜見二漢使一。具自陳道、教三使者謂二単于一言、天子射二上林中一得レ鴈。足有レ係二帛書一言武等在二其沢中一。使者大喜如二恵語一以譲二単于一単于左右而驚謝二漢使一曰、武等実在二於是一。（『漢書』蘇武伝）

この話の大意は、「漢と匈奴が和睦し、漢は蘇武一行の帰還を求めたが、匈奴は蘇武は死んだと偽って応じなかった。のち漢の使者が匈奴を訪れた時、蘇武の部下であった常恵（じょうけい）がひそかに使者と会い、匈奴の王単于（ぜんう）に次のように言うようにしむけた。「漢の帝（＝昭帝）が上林苑で雁を射落としたところ、足に帛（きぬ）に書いた手紙が縛りつけてあり『蘇武たちはある沼沢の中にいる』と書いてあった。」と。使者はそのとおりに単于に告げたものだからさすがの匈奴も隠すことが出来ず、蘇武が生きている事を認め、（蘇武を帰還させることを承諾した。）」と

なる。これは、『芸文類聚』巻五十六「雑文部・書」の「雁書」の項に、[4]又、第九十一「鳥部・雁」の項にも同様の話を載せる。[5]

一方四句目では「烏頭」の語に、燕の太子丹が、烏の頭が白くなったので帰国を許された次の故事が込められている。

正義　燕丹子云、太子丹質二於秦一、秦王遇レ之無レ礼、不レ得レ意、欲レ帰、秦王不レ聴、謬言曰、令二烏頭白、馬生レ角、乃可、丹仰レ天歎焉、即為レ之烏頭白、馬生レ角、王不レ得レ已遣レ之、為機発レ橋欲レ陥、丹過レ之、為不レ発、風俗通云、燕太子丹天為二雨粟一、烏頭白、馬生レ角也。

（『史記』刺客列伝巻二十六　注）

この話は、「秦の人質となっていた燕の太子丹は、秦の王の扱いが非礼なことに不満を抱き、帰国を願ったが許されず、『烏の頭を白くし、馬に角をはやしたら帰国を許そう』と秦王から難題をふきかけられた。丹が天を仰いで訴えると、不思議にも烏は頭が白くなり、馬は角をはやした。秦王はやむなく丹を出立させたが、途中にからくりじかけの橋をこしらえ、丹を落とそうとした。が、丹が橋を渡ったとき、なぜかからくりは動かなかった。」[6]といった内容である。この話は『芸文類聚』巻九十二「鳥部・烏」の項にも同様のものを載せる。[7]

この三・四句の二つの故事は、題目の「春雪」の「白」から想起されたものであると同時に、「雪」という「自然」の風物を媒介に、この故事に込められている、蘇武・太子丹いずれもが帰還を許されたことを踏まえて、道真自身の望京の念の表出にもなっている作品となっている。

三

一方、この『菅家後集』の作品群が制作年時順に配列されているであろうことは個々の作品を読み解く中でも明らかにすることが出来る。ここで、巻尾の「514謫居春雪」の位置付けを改めて考察するために謫居時代の作品の流れを道真の詩風・心境の変遷を主眼に概観してみる。

前述したように太宰府謫居時代の作品は「476自詠」から始まる。この詩は昌泰四年（九〇一）道真五十七歳の時、一句目に「離家三四月（京都の家を離れてもう三、四箇月が経つ）」とあることから、四月か五月頃の作品だと思われる。個々の作品については機を改めて注釈を施したものを公にしたい。本稿では『菅家後集』の作品群の配列の考察と詩風の変遷を知る上で注目すべき作品に絞って以下その流れを三部に分けて概観してみたい。

「1. 太宰府謫居一期（昌泰四年〈九〇一〉春～延喜元年〈九〇一〉秋）」

この昌泰四年は七月十五日に「昌泰」が「延喜」に改元されている。（『日本紀略』醍醐天皇・昌泰四年七月十五日の条に、「改二昌泰四年一爲二延喜元年一」とある。）この年には「484叙意一百韻」を始めとする「477詠二樂天北窓三友詩一」「486哭二奥州藤使君一」等二十韻以上の長編の大作が矢継早に詠作されている。いずれも秋までに詠まれたものだと考えられる。右大臣の地位から突如として職を解かれ、太宰府に左遷させられたその現実を直視できるだけの精神的余裕を持ち得ず、それをどう受け入れれば良いのかを苦悩する、その痛々しいほどの心の葛藤が作品の根底に流れているものが、この期のものと考えられる。「叙意一百韻」等の大作は別に稿を改め考察を

してみたいと思う。ここでは、それら以外のこの時期の作品として注目したいのが、次の「485秋夜　九月十五日」である。

485　秋夜　九月十五日

黄萎顔色白霜頭　黄萎の顔色　白霜の頭
況復千余里外投　況んや　復た　千余里の外に投するをや
昔被栄花簪組縛　昔は栄花　簪組に縛せられ
今為貶謫草萃囚　今は貶謫　草萃の囚と為る
月光似鏡無明罪　月光は　鏡に似て罪を明らかにすること無し
風気如刀不破愁　風気は　刀のごとくにして愁を破らず
随見随聞皆惨慄　見るに随ひ、聞くに随ひて皆　惨慄
此秋独作我身秋　此の秋　独り　我が身の秋と作る

（通釈）

・黄色にやみつかれ萎えしわんだ血色のない顔、霜をかぶっているかのような白髪頭（これも老いたる身の必然）

・ましてや京より千五百里も離れた西のはてに追いやられた私の容姿がどうなっているか言うまでもなかろう。

・今思えば、昔、京に居て得意の時代、私はかんざしや組ひもをして正装で宮中に伺候していたものである。

・ところが今は貶謫の身、任官する束縛から解放されたものの、日々の生活は生い茂る雑草の中の田舎暮らし。

・月光のさやけさは鏡面そのもののようだ。（本当の鏡なら人に罪がなければ明らかに顔面を写し、罪科があれば鏡面は曇るというのに）こんなにも明らかに照り輝いているのに、私の無実を何一つ証してはくれない。

・秋風のつきさすような冷気はまるで刀のそれのようなのに、我が肌身にはつきさせても、私のこの深くこもった愁いは破っては（消しては）くれない。

・そんな月光を見るにつけ、秋風の音を聞くにつけても私には身震いがおきるほどすさまじく感じられる。

・（一般に秋は人々にとり悲しい季節であるけれども）とりわけ今年の秋の愁えは、わが身の上に集まり、私にだけ悲しみが限りなく深いように思えてならないことよ。

「2．太宰府謫居二期（延喜元年〈九〇一〉初冬～延喜二年〈九〇二〉早春）」

この期の作品としては「487東山小雪」から「495梅花」あたりのものを想定している。この時期、延喜元年の冬を迎える頃から道真の詩風に変化の兆しが見えて来るように思う。具体的なこの期の道真の詩の傾向として次の二点を指摘することが出来る。「1．太宰府謫居一期」時に詠まれている作品群に比して道真自身が精神的に或る種の安定が見られるようになったことが大きいと思われるが、「自然の事物」を「事物」として見つめることが出来るようになり、その「事物」に「自己の感情移入」をはかる作品が目立つようになる点が、まず一点目である。そしてその「自己の感情」とは、主に「望京の念」と換言してもよい。そして二点目は、道真の得意とす

る「見立て」の技法を駆使する作品が目立つ点である。ここにも道真の「詩人」としての自負、執念なるものが或る種の精神の安定期を迎え、表出した事象と言い換えられるかもしれない。

前者の「事物」に「自己の感情移入」をはかる作品の具体例として、既に後藤昭雄氏が詳細に考察されている事例[8]だが、「490雪夜思家竹」で謫居での雪を目のあたりにし、京の自宅の竹の様を思い起こし、十三・十四句で「抱直自低迷／含貞空破裂（竹はまっすぐに伸びる真直ぐな心を抱きつつも自ら〈雪の重みで〉低く地に倒れ伏している／竹はひたぶるな貞節〈秋冬にも色を変えない。心変わりをしない〉な心を抱きつつ〈雪の重みで〉二つに割れてしまっている）」と詠み、二十三・二十四句で「縦不得扶持／其奈後凋節（たとえ私という主人がなく、誰もあの雪に折れた竹を支えてやることは出来なくても／松柏とともに凋みに後れる竹であるお前の貞節な心は〈囲りがどうであろうと、主人がいようがいまいが〉いつまでも不変でいてくれるはずである）」と詠む詩句には道真自身の姿が重ねられているのは自明である。「495梅花」では転句で「人是同人梅異樹（その梅の花を見る者は同じなのに、この太宰府で見る梅の花と以前見てきた梅の花とは同一ではない）」と謫居で見る梅花と京で見てきた梅花を想起し、結句で「知花独笑我多悲（梅の花だけは昔にかわらず一人咲き新春を満喫しているが、私にとってはこの期を迎えるのは一層悲しみを増長させるだけの事である）」と梅花に感情移入をはかっている。そうしてこうした作品は死期の迫った延喜二年（九〇二）の秋に詠まれたと思われる「510問二秋月一」「511代レ月答」にも指摘することが出来る。この詩の場合、諦念から来る心情の安定が根底にある所から生まれた作品だと考えられる。

一方、後者の「見立て」の技法については藤原克己氏による言及[9]がある。藤原氏はこれを道真の特質の一つとして「見立ての表現にあくまでも執することによって独自の比興的比喩表現を切り開いてきた[10]」ことを挙げ

ておられる。そうした傾向を持つ作品群がこの期に目立つ。「487東山小雪」では三・四句で「誤雲独宿磵／疑鶴未帰田（谷間に白い雲がたちこめているのかと思うと、それは白雪が降ったのを見誤ったのだった。／白鶴が田に帰らないで山にいるのかと思うと、それは山に降った白雪だったのである）」と、「雪」を「磵に宿る雲」に「田に帰らざる鶴」に見立てた表現をしているし、「489白微霰」では三・四句で「麞牙米簸声々脆／龍頷珠投顆々寒（くじかの牙のような霰は、精米した米粒を箕であおるような、ぱらぱらという軽やかな音をさせて降ってくる／また竜のあごの下にある千金の珠を危険を冒して取ってきて投げつけた時のような、ぞっとする響きだ）」[11]と、霰の降る音を「精米した米粒を箕であおるような」とか「龍頷の千金の珠を投げつけるような」音と見立てる表現をしている。同詩五・六句で「念仏山僧驚舎利／名医道士怪鉛丸（一向専念に念仏している山寺の僧は、仏舎利がころげてきたかと驚く。／神仙の術を心得た名医の誉れ高い道士仙人は、霰が転がってくるのをみて、煉って丹に作るための鉛丸かとあやしむ。）」[12]と「霰」が「山僧」には「仏舎利」に、又「道士」には仙薬を作る材料の「鉛丸」に見えるという見立て表現となっている。

「3．　太宰府謫居三期　（延喜二年〈九〇二〉春～延喜二年〈九〇二〉冬）」

この期の作品としては「496奉レ哭二吏部王一」から「513偶作」を想定している。この期の作品群の特質として次の二点を指摘したい。その一つは、「仏教への傾倒」である。死期の近い事を悟りつつある道真にとって死後の世界に心の安泰を求めようと仏教に心の支えを得んとする姿勢がより鮮明になり、仏教用語が詩語として多用されているのがこの期の作品の特徴とうつる。そして二点目は一点目と深く関わるが、死期の近い事を自覚しつつ、我が日々の謫居生活に何の好転も見出せないことから来る諦念、もしくは意識的にそうしようとする「則天去私」

とも言うべき心情に裏打ちされた詠作姿勢が見られる点である。大曽根章介氏の言われる「現世の苦悩を払拭し超俗悟脱の境地に近づこうと真摯な努力をしながらも、遂に果すことの出来ぬ弱い人間の姿が現れている。」[13]や「心情を率直にしかも平明流麗な語句で表現した晩年の詩篇は、至純最高の詩境に到達したものといえよう。」[14]と指摘されている事は、主にこの期の作品を指しているものと思われる。

この期の作品として特に注目したいのは、二章で取り挙げた「514謫居春雪」の直前に置かれている「513偶作」である。

513　偶作

病追衰老到　病は衰老を追ひて到る
愁趁謫居來　愁は謫居に趁(したが)ひて來る
此賊逃無処　此の賊　逃るるに処なし
観音念一廻　観音　念ずること一廻

（通釈）

・人間が生きて行く上で逃れられないものの一つに「老い」がある。若き日の活力は老いとともに削り取られ、これに追いうちをかけるように「病」が私に襲ってきた。

・又、身体の衰えのみならず、精神もこの太宰府の謫居生活とともに衰耗し、愁いが深まるばかりである。

・そして今、私に迫っているものは「死」の賊である。この賊は先の「老」「衰」とともに絶対に逃れることの出来ぬものである。

・今は、専ら観音菩薩にすがって、浄土往来の一道に向かえることを念ずるのみである。

この詩内容の詳細については後論に譲ることにするが三句目「此賊逃無処」の典拠について以下に若干触れておく。

『仏教大辞彙』（龍谷大学編纂）の「四山」の項に索くものを引用してみると、『北本涅槃經』巻二十九に波斯匿王に対する説法を述べ「四山とは卽ち是れ衆生の生・老・病・死なり、生・老・病・死常に來りて人に切（せま）るなり」とある。『摩訶止観』巻一ノ四には、この涅槃經の説に依って「三界は無常なり。一箋偏に苦しむ、四山合し來らば逃避する所なし」とする。

三句目で「此の賊逃るるに処なし」と自分の死期の迫ったことを悟っている道真には、四句目で「観音念ずること一廻」と浄土往来をひたすら、庶幾う自分を描き筆を置く。そこには仏の道でしか生かされない、救済の道が残されていない今の自分の姿に対する諦念が色濃く反映している。「1．太宰府謫居一期」「2．太宰府謫居二期」に見られる作品群とは全く異質の詩風の作品となっている。ここに、この期の作品の特質を見事に凝縮したものを見る思いがする。筆者はこの作品こそが、残されている『菅家後集』の全作品を吟味した中で、辞世の作ではないかと推測している。と同時に、「514謫居春雪」は既に二章で論じた所だが、詩風からすれば筆者の分類した「2．太宰府謫居二期」の作品群の中に置かれるべきものと考える。その大きな根拠は、この期の作品群の特質の一つに詠題の事物に対する「感情移入」が見られる点、そしてそれが「望京の念」であること。この作品においては「春雪」に託して、三・四句目で中国の古典籍の故事を下敷きに、その感情を込めている事は既に述

べた所である。一方、二点目で指摘した「見立て」の技法が、この作品にも見られる事、つまり「雪」の白さを一・二句で「白梅」に、三・四句で「雁につけた帛」、「頭の白くなった烏」に喩えている点である。

とすれば、なぜ「514謫居春雪」を巻尾に置くという編纂を道真がしたのかという点が重要になってくる。この点の解明の過程の中で既に二章で取り挙げた「514謫居春雪」の作品の本来の意図するものが見えてくるものと考える。

四

ここで想起されるのが次の『江談抄』の一文である。

離レ家三四月　落レ涙百千行
万事皆如レ夢　時々仰二彼蒼一
雁足粘将疑レ繫レ帛
烏頭点著憶レ帰レ家

此句謫居春雪絶句也。而天暦之時　於二比良宮一御託宣有レ之、志二於我一之者可レ詠二此等句一云々

（『江談抄』第四）[15]

道真が神となり近江国比良宮において御託宣があり、その内容が「自分に思いを寄せるものがいればこれらの

詩句を詠じるがよい」というのであったとの話である。このことに注目されたものに菅野禮行氏の論述がある。[16]

この『江談抄』中の詩句が道真の『菅家後集』の巻頭の作品「476自詠」と巻尾の作品「514謫居春雪」の第三・四句を指すことを踏まえて、菅野禮行氏は「託宣の真偽のほどはともかくとして『江談抄』成立時に、早くもこのような話が存在していたのは事実である。それは「476自詠」の詩や、絶筆となった作品の最後の詩句に、道真の深い心を読みとるべきだと感じていた人々が、当時すでにいたことを物語るものであろう」[17]と述べておられる。

菅野氏の学恩に拠りつつ、『菅家後集』の太宰府謫居時代の作品中、巻頭に置かれている「476五言　自詠」を改めて以下に取り上げてみる。

476　五言　自詠

離家三四月　家を離れて三四月
落涙百千行　落つる涙は百千行
万事皆如夢　万事皆夢のごとし
時々仰彼蒼　時々彼蒼を仰ぐ

（通釈）

・京都の家を離れてもう三・四箇月が経つ。
・涙がこぼれて百すじ千すじ頬をつたって流れくだる。
・（人生の転変の激しさにあきれはてて）世の中の全てのことは夢と思うほかはない。
・かの青い天を振り仰いでは我が身の不運を訴える。

この作品については筆者は既に注釈を試みたものを公にした。[18] その考察の中で本論と関わりのある一文を以下に再度引用してみる。

現時点では推測の域を出ないのだが、『菅家後集』の作品の配列には、道真自身の深い配慮と意図が込められていると考えている。単なる制作順の配列ではなく、『菅家後集』を編集するにあたり、表に出ていない多くの作品の取捨選択を施した後、とりわけ巻頭の詩「476自詠」と巻末の「514謫居春雪」の配列には道真の万感の念を込めた意図的なそれがなされており、「476自詠」と「514謫居春雪」の詩情が見事に呼応するように熟慮された上での漢詩集になっていることを、これから『菅家後集』の全作品の注釈を通して実証してみたいと考えている。[19]

と述べた。そして菅野氏の「476自詠」の詩の考察をなされた論文[20]の中で、次のような一文の引用をした。

「道真の感傷は単なる個人的悲哀にとどまるものではなかったのである。それは、個人や私を超えて、より広く社会や国家の現状と将来がこれでよいのかという憤激を、底にたたえていたものではなかったろうか。」

「道真は、配所での悲哀、屈辱、孤独などに対して、自らを暗に屈原に比することで身の潔白を主張し、また慰めを得ていたのかも知れない」（五三三頁）

つまり菅野氏の一文は「離家」という詩語に『楚辞』の投影があることを見抜かれ、そこから屈原の憂国の情を暗に自分自身にだぶらせる道真の心情に照射させようとされたものであった。[21]

こうした考察の流れに沿った中で巻尾に置かれている「514謫居春雪」を再度考察してみると、新たな事実が浮かび上がってくる。ここに、巻頭と巻尾の二詩を原文のみ並記してみる。

476　五言自詠

離家三四月　落涙百千行
万事皆如夢　時々仰彼蒼
（傍線　筆者）

514　謫居春雪

盈城溢郭幾梅花　猶是風光早歳華
雁足黏将疑繫帛　烏頭点著思帰家
（傍線　筆者）

傍線部の詩語に注目してみる。一句目の「離家」に込められている心情は、菅野氏の前述の論文で既に明らかにされているが、更に「514謫居春雪」と並記してみた時、「離家」に対して「帰家」という語が呼応関係を形作る詩語として配置されている事に気付く。更に「476自詠」の四句目「時々仰彼蒼」の句意を「514謫居春雪」の四句目「烏頭点著」に込められている中国古典籍の『燕丹子』の一文「謬言曰、令二烏頭白、馬生レ角、乃可。丹仰レ天歎焉、即為二之烏頭白、馬生レ角」（傍線筆者）との呼応で考えると、単なる「かの青い天を振り仰いでは我が身の不運を訴える」といった抽象的な解釈からより具体的に燕の太子丹が、秦王より無理難題をふきかけられ、その時に自国の燕に戻りたいがために、必死に天にこの難題の解決を祈った太子丹の姿がそのまま道真のそれにダブると見れば、「（太子丹が天にひたすら祈って烏の頭が白くなり馬に角が生えたので、本当に自国燕に戻るこ

との許可が出たように）私もひたすら天に祈ることで、京に戻れる日を待ちわびたい」といった解釈が可能になってくるように思う。つまり、この「476自詠」と「514謫居春雪」の二詩の呼応がなされることで、より道真の意図するものが増長され、又、心ある読み手にそれを効果的に伝えることが出来ると、道真自身が考慮した上での配置ではなかったのだろうか。

その意図するものとは、既に菅野氏が指摘されている「道真の感傷は単なる個人的悲哀にとどまるものではなかったのである。それは、個人や私を超えて、より広く社会や国家の現状と将来がこれでよいのかという憤激を、底にたたえていたものではなかったろうか。」[22]の一文に尽きると思う。「476自詠」の一句目「離家」で屈原の故事を想起させ、「514謫居春雪」の三・四句目で蘇武や太子丹の故事を想起させているのは、いずれも単なる道真個人の「望京の念」の表出の典拠と見るより、故事の中の人物が、いずれも個人レベルの利益よりも、自国の利益を優先させ、それに自分の命を賭けた所に注目すべきだと思う。換言するならば、「514謫居春雪」を敢えて巻尾に配置した意図の考察として、この作品を道真個人の、どうしても断ち切ることの出来なかった「望京の念」の表出したものという取らえ方は、余りに狭視的な解釈のように思えてならないのである。

確かに、死期の迫ったことを自覚している道真にとって、最後の最後まで自分が放免され京に戻ることが出来ることをひたすら信じていたという見方は、道真の太宰府左遷をどうとらえるのかという点と深く関わるが、それを無実であり、冤罪者としての犠牲を強いられた人物だとする視点から考えれば、万人に受け入れ易い心情と言えよう。筆者もこうした考え方に反論できるだけの学識も持ちあわせていないし、又或る面でそれを否定できるものではないと考えている。

しかし筆者は今まで述べて来たように『菅家後集』の個々の作品の流れの中から道真の心情の変遷をなぞった

時、「514謫居春雪」の詩内容が、道真自身のどうしてもおさえることの出来なかった、あるいは超えることの出来なかった「望京の念」の表出であるとする今までの解釈にどうしても違和感を抱くのである。それは「513偶作」こそが、道真の辞世の句だと考えている筆者にとって、この『菅家後集』が概ね、制作年時順に配列されていることは詩内容の吟味を通しても否定する材料を見出し得ない。とすれば、「513偶作」に続く「514謫居春雪」には道真の詩作品に流れている詩情に深いつながりを指摘することが出来るはずである。ところがこの「513偶作」と「514謫居春雪」の二作品の詩風、詩情が大きく異なり、そこに大きな落差があることは既に繰り返し論じて来たことである。

つまり、ここで道真が敢えて「514謫居春雪」を巻尾に配置した意図は、巻頭に置いている「476自詠」との呼応関係という視点で再考してこそ、初めて見えてくるもののように思う。

それは一言で言うならば、個人レベルの憂いから国家のこれからの行く先を慮る「憂国の情」の表出としてこの詩作品をとらえるべきではないかという事である。「514謫居春雪」の中の「蘇武」「太子丹」が有為の人物として自国に戻ることが出来たこととうらはらに道真の場合は、太宰府謫居で罪をきせられたまま、命を落としていくことが動かし難いものになった事態の中で、敢えてこの中国古典籍の中に出て来る二人と対比させて、日本の国の為政者に向けて、有為の人材であるはずの自分を、みすみす見捨てようとする、又抹消しようとすることが、これからの日本の政情にどれほど悪影響をおよぼすことになるのか、その国の将来に対する深い憂いを巻尾に「514謫居春雪」を敢えて配置することで込めようとしたのではないか。

そこには、道真個人が放免され、帰京を許されるという個人的心情を超えた、もっと大局的な、巨視的なものを、詩人道真の意地をかけて、万感の念を込めて「514謫居春雪」に託していると見るべきではないかと考えた。

そしてそれは「476自詠」という巻頭に置かれている詩作品と照応させてみると、その道真の意図するものがより明らかにされるという、事実を実証してきた。そこにこの『菅家後集』の編纂にかける道真自身の執念というものを垣間みる思いがする。

注

(1) 算用数字は川口久雄校注『菅家文草　菅家後集』(日本古典文学大系)の作品番号を指す。

(2) 川口久雄校注『菅家文草　菅家後集』五二三頁頭注。

(3) 注(2)七三九頁　五一四補注〔一〕。

(4) 「書」

漢書曰、蘇武使匈奴、被留、昭帝即位、求武等、匈奴言武已死、後漢使至匈奴、教者謂單于、言、天子射上林中、鴈足有係帛、言武等在其沢中、單于顧左右而驚、謝漢使曰、武等実在、於是遣還。

(『藝文類聚下』中華書局版一〇四〇頁)

(5) 「鴈」

史記曰、蘇武在匈奴中、昭帝遣使通和、武思帰、乃夜見漢使、教使謂單于曰、天子射上林中、得鴈、足有係帛書、言武等在其沢中、使者如其言、單于大驚、乃使武還。(『藝文類聚下』中華書局版一五七八頁)

(6) 岩波文庫『史記列伝(二)』「刺客列伝　第二十六」一六一頁〈二三〉注。

(7) 「烏」

燕丹子曰。燕太子丹質於秦、秦王遇之無礼、不得意、欲帰、秦王不聴、謬言曰、令烏白頭、馬生角、乃可、丹仰天歎、烏即白頭、馬為生角、秦王不得已而遣之。(『藝文類聚下』中華書局版一五九一頁)

(8) 後藤昭雄『平安朝文人志』(吉川弘文館、一九九三年)「菅原道真の詠竹詩」一〇二頁～一三四頁。

(9) 藤原克己『菅原道真と平安朝漢文学』(東京大学出版会、二〇〇一年)「Ⅲ菅原道真の詩と思想」「4比喩と理知―菅原道真の詩の表現―」二六七頁～二九六頁。

(10) 同右書。二九〇頁。
(11) 菅野禮行校注・訳『和漢朗詠集』（「新編日本古典文学全集」小学館、一九九九年）「巻上・冬・霰」二〇七頁。
(12) 注（2）「490白微霰」頭注・五〇七頁。
(13) 大曽根章介『日本漢文学論集』第二巻（汲古書院、一九九八年）「菅原道真―詩人と鴻儒―」四二頁。
(14) 同右書。四八頁。
(15) 江談抄研究会『類聚本系江談抄注解』（武蔵野書院、一九八三年）「四―11」一二三頁～一二五頁。
(16) 菅野禮行『平安初期における日本漢詩の比較文學的研究』（大修館書店、一九八八年）「第二章　菅原道眞の詩における文學的特質の研究」「四　道眞における「自詠」の詩の一考察」。
(17) 同右書。五三二頁～五三三頁。
(18) 拙稿「菅原道真研究―『菅家後集』全注釈（一）―」（熊本大学「国語国文学研究」第三六号）。
(19) 注（18）四〇頁～四一頁。
(20) 注（16）に同じ。
(21) 注（18）四一頁～四二頁。
(22) 注（16）五三三頁。

第三部

〔初出論文一覧〕

資料編 『菅家後集』【注釈】関連 論文一覧

［初出論文一覧］

本稿所収の各論について初出時の題目・掲載誌及び発表年月は以下の通りである。但し、本稿の各論を展開するために全般にわたり加筆補訂した。また注釈論文については語釈等の考察の頁を大幅に割愛した。

第一部　［作品論］

「1．太宰府謫居一期　昌泰四年（九〇一）春～延喜元年（九〇一）秋」

▼「敍意一百韻」

・「敍意一百韻」（『菅家後集』）全注釈
焼山廣志監修「道真梅の会」篇　大洋印刷　平成20年10月

・菅原道真の大宰府時代の漢詩「敍意一百韻」の構成論考～「「敍意一百韻」の重層構造～
『文科の継承と展開～都文科大学国文科五十周年記念論文集』　勉誠出版　平成23年3月

・菅原道真研究～『菅家後集』全注釈（十四）～「敍意一百韻（その一）1句目～16句目」～
「国語国文学研究」第42号　熊本大学文学部　国語国文学会　平成19年3月

・菅原道真研究～『菅家後集』全注釈(十五)～「敍意一百韻(その二)」17句目～33句目」～
有明工業高等専門学校 紀要 第43号 平成19年3月

・菅原道真研究 ～『菅家後集』全注釈(十六)～「敍意一百韻(その3)」33句～55句～
「国語国文学研究」第43号 熊本大学文学部 国語国文学会 平成20年3月

・菅原道真研究～『菅家後集』全注釈(十七)～「敍意一百韻(その4-1)」57句～80句～
有明工業高等専門学校紀要 第44号 平成20年10月

・菅原道真研究 ～『菅家後集』全注釈(十八)～「敍意一百韻(その4-2)」81句～120句～
有明工業高等専門学校紀要 第45号 平成21年10月

・菅原道真研究 ～『菅家後集』全注釈(十九)～「敍意一百韻(その5)」121句～150句～
国語国文学研究(熊本大学文学部)第45号 平成22年2月

・菅原道真研究 ～『菅家後集』全注釈(二十)～ 「敍意一百韻(その6)」151句～180句～
有明工業高等専門学校紀要 第46号 平成22年10月

・菅原道真研究 ～『菅家後集』全注釈(二十一)～「敍意一百韻(その7)」181句～200句～
国語国文学研究(熊本大学文学部)第46号 平成23年3月

▼「哭奥州藤使君」

・「哭奥州藤使君」他一編(『菅家後集』)全注釈(二)
焼山廣志監修 「道真梅の会」篇 大洋印刷 平成25年1月

・菅原道真研究 〜『菅家後集』全注釈(二十四)〜「哭奥州藤使君(その1)」1句〜40句〜
有明工業高等専門学校紀要 第47号 平成24年10月

・菅原道真研究〜『菅家後集』全注釈(二十五)〜「哭奥州藤使君(その2)」41句〜80句〜
国語国文学研究(熊本大学文学部)第48号 平成25年2月

▼「秋夜」

・菅原道真研究〜『菅家後集』全注釈(二)〜「秋夜(九月十五日)」「東山小雪」二首〜
有明工業高等専門学校紀要 第37号 平成13年1月

▼「讀開元詔書」

・「哭奥州藤使君」他一編『菅家後集』全注釈(二)
焼山廣志監修 「道真梅の会」篇 大洋印刷 平成25年1月

・菅原道真研究〜『菅家後集』全注釈(二十三)〜「讀開元詔書」一首〜
国語国文学研究(熊本大学文学部)第47号 平成24年2月

▼「慰少男女」

・菅原道真研究 〜『菅家後集』全注釈(二十二)〜「慰少男女」一首〜
有明工業高等専門学校紀要 第46号 平成23年10月

「2. 太宰府謫居二期　延喜元年(九〇一)初冬～延喜二年(九〇二)早春」

▼「東山小雪」

・菅原道真研究～『菅家後集』全注釈(二)～「秋夜(九月十五日)」「東山小雪」二首～
有明工業高等専門学校 紀要 第37号 平成13年1月

▼「雪夜思家竹」

・菅原道真研究～『菅家後集』全注釈(六)～「雪夜思家竹」「歳日感懐」二首～
有明工業高等専門学校 紀要 第39号 平成15年1月

▼「梅花」

・菅原道真研究～『菅家後集』全注釈(七)～「聴寺鐘」「梅花」「山僧贈杖、有感題之」三首～
「国語国文学研究」第38号 熊本大学文学部 国語国文学会 平成15年3月

「3．太宰府謫居三期　延喜二年(九〇二)春～延喜二年(九〇二)冬」

▼「官舎幽趣」

・菅原道真研究『菅家後集』「504官舎幽趣　六韻」の詩情の一考察
小久保崇明編『日本語日本文学論集』笠間書院　平成18年7月

▼「偶作」

・菅原道真研究～『菅家後集』全注釈(十)～「九月尽」「偶作」二首～
有明工業高等専門学校　紀要　第41号　平成17年1月

第二部　［編纂事情考］

・『菅家後集』編纂事情の一考察～巻尾の詩「謫居春雪」の解釈を通して～
和漢比較文学会編『菅原道真論集』勉誠出版　平成15年2月

第三部 資料編 〔『菅家後集』【注釈】関連 発表論文一覧〕（先述の初出論文と重複するものは省く）

【注釈】

・菅原道真研究～『菅家後集』全注釈（一）「自詠」「聞旅雁」二首～
「国語国文学研究」第36号熊本大学文学部国語国文学会　平成13年2月

・菅原道真研究～『菅家後集』全注釈（二）～「秋夜〈九月十五日〉」「東山小雪」二首～
有明工業高等専門学校紀要　第37号　平成13年1月

・菅原道真研究～『菅家後集』全注釈（三）～「不出門」「九月九日口号」二首～
「九州大谷国文」第29号九州大谷短期大学国文学会　平成13年3月

・菅原道真研究～『菅家後集』全注釈（四）～「秋晩題白菊」「晩望東山遠寺」二首～
有明工業高等専門学校紀要　第38号　平成14年1月

・菅原道真研究〜『菅家後集』全注釈(五)〜「風雨」「燈滅二絶〈1〉」「燈滅二絶〈2〉」三首〜
「国語国文学研究」第37号 熊本大学文学部国語国文学会　平成14年2月

・菅原道真研究〜『菅家後集』全注釈(六)〜「雪夜思家竹」「歳日感懐」二首〜
有明工業高等専門学校紀要 第39号　平成15年1月

・菅原道真研究〜『菅家後集』全注釈(七)〜「聴寺鐘」「梅花」「山僧贈杖、有感題之」三首〜
「国語国文学研究」第38号熊本大学文学部国語国文学会　平成15年3月

・菅原道真研究〜『菅家後集』全注釈(八)〜「読家書」「南館夜聞都府礼仏懺悔」「二月十九日」三首〜
有明工業高等専門学校紀要 第40号　平成16年1月

・菅原道真研究〜『菅家後集』全注釈(九)〜「題竹床子」「秋夜」二首〜
「国語国文学研究」第39号熊本大学文学部国語国文学会　平成16年3月

・菅原道真研究〜『菅家後集』全注釈(十)〜「九月尽」「偶作」二首〜
有明工業高等専門学校紀要 第41号　平成17年1月

・菅原道真研究〜『菅家後集』全注釈(十一)〜「問秋月」「代月答」二首〜
「国語国文学研究」第40号熊本大学文学部国語国文学会　平成17年3月

・菅原道真研究～『菅家後集』全注釈(十二)～「問種菊」一首～

「国語国文学研究」第41号 熊本大学文学部国語国文学会　平成18年3月

・菅原道真研究～『菅家後集』全注釈(十三)～「雨夜　十四韻」一首～

有明工業高等専門学校紀要 第42号　平成18年7月